

「復興10年総括検証ワークショップ」報告書（案）の概要

1 はじめに

阪神・淡路大震災からの復興にあたっては、わが国が成熟社会に向けて大きな転換期を迎えるなか、「共生」の理念の下、県民の参画と協働による様々な取り組みが展開されてきた。

こうした10年間の復興過程の検証にあたっては、復興の主役である県民の目から見て、何ができて何ができなかったのか、将来に生かすべきことは何かといったことを把握する必要がある。

そのため、被災地を5地域に分けて地域別ワークショップを開催するとともに、それを踏まえて総括ワークショップを開催することとし、参加者を公募した。

2 ワークショップの視点・手法等

(1) テーマ

「10年間を振り返って」

- ・復興10年で被災地ができたこと、できなかったこと

「将来に向けて」

- ・将来に向けて生じていくべきこと、発信していくべきこと

(2) ワークショップの手法

地域別ワークショップ

参加者を5～6班に振り分け、2つのテーマ（「10年間を振り返って」、「将来に向けて」）について、各参加者が意見を出し合うグループワークを行った。

参加者が記入した意見（1人3項目程度）について、KJ法により集約し、班毎のまとめを作成した。さらに、ファシリテーターの進行のもと、各班のまとめを会場全体で集約し、地域全体の意見としてとりまとめた。最後に、参加者全員がそれらの意見のうち、重要と思うものに投票し、順位付けを行った。

総括ワークショップ

5地域の代表者が集まり、地域ワークショップで集約された意見の確認及び修正作業を行った後、ファシリテーターの進行のもと、参加者全員でそれらを踏まえ、被災地全体の意見として集約していった。

最後に、参加者全員が集約した意見のうち、重要と思うものに投票し、順位付けを行った。

* ファシリテーター（進行役）
立木茂雄（同志社大学教授、復興10年委員会委員）

(3) ワークショップの開催状況

日 時	地 域	会 場	参加人数
平成16年 6月5日(土) 14:00~17:00	淡 路	東浦町立サザインホール	42名
6月6日(日) 10:00~13:00	阪神北	宝塚市西公民館	44名
6月6日(日) 14:30~17:30	阪神南	西宮市民交流センター	44名
6月12日(土) 10:00~13:00	神 戸	県立神戸学習プラザ	53名
6月20日(日) 14:00~17:00	明石・三木	明石市立産業交流センター	45名
7月4日(日) 14:00~17:00	総 括	人と防災未来センター	51名

3 ワークショップの実施結果

(1) 地域別ワークショップの結果

「10年間を振り返って」

・復興10年で被災地ができたこと、できなかったこと

各地域で集約された意見のうち、「防災意識は高まったが、次の災害への備えは十分でない」(5地域のうち3地域で1位)、「地域のつながりが広がった」、「ボランティア活動が活発になった」、などは、各地域とも共通して上位となっている。地域のつながりについては、一方で「一時に比べれば薄まりつつある」、「新しいまちでは不足している」、「新旧住民のつながりがまだ不十分である」といったこともあわせて指摘されている。

また、必ずしも上位にはなっていないが、心のケアが不十分とか心の復興が残っているといった意見は、すべての地域で顔を出しているほか、ハード面の整備は進んだが、まちの景観に地域差がみられるなどの意見もある。

経済面での復興が途上といった意見も出ているが、阪神南地域では4位であるのに対し、阪神・淡路北や明石・三木地域では最下位となっているなど、地域間のばらつきが大きい。

その他、淡路地域では、「復興整備事業は進んだが、昔の思い出の町並みが消えた」(3位)、阪神北地域では「行政のできたこと、でき

なかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活発にしてほしい」(2位)が上位になっている。

地域別ワークショップの主な意見 「10年間を振り返って」

順位	課題	阪神北		阪神南		神戸		明石・三木		
		票数	意見	票数	意見	票数	意見	票数	意見	
1	防災意識はめばえたが、次の災害への備えはまだ十分でない	34	ボランティア、NPOなどによる市民力が高まった。	30	地域ネットワーク、グループ活動やコミュニティのつながりは向上したが、新しいまちでは不足している。	33	防災への意識が高まったが、減災への備えや防災意識を継承することがまだまだできていない。	31	家族や地域の防災意識が芽生え、災害の備えが進んでいるが...	36
2	地域のつながりが広がったが、震災を知らない人が増え、つながりも一時に比べれば薄まりつつある。	30	行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活発にしてほしい。	29	震災体験で得た意識が風化して、備えや防災対策が不十分だ。	31	ボランティア活動の意識が高まり、活性化し、個人でも参加できるようになった。	25	震災を機に復興支援ボランティア活動がはじまり、ネットワークがはじまった。	32
3	復興整備事業は進んだが、昔の思い出の町並みが消えた	30	震災の記憶が風化し、危機意識がうすれている。	28	防災意識は向上したが、今後の災害に対する備えはまだだだ。	27	一部では地域コミュニティや新しいネットワークが広がっているが、新旧住民のつながりがまだ不十分である。	19	非常持ち出し袋・心臓蘇生法、震災を忘れない行事も含めて、防災や安全対策に取り組みようになった。	30
4	ボランティア活動が活発になった	26	コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた。	27	新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ。	23	震災のときに助ましや人の輪の大切さが身にしみたが、まだまだ心の復興が残っている。	19	弱者への生活援助や高齢者福祉への取り組みを考えるべきである。	28
5	災害直後は知識や経験もなかったために、きめの細かい初期対応や情報の受け渡しができなかった。	21	10年後検証をきっかけに災害時対策を考え直す。	23	ボランティア精神のめばえ	22	震災の記録と記憶を伝えなければならない。	19	震災によって隣近所のコミュニケーションが高まり、コミュニティの共助精神ができた。	23
6	住宅の復旧はかなり早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。	19	防災意識が高まった。	22	ほぼハードの復旧はできたが、まだまだなところもある。	19	行政の取り組みが遅れている。	19	人の心や精神的な復興はまだできていない。	22
7	道路、橋は整備されたけれども、地域経済はまだ復興途上	13	心のケアが不十分である。	16	制度未整備が大きいが行政に頼らず自ら行動する大切さが実感できた。	18	建物やまちの景観の復興に地域差がみられる。	18	災害復旧や町並みの整備は進み、ビルや住宅ができたが、環状鉄道やため池の改修など、できなかったこともある。	20
8	震災直後もつとケアがあればよかったし、今でも心のケアを必要とする人もいる。	11	自助は達成されたが、互助は進みつつある。	9	震災の経験を発信し、復興から次のステップに進みだした。	7	災害弱者といっても一くりにできない。個別の理解に基づくケアが必要だ。	18	震災現場の体験への思いが今もある。	10
9	まだ環境整備が進んでいない。	10	バリアフリー住宅やインフラ整備ができた。	9	景観や芸術文化などまちの復興が遅れている。	6	10年前は若かったが、住民の自治的なリーダーの育成が必要である。	16	失業者が多く、仕事がなくなった。中小企業の復興もまだだ。	5
10	震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題が生活面に影響を与えている。	9	経済の再建は難しい。	5	健康第一のいちが大切だとわかった。	5	産業や家計の復興ができていない。	12		
11							この10年間の震災体験を踏まえ、みんな頑張って生きている。	12		
12							住宅の復興はまだら模様	9		

「将来に向けて」

・将来に向けて生かしていくべきこと、発信していくべきこと

各地域で集約された意見のうち、「住民同士、地域のつながりを大切にしよう」など、地域のつながり、コミュニケーション、交流といったことの大切さを指摘する意見が5地域のうち、3地域でトップを占めた。

また、自助、共助、公助の相まった防災面の取り組みが大切といった防災対策に関する意見や、ボランティア活動の充実などは、多くの地域で共通して上位になっている。

その他、阪神南地域で1位となった「震災で得た経験や知恵を風化

させることなく、継承し、発信し、お返しをしていこう」といった意見も各地域で比較的上位になっている。神戸地域では「災害時に弱者には特別な対応が必要だ」という意見が1位になっており、これは同じく6位の「高齢者や弱者の多い住宅への様々な支援の取り組みが必要だ」という意見とあわせて、この地域の特徴といえる。

また、阪神南地域では、「公共物や住宅の耐震性を高めていくことが、安心して生活できるまちづくりには欠かせない」という意見が4位になっている。さらに、淡路地域では、「被害抑止等、被害軽減等、災害対応、復旧・復興のすべての局面で行政は力を入れてほしい」という意見が2位になっている点が、他地域にはみられない特徴である。

地域別ワークショップでの主な意見「将来に向けて」

順位	淡路	阪神北		阪神南		神戸		明石・三木	
		票数	意見	票数	意見	票数	意見	票数	意見
1	住民同士・地域のつながりを大切にしよう	37	地域のことは市民が考え行動することから出発する。そのためには、日ごろからのコミュニケーションが大切だ	36	震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承し発信し、お返しをしていこう	36	災害時に弱者には特別な対応が必要だ。	35	地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう。
2	被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての局面で行政は力を入れてほしい	29	災害に強いまちづくりをしよう	35	災害に強い地域のつながりを強めリーダーを育てることが大切だ	32	1.17の体験を通し、今後も命の大切さを継承し、発信していくことが大切だ。	34	ボランティア精神を風化させずに、人間関係を大切にしていく感謝の気持ちを忘れないでいこう。
3	日ごろから自分たちでできる備えを実践しよう	27	ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ	33	普段からの地域の人の和やつながりを地域の財産にしよう	23	様々な地域活動(ボランティア・NPO・自治会・CIB)がしやすい環境を整えていくことが大切だ。	32	震災体験や教訓を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう。
4	災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる	27	地域の中でのふれあいや助け合いをさらに深めつづけていこう	31	公共物や住宅の耐震性を高めていくことが、安心して生活するまちづくりには欠かせない	21	地域の中の新旧・世代を越えたつながりやきずなをつくっていこう。	32	災害に強いライフラインを維持することの重要性を発信していこう。
5	ボランティアの受け入れや組織化を今後も充実させていくことが大切だ。	25	防災も福祉も行政・市民の協働が基本だ	28	防災は自助・公助の役割分担が大事だ	21	災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。	29	防災が効果的であるためには、自助・共助・公助の組み合わせが大切だ。
6	震災体験、復興体験の継承、発信をしていこう	21	被災地として、被災者としての体験を発信し、次世代に継承していこう	18	自助・自立・自助努力が大切だ	19	高齢者や弱者の多い住宅への様々な支援の取り組みが必要だ。	22	地域問題の解決のためには、県民と行政の参画と協働が重要だ。
7	安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう	17	国境を越えた防災のネットワーク作りにより市民もかわろう	12	災害対応時の情報発信や救助・救援の仕組みをさらに良いものにしていこう	15	こどものしつけは家だけでなく、地域もかわろう。	21	災害に強く地域の景観を生かした街づくり・都市環境整備を県民は求めている。
8	この検証が復興の導きとなりえないように	9	災害対応時に自分たちができることがある。	4	軍中心ではなく環境や芸術文化に配慮した人間中心のまちを作りたい	10	早く安全・安心で豊かなまちにしたい。	18	外出困難な人達が自由にまちに出て行ける環境を整備しよう。
9	これから大切にしていきたい人生の価値を考えたい	4	被害抑止策を進めよう	2	県民が行政に望むことは、住宅を含む公的な支援システムをさらに充実させることだ	7			
10					家庭でできる災害への備えがある	7			
11					ボランティアをこれからも活性化していこう	6			

(2) 総括ワークショップの結果

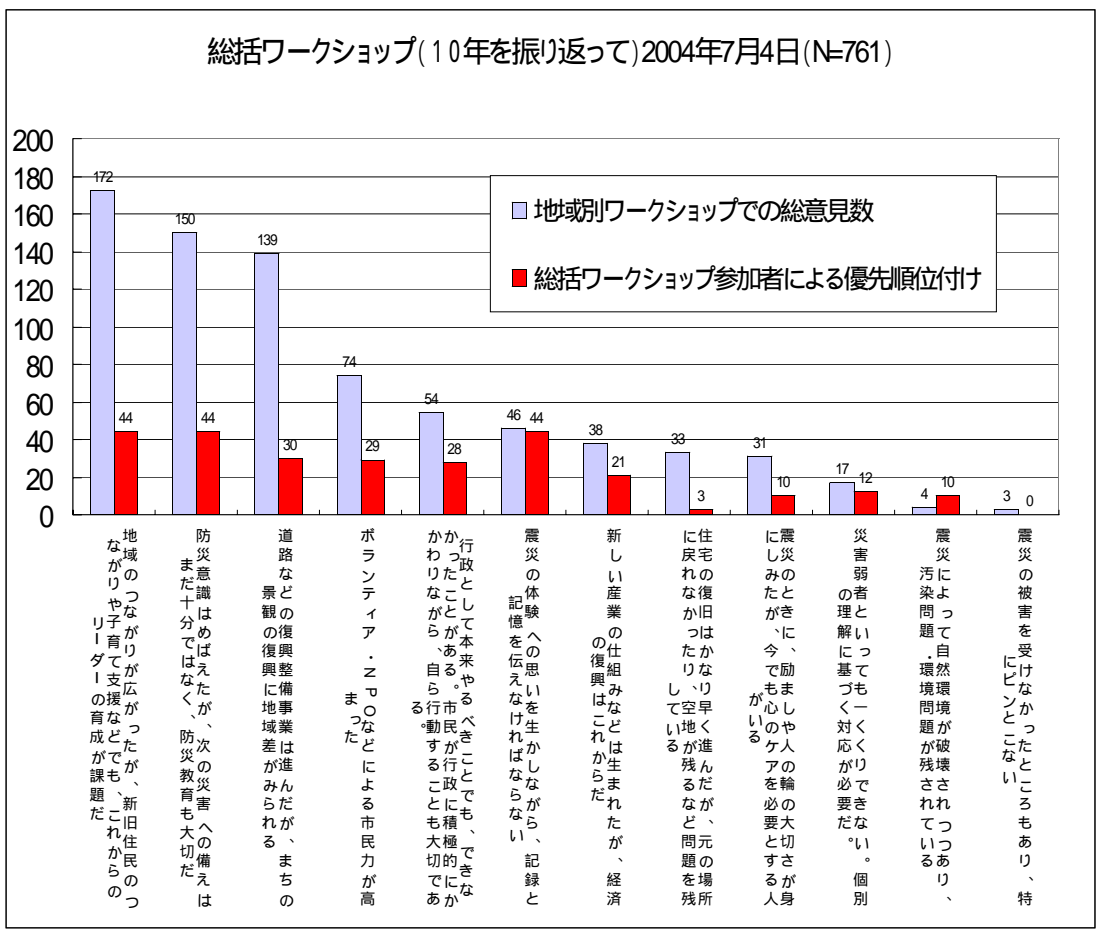
「10年を振り返って」

・復興10年で被災地ができたこと、できなかったこと

各地域のまとめを集約した結果、12の項目が被災地全体の意見としてとりまとめられた。投票による順位付けの結果、地域や住民のつながり及びリーダーの育成、災害への備えや防災教育の重要性、震災の経験・教訓の継承・発信、まちの景観の復興に対する地域格差などの項目が上位となっている。

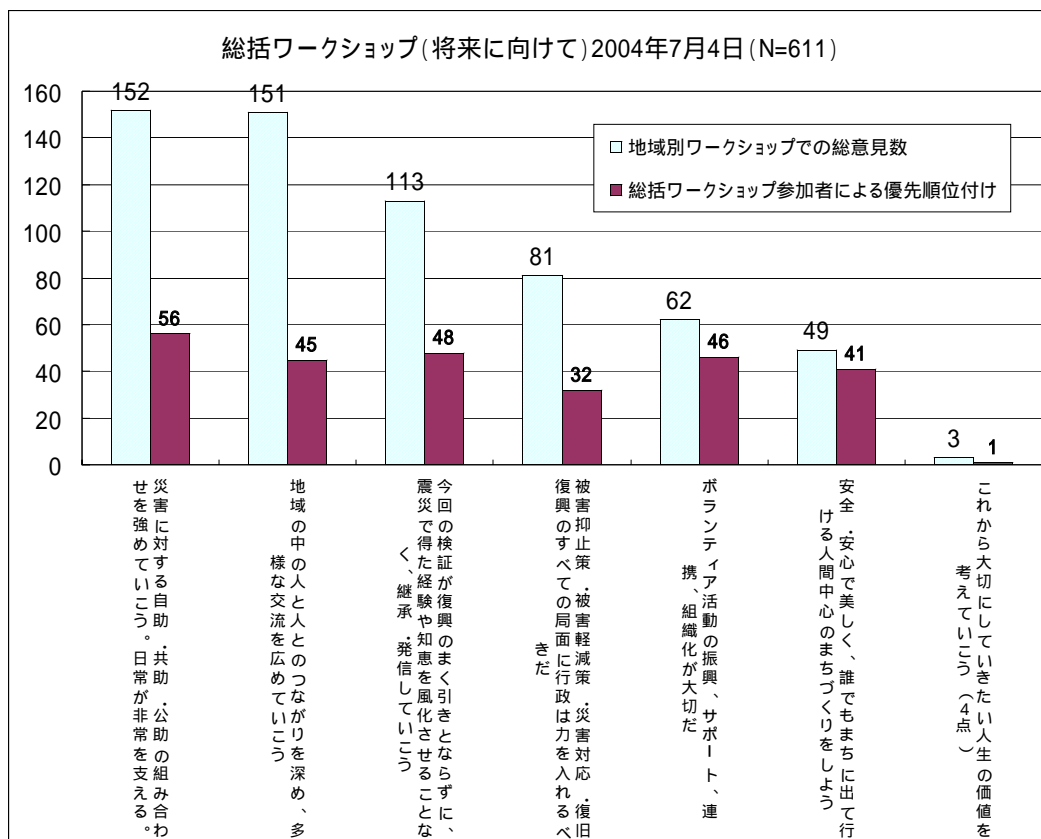
、 の項目については各地域でも、上位となった項目で、総括ワークショップにおいても同様の傾向がみられた。 の震災の経験や教訓の継承・発信については、各地域で、意見数、投票数ともにそれほど多くはなかったものの、総括ワークショップでは、上位になっている。

この他、ボランティア、NPOなどによる市民力が高まったとする意見も多かったほか、経済の復興、心のケアの問題も顔を見せている。



「将来に向けて」

・将来に向けて生かしていくべきこと、発信していくべきこと
各地域のまとめを被災地全体の意見として集約した結果、7つの項目にとりまとめられた。投票による順位付けの結果、投票数が最も多かったのは、「自助・共助・公助の組み合わせの強化、日常が非常を支える。」という意見で参加者のほとんどがこの項目を重要としている。次に、「震災で得た経験や知恵の継承・発信」、「ボランティア活動の強化・支援」、「人のつながりを深め、多様な交流の展開」が上位になっている。これらの項目については、各地域によって順位付けに若干のばらつきはあるものの、概ね上位に位置づけられている。



4 まとめ

ワークショップで出された様々な意見について大きくまとめると、地域のつながりやコミュニティづくりの大切さ、防災意識の高まりを具体的取り組みに結びつけていく必要性、震災の経験・教訓の継承・発信といったことがあげられる。また、具体的対策にあたっては、行政の取り組みや一人ひとりの備えの実践とあわせて、自助、共助、公助の組み合わせの大切さも

指摘されている。

こうしたことは、阪神・淡路大震災の教訓として指摘される「共に生きることの大切さ」、「災害への備えの大切さ」といったことに通じるものであり、震災の経験・教訓を生かした今後の成熟社会に向けた取り組み方向が、被災地の県民意見として示されているのではないかと考えられる。

もとより、個々にみていくと投票数や意見のカード数の多寡にかかわらず、貴重な意見が数多く出されており、それらは、各地域ごとに親和図として記録に残されている。これらの意見を含めて、各方面での具体の取り組み方策を検討するなかで活用され、今後に生かされていくことが望まれる。

〔参考資料〕

「復興10年総括検証ワークショップ」報告書

「復興10年総括検証ワークショップ」
報 告 書（案）

平成16年 7 月

兵庫県

目 次

1 . はじめに	1
2 . ワークショップについて	2
1) ワークショップの概要	2
2) 地域別ワークショップの進め方について	3
3) 総括ワークショップの進め方について	5
3 . 各地域ワークショップのまとめ	6
1) 淡路地域	7
2) 阪神北地域	19
3) 阪神南地域	31
4) 神戸地域	43
5) 明石・三木地域	55
4 . 総括ワークショップのまとめ	67
参考資料	
アンケート.....	85

1. はじめに

兵庫県では、阪神・淡路大震災から10年を迎えるのを機に、復興10年総括検証・提言事業を推進している。その一環として、震災復興の取り組みの成果や課題等について県民の意識等を把握するため、兵庫県下の被災地である淡路、阪神北、阪神南、神戸、明石・三木の5地域において、地域別および総括ワークショップを2004年6月から7月にかけて実施した。

今回の地域別ワークショップでは、「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと」および「将来生かしていくべきこと」を10人前後の班で話し合い、それぞれを地域ごとにまとめ、重要だと思う項目に得点をつけるという順位付け作業を行った。その後、地域の代表者による総括ワークショップで、全体のまとめとなる作業を行った。

地域別ワークショップでは5地域で延べ228名、総括ワークショップでは地域の代表者51名の参加があり、「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと」では761件、「将来生かしていくべきこと」では611件の意見が出るなど、活発な話し合いが行われた。

ここに、その概要を報告する。

2. ワークショップについて

1) ワークショップの概要

兵庫県下の被災5地域で行われた地域別および総括ワークショップの実施状況は、以下のとおりである。

・テーマ

「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、将来に生かしていくべきことは？」

・参加者

高校生以上の各地域在住、在学、在勤者（公募）

・進行体制

全体総括 立木 茂雄（同志社大学文学部 教授）

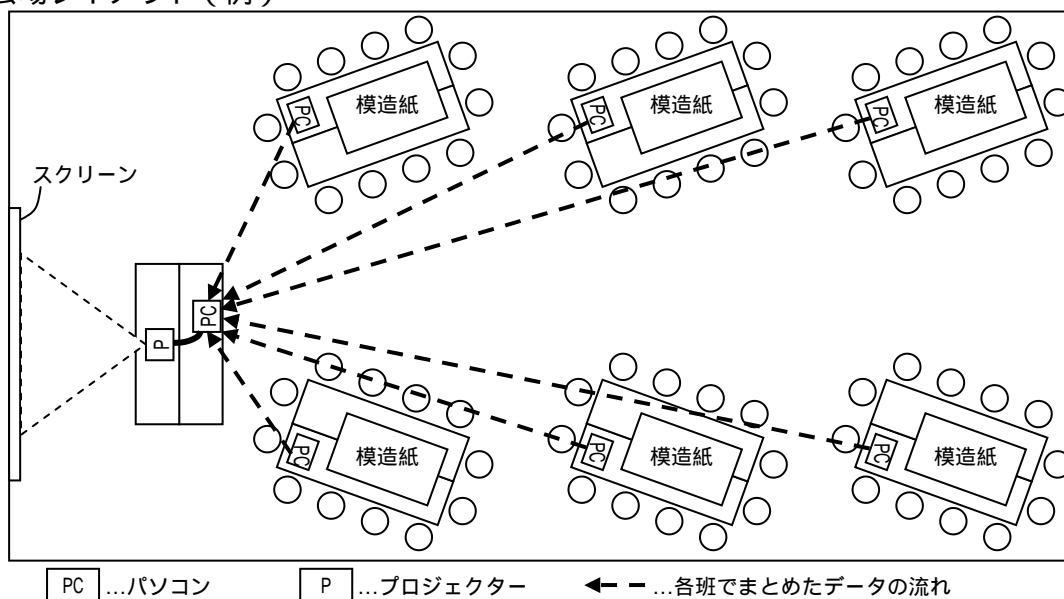
進行役 黒宮亜希子（同志社大学大学院生）、吉原 誠（株式会社 コー・プラン）

班の進行 同志社大学文学部3回生

・開催状況

日時	開催地域	会場	参加人数	班の数
平成16年 6月5日（土） 14：00～17：00	淡路	東浦町立 サンシャインホール	42名	5
平成16年 6月6日（日） 10：00～13：00	阪神北	宝塚市西公民館	44名	6
平成16年 6月6日（日） 14：30～17：30	阪神南	西宮市民交流センター	44名	6
平成16年 6月12日（土） 10：00～13：00	神戸	県立神戸学習プラザ	53名	6
平成16年 6月20日（日） 14：00～17：00	明石・三木	明石市立 産業交流センター	45名	6
平成16年 7月4日（日） 14：00～17：00	総括	人と防災未来センター	51名	5

・会場レイアウト（例）



2) 地域別ワークショップの進め方について

淡路、阪神北、阪神南、神戸、明石・三木での地域別ワークショップは、参加者が会場に来られた順番に班を振り分け、以下の手順で行った。なお、各班には、同志社大学文学部3回生の学生が数名入り、班の作業の進行のお手伝いや出された意見をノート型のパソコンに入力するという作業を行った。

・ステップ0：「ワークショップとは？」

最初に、ワークショップとはどのようなものか、どのように進めるかを簡単に説明し、参加者の緊張をほぐすため、アイスブレイク（フリップ式自己紹介）を行った。

「フリップ式自己紹介」とは、テレビのクイズ番組を応用したものである。まずA4サイズの色紙を参加者に1枚ずつ配り、それを2つ折りにし、記入できる面を4つ作る。次に、全体の進行役



班ごとでの自己紹介の様子

が、出した質問に参加者が回答者として自分の答えを記入する。そして、一斉に自分の前にかかげ、班の中で順番に自己紹介をしていくというものである。

今回の質問は、「お名前、どこから来たか」、「おにぎりの具といえば?」、「私ってこんなヒト?」であり、班そして会場の雰囲気をもたせることが目的である。

・ステップ1：「10年間を振り返って」



出された意見はパソコンに入力していく

まず参加者全員にカードを3枚ずつ配る。県民として「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと」をカード1枚につき1つのことを書いてもらう。3枚のカードは、すべて「できたこと」でも、「できなかったこと」でもかまわないし、3枚で足りなければさらに書いてもらった。

全員がカードを書き終わったら、班内で1人1枚ずつ読み上げながら、模造紙の上に置いてい

く。この際、出された意見は、1枚ずつパソコンに入力していく。また、出された意見で同じような内容のものは、近くに集めて、最終的にできあがったグループごとに内容をわかりやすく書いたタイトルをつけていく。

このようにしてできあがった班ごとのまとめを班の代表者が発表しながら、会場全体で意見を共有する。



自分たちの班で出された意見を発表する

・ステップ2：「将来に向けて」

ステップ1と同様に参加者にカードを3枚ずつ配る。このステップでは、県民として「被災地が将来に向けて生かすべきこと、世界に向けて発信していくべきこと」を書いてもらい、ステップ1と同様に、班内で発表した意見は、パソコンに入力しながら、まとめていき発表を行った。この段階になると、ほとんどの人が打ち解け活発に意見が出るようになった。



代表者による会場意見のまとめ

また、この作業と並行するかたちで、ステップ1の発表者に前に出てきてもらい、会場前面にプロジェクターで映し出したステップ1での各班のまとめを見ながら、会場全体の意見としてまとめあげていく作業を行った。

・ステップ3：「まとめ」



全員が参加して意見をまとめる

ステップ1のまとめは各班のステップ1の発表者が行ったが、ステップ2のまとめは会場全体で行った。会場前面にプロジェクターで映し出されたステップ2の各班のまとめを見ながら、進行役の同志社大学 立木 茂雄 教授とともに意見を出し合い、同じ内容の意見をまとめて、内容をわかりやすく表したタイトルをつけて地域のまとめをつくりあげていった。

その後、参加者に丸シールを配り、ステップ1、2のまとめそれぞれについて5つずつ重要と思われる意見を選び、順位付けを行った。



ステップごとのまとめにシールを貼っていく

・最後に

ステップ1および2のまとめをプリンターで打ちだし、参加者全員に配布した。また、総括ワークショップに出席する地域の代表を参加者の中から各班2名ずつ選び、ワークショップを終了した。

3) 総括ワークショップの進め方について

各地域の代表者が集まって開催した総括ワークショップは、地域ごとに班を編成し、以下の手順で行った。今回も地域別ワークショップと同様に、各班に同志社大学文学部3回生の学生が数名ずつ入り、班の作業の進行のお手伝いおよびパソコンへの入力作業を行った。

・ステップ0：アイスブレイク

最初に参加者がリラックスし、ワークショップに望む雰囲気を高めるために、地域別ワークショップと同様にフリップ式自己紹介を行った。質問項目は、「お名前、どこから来たか」、「お味噌汁の具は?」、「私ってこんなヒト?」の3つである。

・ステップ1：各地域の成果の確認(『10年間を振り返って』)

まず自分たちの地域のまとめと模造紙に貼られているカードを見ながら、誤字や抜けている項目がないか確認した。また、カードの内容と分類されているグループのタイトルでおかしいものがあれば、修正した。修正された内容は、各班のパソコン上でデータへ反映した。



各地域での修正作業の様子

・ステップ1.5：全地域のまとめ



旗を使って項目のタイトルを全員で検討した

次に各地域で行った全体のまとめを会場全体、つまり全地域で行った。各地域のパソコンで修正されたデータを1つのパソコンに集約し、そのデータをプロジェクターで会場前面に映し出しながら、同じような意見はまとめて、タイトルをつけるという手順で行った。

・ステップ2：各地域の成果の確認(『将来に向けて』)

・ステップ2.5：全地域のまとめ

ステップ2および2.5については、テーマを『将来に向けて』とし、ステップ1および1.5と同様の手順で、カードの見直し、修正などを行い、それをパソコンのデータに反映し、1つのパソコンに集約、会場全体でのまとめという手順で行った。



重要と思われる項目5つずつ投票を行った

最後に、ステップ1.5および2.5で作成した全体のまとめで重要だと思われる項目を5つずつ選び、丸シールで順位付けを行った。

3 . 各地域ワークショップのまとめ

この章では、兵庫県内の5地域（淡路、阪神北、阪神南、神戸、明石・三木）で行われた地域別ワークショップについて、ステップ1「震災後10年間を振り返って」とステップ2「将来に向けて」の各班および全体の内容をまとめた。

また、各地域で行われた順位付けの結果とカードの枚数をグラフ化し、各地域でどのような意見の得点が高かったのか、またどのような意見が多く出されていたのかについてもまとめた。

・各地域の参加者数とカード枚数

日 時	地域・会場	参加者数	ステップ1	ステップ2
平成16年6月5日(土) 14:00～17:00	淡路地域 東浦サンシャインホール	42名	125枚 (2.98枚/人)	104枚 (2.48枚/人)
平成16年6月6日(日) 10:00～13:00	阪神北地域 宝塚市西公民館	44名	140枚 (3.18枚/人)	118枚 (2.68枚/人)
平成16年6月6日(日) 14:30～17:30	阪神南地域 西宮市民交流センター	44名	154枚 (3.50枚/人)	130枚 (2.95枚/人)
平成16年6月12日(土) 10:00～13:00	神戸地域 県立神戸学習プラザ	53名	216枚 (4.08枚/人)	155枚 (2.92枚/人)
平成16年6月20日(日) 14:00～17:00	明石・三木地域 明石市立産業交流センター	45名	126枚 (2.80枚/人)	104枚 (2.31枚/人)
合 計		228名	761枚 (3.34枚/人)	611枚 (2.68枚/人)

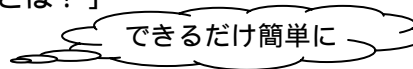
1) 淡路地域

日 時：平成16年6月5日(土) 14:00~17:00


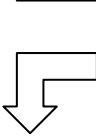
会 場：東浦町立サンシャインホール/ホール

テ ー マ：「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、
将来に生かしていくべきことは？」

14:00 はじめに
(5分) ・あいさつ、趣旨説明

14:05 ステップ0：「ワークショップとは？」
(20分) ・ワークショップの進め方  できるだけ簡単に
・アイスブレイク(自己紹介)


14:25 ステップ1：「10年間を振り返って」
(40分)
被災地が ・震災後10年間でできたこと、できなかったこと

15:05 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ 
~休憩~ 

主体感覚が大切！
『あなたが県民として』

各班から1人ずつ
代表者を選出する

15:25 ステップ2：「将来に向けて」
(40分)
被災地が { ・将来に向けて生かすべきこと
・世界に向けて発信していくべきこと

ステップ1の整理
(40分) 

16:05 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ

16:15 ~休憩~
(5分)

ステップ1、2の
両方について行う。

16:20 ステップ3：「まとめ」
(35分) ・各班の成果を整理

・重要だと思う別々の
島にシールを貼る

16:55 最後に
(5分) ・総括ワークショップの案内と代表者の決定

17:00 終了  ・各班2人ずつ

・淡路地域ワークショップの様子



会場の東浦サンシャインホール外観



緊張の中、ワークショップが始まった



アイスブレイクでようやく笑顔が出始める



出された意見はパソコンに入力する



班で話し合った内容を発表する



代表者によるまとめ



全員参加での意見のまとめ



丸シールで重要だと思う項目に投票する

・ステップ1：各班のまとめ

10年間を振り返って(2004年6月5日 淡路1)

ボランティア活動はできたよできなかったこと(16)

仮設住宅でのボランティア活動ができた(16)	ボランティア活動を広げることができた。(16)
災害発生時の助け合いができた(16)	実際のボランティア活動等に個人として参加できなかった。(16)

震災の時、一人暮らしをしていたので、10年と経っても特にピンとこない(16)

緊急輸送体制 物流の運送、船での輸送ができていない(16)

元に戻りたい被災者の声が届かなかった。(元の家に住みたい、戻りたい) (16)

仮設住宅から避難住宅へ移った人の支援が継続できなかった(16)	災害避難住宅(仮設)で元々の住んでいた場所へ戻ることができた(16)
震災保険ができていなかった(16)	人口の減少をくい止めることができなかった(16)

情報伝達手段が問題(災害時の情報受信に問題があった)(16)

災害の状況が伝わらなかった(本質的なもの)(16)	災害時の連絡手段の確保ができていない(16)
情報の伝達方法の問題である(16)	

地震予知の通報(16)

自宅が半壊になっているのがまだに直していない(16)

地域のコミュニケーションができたRできてない(16)

人との交流ができた(16)	人との交流が以前より少なくなった(16)
地域のよさについて考えることができた(16)	

震災に対する心構えができていない(16)

災害に対する一人一人の心構えが深まった(16)	災害時の準備品の準備ができていない(16)
防災に対する心構えを常に持つことはできていない(16)	

災害弱者(具体的には障害者)に対応できていない(16)

住みやすいまちづくりができていない。バリアフリーユニバーサルデザインなどができていない(16)	障害を持つ人たちの災害時の受け場ができていない(16)
---	-----------------------------

災害を前提としたインフラが整備できた(16)

建物の防災対策ができた。(16)	道路整備等が進んだ(16)	道路幅ができた。(16)
避難道路の増設ができた(16)		防災無線ができた(16)

10年間を振り返って(2004年6月5日 淡路2)

住環境整備ができた。(20)

緑地整備、公園、道ができた(20)	広い道路ができた。(20)
住環境整備事業で生活道路、公共下水道事業で住宅地道路、排水設備が着てきた。(20)	防災記念公園ができた。(20)

まちづくり委員など、住民がまちづくりに参加する機会ができた。(20)

震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題が生活面に影響を与えている(20)

海軍線の海面上昇、埋戻工事の費用に泣いているのでは？(20)	有害な廃棄物に付いた化学物質が多くなっている(20)
水の大変。汚染物により地下水まで汚れている。(20)	

ボランティア活動のめばえ、実施。(20)

ボランティア活動に参加するようになった。(20)	海防団での人命救助ができた(20)
田舎での交流ができていて感動しやすい。1軒でいる場所などの把握(20)	震災あまりお付き合いがない方たちを中心に協力し、あえたこと(ボランティア精神が生まれた)(20)
他の被災地への支援(物資、寄付等)ができた。(20)	

住宅再建をいそぎすぎて使えるものも捨ててしまった。(20)

家ができたが、早くしただけで良くなかった。(20)	自分の家(半壊認定)を建て替えることができたが、ローンの返済が大変。(20)
痛んだ建物の再利用するまでもなく壊して捨ててしまったこと。今思えば、保存すべきものもたくさんあった。(20)	

心のケアができなかった(20)

「心のケア」住人へのケアがもっとほしかった。(20)	「心のケア」震災復旧の仮設住宅訪問ケア、アンケート調査取りができていなかった。(20)
----------------------------	---

管理からの備えの不備(20)

お世話になった方々の名前の記録がなかったこと(まだにお礼の言葉を申し謝らない)(20)	震災への備え、備蓄品、毛布等の十分な確保ができていない。(20)
管理からの防災に対する心構えや備えができていない。(20)	

10年間を振り返って(2004年6月5日 淡路3)

家族の助け合いができるようになった(36)

みんなやさしくなった(36)

家族のつながりが強くなった(36)

助け合うという人の輪ができた(36)

仲間作り、助け合いができてない(36)

心のケアができていない(36)

道路の整備ができた(36)

中心地の区画整備ができた(36)

道路が広がった(36)

道路の整備がある程度できた(36)

道路幅大による立ち過ぎ(36)

道路の整備ができていない(36)

山間部の被災箇所の再点検が出来なかった(36)

道路の確保ができていない(36)

防災グッズ等の災害対策ができていない(36)

いざというときの防災グッズ用意していない(36)

避難場所ができてない(36)

災害に対する準備ができたつもりが忘れてきていていない(36)

景観的な環境作りができなかった(36)

環境作り、公園化の事業がスムーズにいかなかった(36)

体系的まちづくり(景観)ができなかった(36)

景観的な環境作りができた(36)

地域の魅力しまちづくりについて考えることが出来た(36)

町が美しくなってきた(36)

建物の復旧ができた(36)

建物の復旧ができた(36)

住宅、建物の復旧ができた(36)

住宅等耐震補強ができた(36)

震災に対する知識がなかった(36)

経済的な流通・復興がおくれた(36)

経済的な復興ができていない、店、小さな店(36)

事業が完了しなかった(36)

道路がきれいになりつつある(36)

輪のための、交通ができた(36)

10年間を振り返って(2004年6月5日 淡路4)

コミュニティの輪が広がってきた！(46)

みんなが協力し合うことが出来た(46)

近所のつきあいが深くなった(46)

被災地のコミュニティの輪が大きく広がった。(46)

震災当時知らない人間士気難に声をかけ合えたが... (46)

被災時の初期対応が出来なかった。(46)

私自身ボランティアをする事が出来た(46)

復興整備事業が出来てきた。(46)

災害復旧はできた(46)

地域の被災した神社、集会所が新しくなった。(46)

土地の区画整備が出来た。(46)

復興住宅の完成が出来た。(46)

震災前のまちが戻っていない(46)

年一回の祭(たんじり)が数日間出せず、今もたんじりを出したりできなかったり(46)

被災した自動の建て直しが出来ていない(46)

休れるとどうしようもない不安な気持ちがいっつも湧いてしまった。(46)

震災前の街が戻っていない(46)

震災前の活気が戻っていない(46)

町の人口が減少したまま(46)

地震の被害を受けなかったところもある。(46)

地震の影響を受けなかった。(46)

地震が起きたので調査に来た。(46)

防災意識がめばえた。(46)

防災に対する意識が高くなった。(46)

防災に対する意識もつようになった。(46)

次の災害に対する準備ができてない(46)

家において、非常時の用意ができていない。(46)

住居がまとまって防災に対する用意ができていない。(46)

10年間を振り返って(2004年6月5日 淡路5)

住宅・区画整備が進んでいない(5G)

家の補修が出来てない(5B)	定集住宅補修や商業集積事業等は完全に出来あかっているところがある(5G)
環境改善の跡地の補修が出来てない(5G)	

住宅対策が早かった(5G)

住宅対策の早かったのが書かれている(5G)	復興住宅(町営住宅)が出来た(5G)
-----------------------	--------------------

家の修理が出来た(5G)

屋根の補修(5G)	家が壊れていたがあの程度元にもどった(5G)
前庭の補修は出来ているように(5G)	

家族や地域とのつながりが出来た(5G)

家族が増えた(5G)	個人の考え方よりも全体で考えるようになった(5G)
転居、サラリーマンが転職(5G)	本当の平等とは難しい(5G)

環境整備が進んだ(5G)

区画整理がほとんど出来つつある(5G)	まち並み、道路および街灯が整備がされた(5G)
都市計画(消防整備など)(5G)	消防の整備が出来た(5G)

ボランティア活動や精神が高まった(5G)

ボランティア活動が生まれた(5G)
ボランティア精神が高まったと思う(5G)

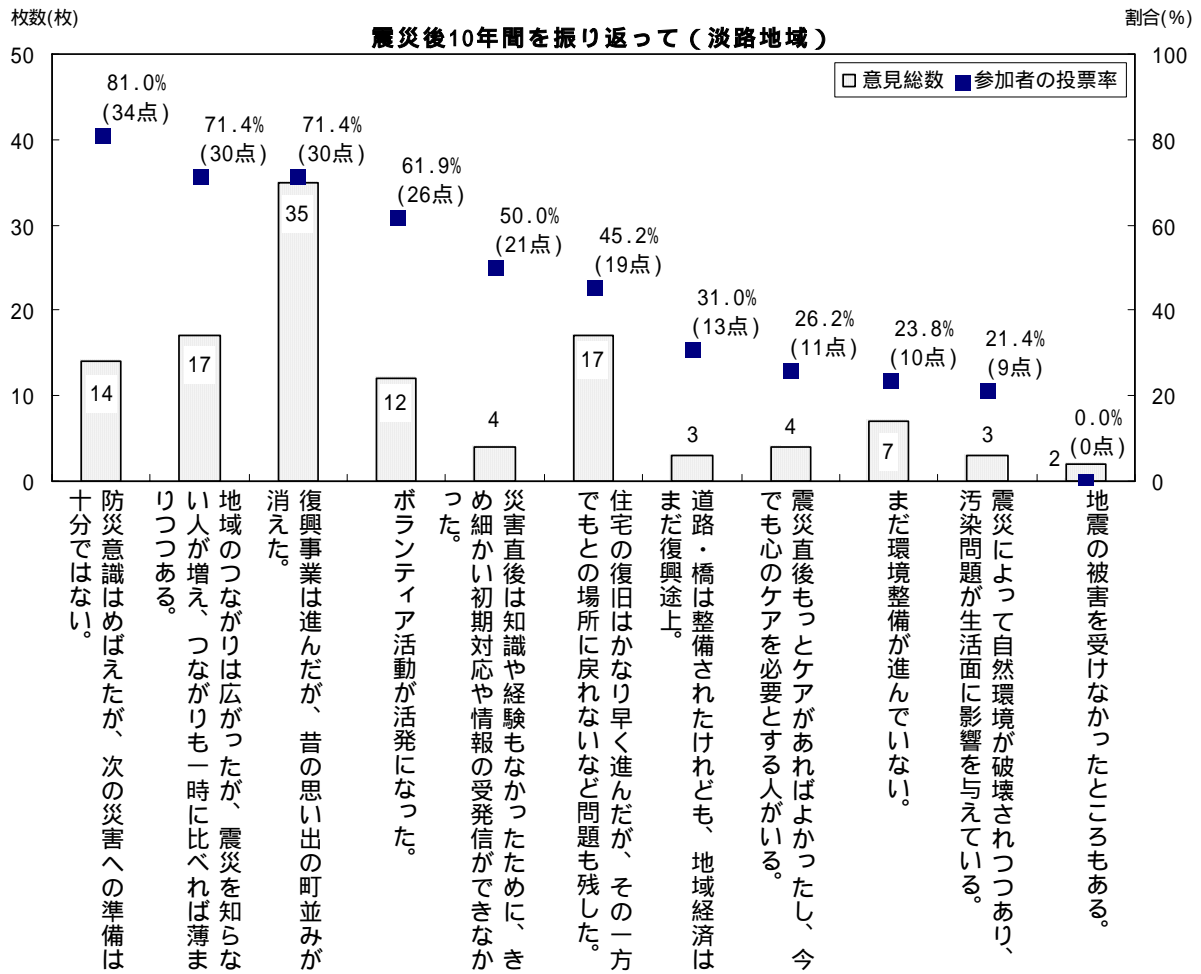
思い出の町並みが消えた(5G)

今までとなり通みなどの思い出があった(旧町営マンション等が立ち立っているのが寂しくなった。と言っていた。(5G)	こわれた建物は直った(5G)
震災でなくなった友人の子に会ってうれしい(5G)	道の商店街がなくなりました(5G)
	町の中心から小さい店がなくなってしまった。今後の見直しも無理なよう(5G)

町並みが良くなった(5G)

店と公園が増えた(5G)	町が美しくなった(5G)
町はきれいになった(5G)	旧淡路の環境と景観がよくなった(5G)
景観が良くなった(5G)	

・「震災後10年間を振り返って」について



淡路地域の参加者42名が、会場全体でまとめた「震災後10年間を振り返って」は、大きく11項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「住宅の復旧はかなり早く進んだが、昔の思い出の町並みが消えた。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階では、「防災意識はめばえたが、次の災害への準備は十分ではない。」「地域をつなぐは広がったが、震災を知らない人が増え、つながりも一時に比べれば薄まりつつある。」を重要だと考えた人が多くなっている。

また、「道路・橋は整備されたけれども、地域経済はまだ復興途上」という項目の中には、「経済的な復興ができていない、店、小さい農家」や「事業が定着しなかった」など経済の回復が思うように進んでいないという意見もある。さらに、「震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題が生活面に影響を与えている」という項目の中には、「海岸線の海面上昇」、「社会成熟に伴う化学物質」、「汚染物による地下水の汚れ」など自然環境への意見もあった。

・ステップ2：各班のまとめ

将来に向けて(2004年6月5日 淡路1)

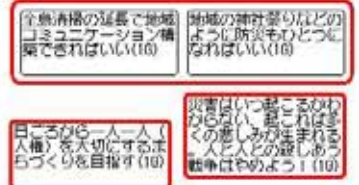
住民同士のコミュニケーションが
できている地域にする(16)



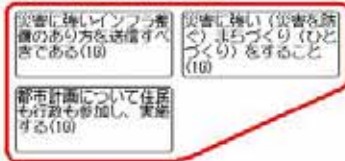
ボランティアのネットワークを生かしていくべきだ(16)

ITを活用して情報の確保をすること(16)

行事を通して仲間意識を作っていく(16)



住民と行政が協力し、災害に強いま
ちづくりを行うこと(16)



震災の記録、教訓を後世に伝える(16)



震災に個人として備えることが大切だ(16)



震災に備える制度の充実(16)



将来に向けて(2004年6月5日 淡路2)

大規模災害時の国への個人補償・支援制度の拡充、要望を続けていく。(26)

震災によりもつれた心の糸をほぐす相談や、堅苦しくないイベントの実施。(26)

差別しないようにする。(26)

個人情報ICカードに人かし災害時に活用するシステムを構築する。(26)

解体の折、今後使用できるようなものはいつか預けるような場所を作り、検討するよう伝えて下さい。(26)

心の豊かさと何れでもって語る。金・物ではなく徳性・知性・善性であること。(26)

防災意識の高揚。1・17防災の日指定(26)

家族や親戚、友人に連絡をとりたい(電話など)(26)

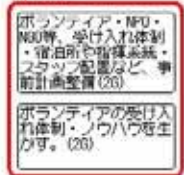
地域の小単位でのネットワーク作り(26)



モデルを内外へ発信し紹介していく(26)



ボランティアの受け入れと体制の整備(26)



普段からの防災危機管理体制を確立する。(26)



将来に向けて(2004年6月5日 淡路3)

防災意識を高めよう(30)

高齢者の子供まで災害に対する知識と心のよえ(30)	災害に対する心がよえ(30)
津波は津波で1、2メートルくおらしい。どうする？(30)	防災意識の向上(30)

単発的な災害復旧、防災整備でなく、継続的な計画の必要は。(基金整備)(30)

災害予測箇所の再点検(30)

災害発生時の予測のある地域の点検作業(30)	震災後何年かたつておらる災害、例えば災害のために起きた地滑りや水道等の漏れなど(30)
------------------------	---

避難場所を作る(30)

助け合いをしよう(30)

コミュニティをはひるイベント(金)を続ける(30)	ボランティア活動を促進する環境作り(30)
運動、助け合い、(ボランティア)をいひず(30)	思いやり、助け合いの心を入切にする。(30)
	小地域での対策取り組むなら必要、町内会単位(30)

情報伝達の整備(30)

情報伝達の整備(30)	世界にだけ安心情報発信(30)
-------------	-----------------

ライフラインの確保(30)

ライフライン(特に水)の確保、農業等産業で利用する水(30)	電気、ガス、水、病院の確保(30)
--------------------------------	-------------------

環境作りをしよう(30)

環境から子が育つ(30)
自然から花をいっぱい(30)

いつ何が起るかわからない。一日一日を入切に通す(30)

将来に向けて(2004年6月5日 淡路4)

震災を忘れないためにイベントやメモメントを計画していく(40)

災害の状況・対応策を経験者の立場として伝えていく(40)	震災を忘れないために、毎年イベント等を行う。後世へ伝える。(40)
日仏友好復興の推進メモメントの早期実現(40)	年に1回防災意識を喚起する事業をする(防災の日)(40)

個人は、連絡手段や避難方法をあらかじめ考え、行政や、ボランティアは、対応のノウハウを蓄積していく事が大切だ(40)

災害が起きた時のためのメールリスト等の構築(40)	災害に対する準備をしておく。自分の回り、周りなど(40)
被災者対応のノウハウを記録。ボランティア、自治体(40)	非常時の対応、マニュアル等の作成及び住民への周知(40)
備えあれば憂いなし(40)	非常事態を考えた日常から意識する。・連絡手段・避難法etc(40)

この検証が物議の種引きにならないように。(40)

まっさらとした復興をする。(区道整理など)(40)

高齢者に対応できる環境の充実(40)

地域コミュニティをひろげていく(40)

みんないつでも地域コミュニティを生かしたい感(40)	開閉どのつなびりをおく(40)
身近な人間で情報を広げる。(40)	知らない人へ気軽に声をかける(外国人がハローと言ってくれるように)(40)
	地域のつなびりを広めていく。(40)

世界にすばらしい被災地の復旧、復興、歩みを見せる(40)

世界に誇れる島づくりとまちづくり、ヒトづくり(40)

いざんとい国々を指さす人達を、淡路島で育てたい(40)
公園都市美しいまちづくり。人々が喜んで来てもらえるまちづくり(40)

将来に向けて(2004年6月5日 淡路5)



・ステップ2：淡路地域のまとめ

将来に向けて(2004年6月5日 淡路)

ボランティアの受け入れや組織化を今後充実させていくことが大切。(25点)

ボランティアの受け入れや組織化を今後充実させていくことが大切。(25点)	ボランティアの受け入れや組織化を今後充実させていくことが大切。(25点)
ボランティアの受け入れや組織化を今後充実させていくことが大切。(25点)	ボランティアの受け入れや組織化を今後充実させていくことが大切。(25点)

住民同士・地域のつながりを大切にしよう。(37点)

住民同士・地域のつながりを大切にしよう。(37点)	住民同士・地域のつながりを大切にしよう。(37点)
住民同士・地域のつながりを大切にしよう。(37点)	住民同士・地域のつながりを大切にしよう。(37点)

日ごろから自分たちでできる備えを実践しよう。(27点)

日ごろから自分たちでできる備えを実践しよう。(27点)	日ごろから自分たちでできる備えを実践しよう。(27点)
日ごろから自分たちでできる備えを実践しよう。(27点)	日ごろから自分たちでできる備えを実践しよう。(27点)

災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる。(27点)

災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる。(27点)	災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる。(27点)
災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる。(27点)	災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる。(27点)

これから大切にしていきたい人生の価値を考えていこう。(4点)

これから大切にしていきたい人生の価値を考えていこう。(4点)	これから大切にしていきたい人生の価値を考えていこう。(4点)
--------------------------------	--------------------------------

安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)

安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)

安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)	安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)
安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)	安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)

被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての面面で行政は力をいれてほしい。(29点)

被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての面面で行政は力をいれてほしい。(29点)

被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての面面で行政は力をいれてほしい。(29点)	被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての面面で行政は力をいれてほしい。(29点)
被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての面面で行政は力をいれてほしい。(29点)	被害抑止策、被害軽減策、災害対応、復旧・復興策のすべての面面で行政は力をいれてほしい。(29点)

安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)

安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)	安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)
安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)	安全・安心で美しく心豊かな住まいやまちをつくっていこう。(17点)

この地区が復興の鍵になることにならないように。(9点)

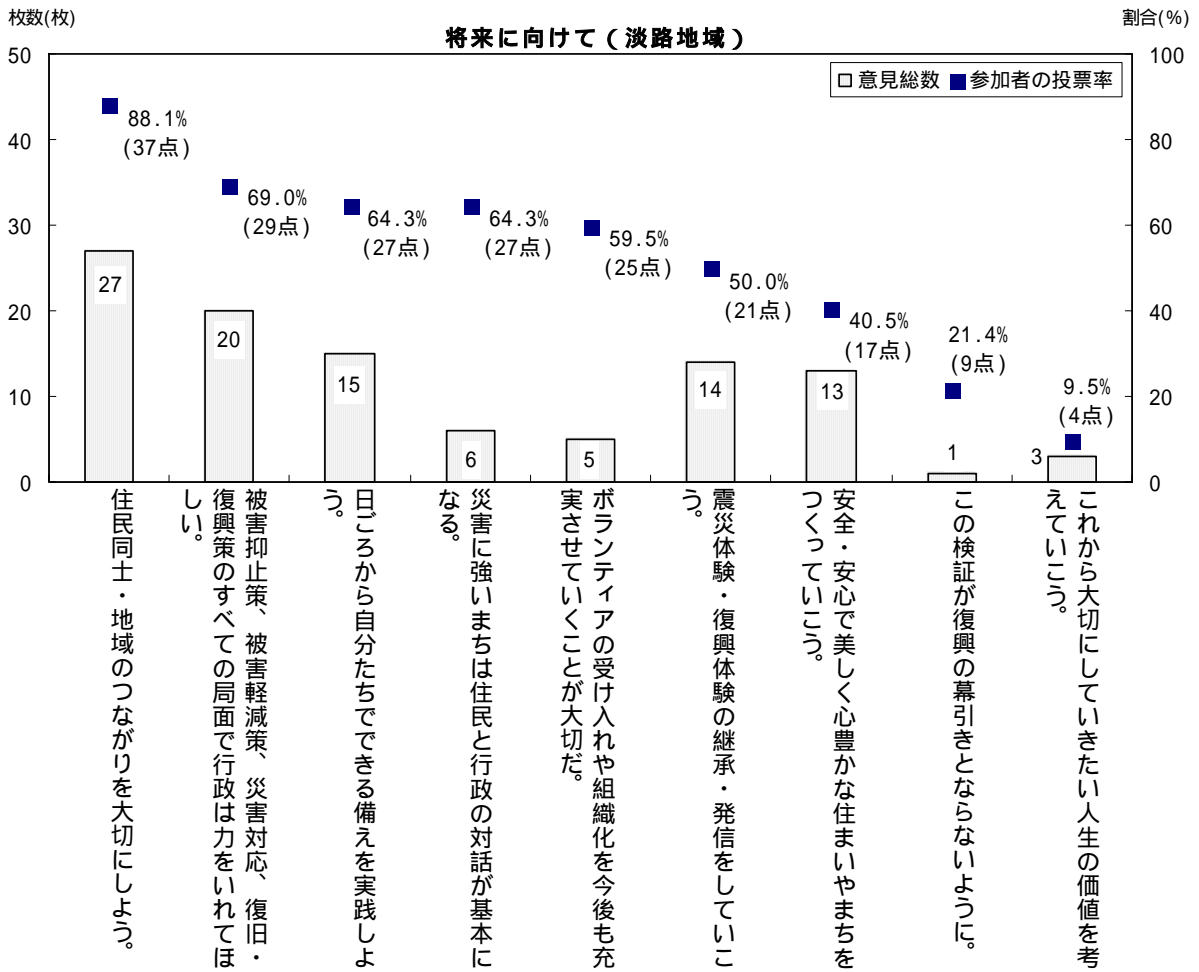
この地区が復興の鍵になることにならないように。(9点)	この地区が復興の鍵になることにならないように。(9点)
-----------------------------	-----------------------------

震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。(21点)

震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。(21点)

震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。(21点)	震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。(21点)
震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。(21点)	震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。(21点)

・「将来に向けて」について



会場全体でまとめた「将来に向けて」については、大きく9項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階では、「災害に強いまちは住民と行政の対話が基本になる。」「ボランティアの受け入れや組織化を今後も充実させていくことが大切だ。」を重要だと考えた人が多くなっている。

また、「震災体験・復興体験の継承・発信をしていこう。」という項目の中には、「野島断層を永久保存し、今後の研究に生かす。」というような淡路地域のみでみられた意見も含まれている。

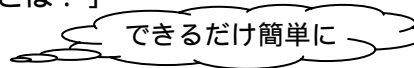
2) 阪神北地域

日 時：平成16年 6月 6日(日) 10:00~13:00


会 場：宝塚市西公民館 / ホール

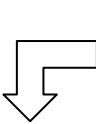
テ ー マ：「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、
将来に生かしていくべきことは？」

10:00 はじめに
(5分) ・あいさつ、趣旨説明

10:05 ステップ0：「ワークショップとは？」
(20分) ・ワークショップの進め方  できるだけ簡単に
・アイスブレイク(自己紹介)

10:25 ステップ1：「10年間を振り返って」
(40分)
被災地が ・震災後10年間でできたこと、できなかったこと

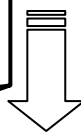
11:05 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ 

11:15 ~休憩~
(10分) 

主体感覚が大切！
『あなたが県民として』


各班から1人ずつ
代表者を選出する

11:25 ステップ2：「将来に向けて」
(40分)
被災地が { ・将来に向けて生かすべきこと
・世界に向けて発信していくべきこと

ステップ1の整理
(40分) 

12:05 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ

12:15 ~休憩~
(5分)

12:20 ステップ3：「まとめ」
(35分) ・各班の成果を整理  ・重要だと思う別々の
島にシールを貼る

12:55 最後に
(5分) ・総括ワークショップの案内と代表者の決定

13:00 終了  ・各班2人ずつ

・ 阪神北地域ワークショップの様子



会場の宝塚市西公民館外観



まずはアイスブレイクで自己紹介



カードの意見を発表しながらパソコンに入力



ステップ1でまとめた内容の各班からの発表



ステップ2と同時並行でステップ1のまとめ



ステップ2についても各班から発表



ステップ2は全員でまとめを行った



丸シールを使ってまとめた意見に順位付け

・ステップ1：各班のまとめ

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神北1)

行政の取組み不満足(市民の意思が反映されていない事業である)(16)

コーディネーター職の未確立(10)	災害の復旧ができていない(10)
	市民不在の都市整備ができた(10)

行政の取組み満足(行政もよくやった)(16)

駅前再開業、モニタリング運行ができた(10)	高圧復旧としては大体はできた(10)
	宝塚市の場合、街の外観はほぼできてきている(10)

誰も助けてくれない(16)

心のケアができない(16)	被災老人の相談ができていない(16)
	被災者と被害を受けた人がつなぐ人の間の理解交流ができていなかった(16)

コミュニティが形成された(16)

フェニックス事業をしてきた中で地域の人は理解していただけたと感謝している(10)	共同体の整備がOngoing(10)
人のつながりの大切さの認識が高まった(10)	地域の大切さの認識が高まった(10)
10周年を迎えた今日、少し出来なかった事業をしたと悔しいが、なかなかなさずかしい。(自治会)(10)	

いろいろな会合で協力を求められた(16)

近所で出立った被災者住宅へお誘い受けがあったが人数が足りず不在があり実現できなかった(10)

避難所が小さいが事務の報告ができた(10)

市民の取組み、防災活動(16)

震災で体験したことを地域で活動するために防災班にはいった(16)	地域自治会で自主防災クラブを行政の指導を得て作れた(16)
防災訓練に参加するようになった(10)	

ボランティアが有効(16)

グループの連絡、地域の確認ができなかった(10)	小さなボランティア活動で済ませたいと思う(16)
震災のときボランティアができた。ボランティアに果たした役割、コーディネーター(10)	友人たちに自分たちの経験ができれば防災の意識向上と安全確保のための職員、ボランティアや継続の要を認めている(16)

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神北2)

10年検証を改めて考えよう(26)

当日体育館の中で多くの人のお世話で自分も体育館に在り。(26)	10年間の検証が出来ていない(26)	10年経過後本当の意味での助け合いになったのか?(26)	10年前と違いPM室の効果大(情報)(期待)(26)
---------------------------------	--------------------	------------------------------	----------------------------

被災者の視点で取材できた(自主実家が被災)(26)

震災の予備力。この10年、自分の難しにエネルギーを振り回しています。(26)

危機意識が薄れている(26)

温度差の意識が薄くなっている。(26)	命危機管理が薄れなくなっている。(26)
---------------------	----------------------

市民同志のつながりが生まれた(26)

支援しあう(仲間意識)(26)	震災当時マンションの居残り管理として協働に協力しました(26)
人とのつながりができた(26)	人の和(できたこと)(26)

災害時対策をもう一度考え直そう(26)

高齢者など窮乏への援助があまりできなかった(26)	情報伝達の難しさを感した(26)
体育館の住居と個人室の住居とどう関係してあげればいいのか?(26)	避難所の(例えば学校)利用形態が千千分。(26)
物資の配分方法など配慮も必要(26)	

NPOへの支援と仕組み作りを(26)

人・モノ・カネ情報がNPOセンターに回っていないこと(まだ未整備である)(26)

NPOの誕生!(26)

「人と防災未来センター」1年5ヶ月だけですが災害ボランティアをしました。(26)	NPO法人が早く生まれたこと。(26)
市民が室でNPOセンターを設立できたこと(26)	自分の意思で動けたこと(26)

行政の意識変化(26)

他の「行政マン」の意識が変わりつつある。(26)

組織力の構築(26)

目先の構築が今も引き続いている(26)	人のつながりができていない(26)
組織力としての「人の和」が足りなかった。(26)	過去の伊丹市でボランティアができた(26)

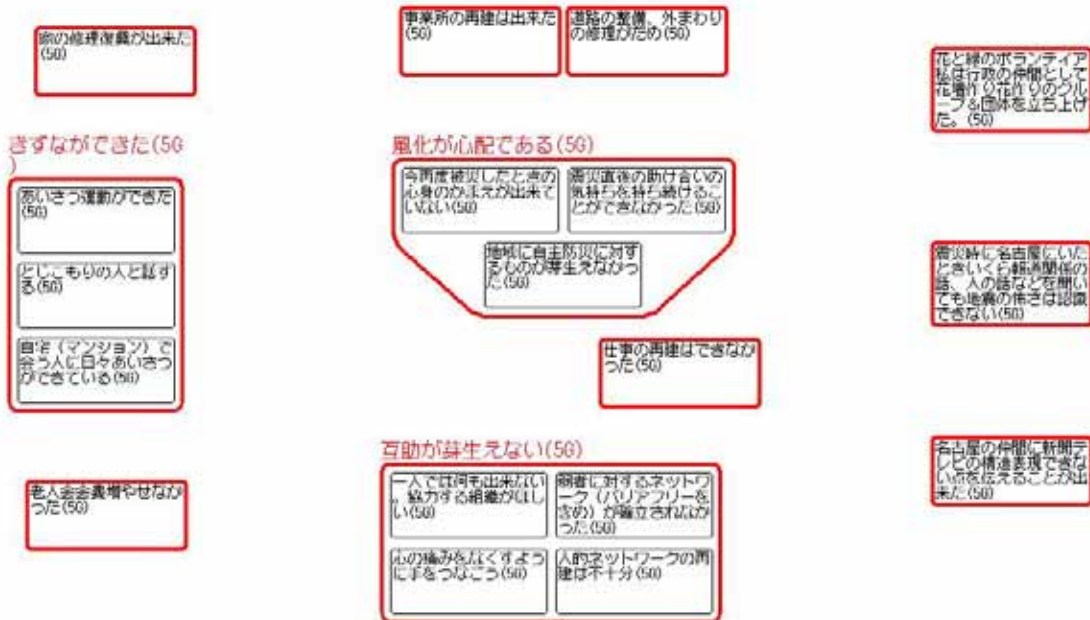
10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神北3)

<p>常態(災害時)意識が高まる(39)</p>	<p>バリアフリー住宅の実践ができた(39)</p> <p>バリアフリーの住宅がとがふえた(39)</p> <p>バリアフリー住宅への関心と実施(39)</p>	<p>震災前からの防災意識が高かったため再開発事業に活かされた(39)</p> <p>民間企業との運営管理を期間に行っています(39)</p> <p>自己完全受託型被害者が復旧し保存しています(39)</p> <p>震災被災地の赤十字前(震災復興一号として民間企業と共同運営として完成しました(39)</p>
<p>ボランティア活動ができた(39)</p> <p>ボランティア活動ができた(39)</p> <p>災害後、自分としてボランティア活動に関わることで自分自身実践に向けて頑張ってきた(39)</p> <p>被災者住宅の高齢者への支援ができた(39)</p>	<p>地域住民間の関心が深まった(39)</p> <p>自宅の周りの付き合いが増えた(39)</p> <p>住居の地域への関心が高まった(39)</p> <p>地域、街づくり、個人との付き合いが深まった(39)</p> <p>被災者への料理、手芸、贈り物などをした(39)</p>	<p>インフラ整備ができた(39)</p> <p>仮設住宅の解消ができた(39)</p> <p>仮設住宅の復旧ができた(39)</p> <p>道路、建物の整備ができた(39)</p>
<p>震災の記憶が風化しつつある(39)</p> <p>集まったボランティアネットワークが風化しつつある(39)</p> <p>忘れていた人の結構多い(39)</p>	<p>景気回復ができていない(39)</p> <p>景気回復ができていない(39)</p> <p>ハード面では済ましたのが現実面では大変です。苦戦しています(39)</p>	<p>心のケアが不十分である(39)</p> <p>心のケアについて(特に子供、高齢者)に対して不足(39)</p> <p>被害者の方々の心のケアが大きく支障が充分にできなかった(39)</p> <p>被害者に対する恐怖心がなくならない(39)</p> <p>被災者の心構え(心のケア)が充分にできなかった(39)</p>

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神北4)

<p>連絡、連携が今後の課題である(46)</p> <p>行政や関係機関としてボランティアなどの連携ができなかった(46)</p> <p>連絡網が出来ない(46)</p>	<p>新たなグループを立ち上げた(46)</p> <p>女たちの経済大義勇会を立ち上げた(46)</p> <p>心のケアのためのコンクリートが出来た(継続中)(46)</p> <p>きれいな復興といふこととモメンタル価値出来た(46)</p>	<p>地域活動の再生ができた(46)</p> <p>自治会活動に参加した(46)</p> <p>地域活動が活発になった(46)</p>
<p>自分に何ができるかと考えるきっかけになった(46)</p> <p>「何が出来た、出来てなかったのか」の自分なりの基準をわかってほしい。自分なりの答えを言えど思ったか、何ができるのか。(46)</p> <p>職住が離れている為、地域でイザという時に助けてほしいのか、誤り錯誤(46)</p>	<p>家族の絆が深まった(46)</p> <p>家族が一緒に気持ちにいられたこと(46)</p> <p>子供達が親を気づかしてくれたこと(46)</p> <p>他人の親切にふれられた事(46)</p> <p>連絡の持ち合わせ場所を覚えている(46)</p>	<p>ふれあいサロンなどが出来た(46)</p> <p>いらいふれあいサロンを作ることができた(46)</p> <p>仮設住宅でのふれあいサロンが見えおそれ全国的に広がりを見せた(46)</p> <p>公園を考える会を作れた(46)</p> <p>地域で若年者や一人暮らしの見守りができた(46)</p> <p>地域活動のネットワークができた(サロン)(46)</p> <p>平成九年に制度が出来た「災害住宅関係推進事業」でまちづくり協議会を発足させ、10年計画の3年目に入った。(46)</p> <p>「救急物資等」少量集めた(46)</p>
<p>家庭やボランティアで備えができた(46)</p> <p>(2人自分くらい)最初の量の水と食料はとってある(46)</p> <p>団体の知り道は次にたくまでめがない(46)</p> <p>震災後ボランティア活動に携わることで、間接的に防災(イザという時の備え)を考える機会がもてた(46)</p>	<p>防災意識や避難所についての情報発信が出来た(46)</p> <p>子供たちに防災意識を持ってもらう為に神戸で(46)</p> <p>宝塚市避難所マップをホームページに立ち上げた(46)</p>	

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神北5)



10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神北6)



・ステップ1：阪神北地域のまとめ

ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった(30点)

震災ボランティア活動(10)

震災ボランティア活動が盛んなこと(10)

震災ボランティア活動が盛んなこと(10)

震災ボランティア活動が盛んなこと(10)

震災ボランティア活動が盛んなこと(10)

震災ボランティア活動が盛んなこと(10)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

防災意識が高まった(22点)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

防災意識が高まった(22点)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

防災意識が高まった(22点)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた(27点)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた(27点)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた(27点)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

10年検証をきっかけに、災害時対策を考え直す(23点)

10年検証をきっかけに、災害時対策を考え直す(23点)

10年検証をきっかけに、災害時対策を考え直す(23点)

10年検証をきっかけに、災害時対策を考え直す(23点)

10年検証をきっかけに、災害時対策を考え直す(23点)

心ケアが不十分である(16点)

心ケアが不十分である(16点)

心ケアが不十分である(16点)

心ケアが不十分である(16点)

心ケアが不十分である(16点)

被災者の視点で取材できた(自宅家が被災)(26)(0点)

被災者の視点で取材できた(自宅家が被災)(26)(0点)

被災者の視点で取材できた(自宅家が被災)(26)(0点)

被災者の視点で取材できた(自宅家が被災)(26)(0点)

行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活性化してほしい(29点)

行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活性化してほしい(29点)

行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活性化してほしい(29点)

行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活性化してほしい(29点)

震災の記憶の風化し、危機意識が薄れている(28点)

震災の記憶の風化し、危機意識が薄れている(28点)

震災の記憶の風化し、危機意識が薄れている(28点)

震災の記憶の風化し、危機意識が薄れている(28点)

経済の再建は難しい(5点)

経済の再建は難しい(5点)

経済の再建は難しい(5点)

経済の再建は難しい(5点)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた(27点)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた(27点)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた(27点)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた(27点)

心ケアが不十分である(16点)

心ケアが不十分である(16点)

心ケアが不十分である(16点)

心ケアが不十分である(16点)

ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった(30点)

ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった(30点)

ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった(30点)

ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった(30点)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

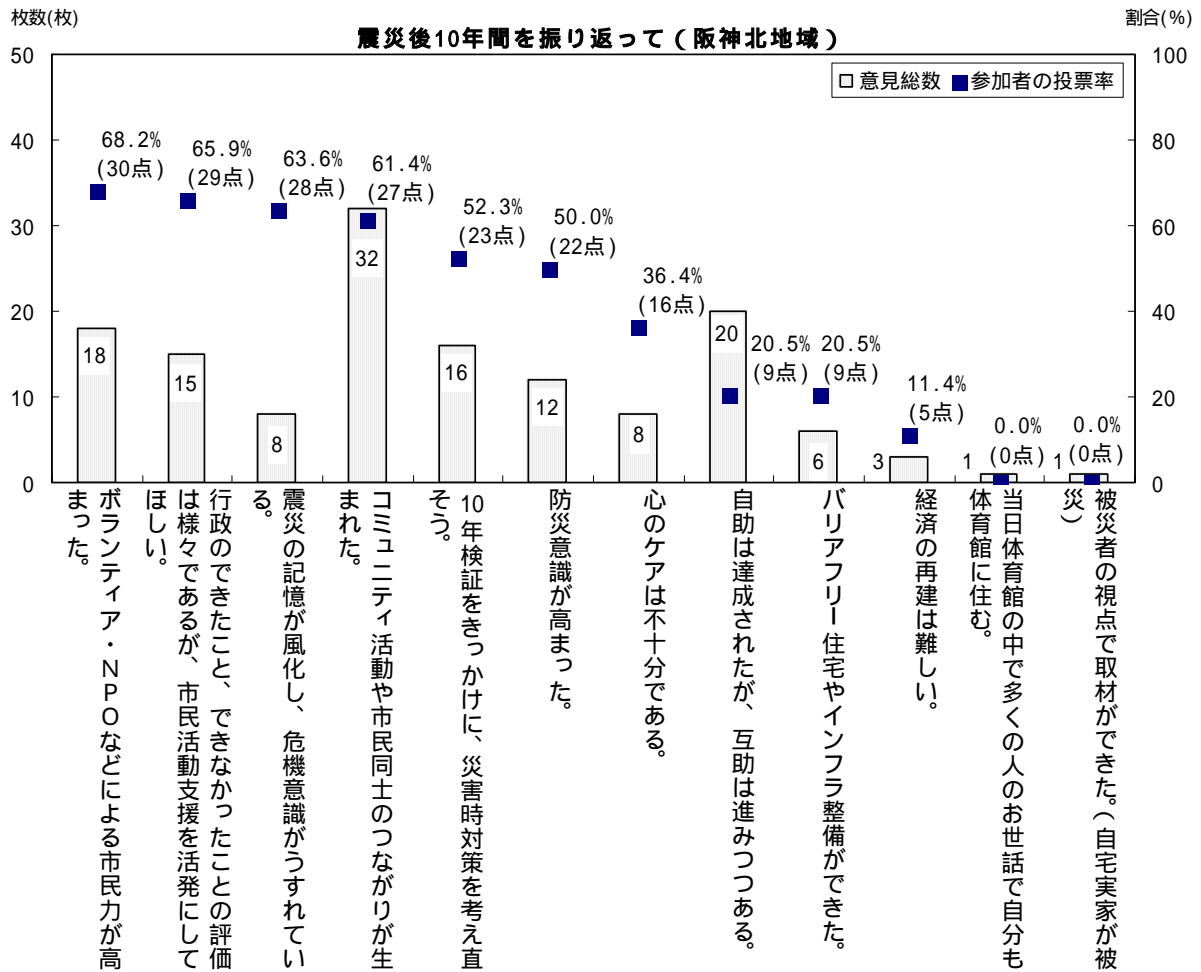
震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

震災後10年間に振り返って(2004年6月6日 阪神北)

24

・「震災後10年を振り返って」について



阪神北地域の参加者44名が、会場全体でまとめた「震災後10年間を振り返って」は、大きく12項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けがない段階では、「コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった。」「行政のできたこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活発にしてほしい。」「震災の記憶が風化し、危機管理がうすれている。」を重要だと考えた人が多くなっている。

また、「心のケアが不十分である。」という項目の中には、「心のケア(特に子供、高齢者に対して)不足」「地震に対する恐怖心がなくなる」など、心のケアはこの10年間では、まだまだ不十分であるという声もあった。さらに、「経済の再建は難しい。」という項目には、「ハード面はできましたが営業面では大変です。苦戦しています。」「景気回復ができなかった」「仕事の再建はできなかった」など、心のケア同様に経済面でも苦労しているという意見が出された。

・ステップ2：各班のまとめ

将来に向けて(2004年6月6日 阪神北1)

公・民の防災体制のさらなる「充実」(16)

課題として震災に対する行政の認識と行動を高めること。安心安全な都市づくりに支番の増進(16)	行政をはじめとして危機管理システムの充実を図るべき(16)
自主防災組織の高揚をはかる(16)	防災意識の向上をはかるために震災で得た教訓を生かして公民共々精神的にとりくんでいきたい(16)
防災公園の増設(16)	

ボランティア団の「連携」(10)

ボランティアとして10周年になるようなことがしたい(16)	ボランティアニーズ把握、情報不足、ボランティア育成(16)
被害者は災害時にはボランティアに積極的に参加すべきである(16)	

被災地もすでに復興はしているのだけれど、ボランティアしたいと思う人が、主として若い世代の人が多いため、高齢者が少ない(16)

経験を無駄にしないで(16)

それぞれの立場でマニュアル作り(16)	阪神大震災で得た経験を基礎に将来にわたるであろう南海地震に対する公民共々備えを充分にする。備蓄、備置、インフラ等(16)
震災で得たノウハウを生かす風土を(16)	

日頃の「ふれあい」(16)

自治会がもっとこうした行動していただけるように地域の拠点に活性化共同隊(16)	自分の目標から他人の目標にかえてみること(16)
地域でもっと交流が必要、障害を持った人も一緒に(16)	

行政、市民の「協働」(16)

居住地域内に防災センターのような機能を持つ施設がほしい(16)	行政から地域への業務委託(16)
市長と行政との「協働」を確かなものに(16)	市長の自立への「自覚」(16)
福祉行政の充実、広い意味で各企業に対して助成(16)	行政が主導をとること、市長が主導をとること、それぞれの認識の強化(16)

将来に向けて(2004年6月6日 阪神北2)

いかにして情報を各家庭に伝えるか。正確な情報をどう集めるか(20)

(行政)情報の収集、発信の窓口の固定(20)	簡単な情報伝達(20)
地域での情報伝達の方法を考え直す(20)	

防災マニュアルを一家にひとつ持つこと(20)

自治体側の防災マニュアルをさらに精進し、市民に周知徹底する(20)	考えておくことコミュニティは出来ても必ずしもそのための足元からのコミュニケーションを考えなおす(20)
-----------------------------------	---

地域のことは市民が考える(行動することから出発)(20)

「地域」という単位での防災組織(20)	市民主体のまちをつくる(20)
自主防災組織の充実をはかる(20)	住民一人ひとりの防災意識を常に持てるよう行政にも協力してもらおう(20)
地域で若い世代等に対して何をやるかを考えなおす。つまり、各団体の自主を承認する(20)	整理されている南海指針、県、行政では研究されているが市民での危機管理(20)

行政業務はあるが災害前夜の情報は出すべき(20)

ボランティアグループの連携と、組織化できるような防災マニュアルの中に入れる(20)

ボランティア組織(NPO官的)の統一(指揮命令系統)(20)

震災を忘れないで！今後に生かす(20)

震災によって変わった思いは持ち直し、大いにしなげなければならない(20)	震災を風化させないための語り部となること(20)
震災を忘れないこと(20)	人間関係がサツパリとした平日、人と人との交わり、大人と子供との交わりをもっと広く、地域で体験したことを言葉で人々に伝えていく必要がある(20)
経験の温度感、国の事情により変わっている人が生きるといふことにおいて基準は同じなので話し合う(20)	

ボランティアとリーダーの育成強化(20)

多くの被災に向けグループリーダーの育成(20)	ボランティアの力の切り方も次第に強化があり、年齢層も広がってきている(20)
-------------------------	--

防災の国際的ネットワークを持とう(20)

地震の多い国々や津波をよく知って全世界的な防災システムを検討する(20)	世界規模にわたる情報交換と一掃しなげに考え、医療、福祉、安全を考える(20)
--------------------------------------	--

将来に向けて(2004年6月6日 阪神北3)

地域に根ざした街づくりをしよう！(36)

すべての決定に異を共に参加出来るような場点を考えていくことが大切(36)	生活者の視点で街づくりを考え参加していく(ボトムアップ)(36)
地域の連携をより強くし、街づくりを強める(コミュニティ活動)(36)	

住民と行政が協働し、災害に強い街づくりをする(36)

災害に強い街づくりをする(36)	都市計画と住民の街の参加性を高めしていく(市長の姿勢が大事)(36)
------------------	------------------------------------

災害に対する自己支援力をつける(36)

災害に対する自己管理を行う(36)	住民が出来ることとして、よく自分らが行い、住民の意識のレベルアップが重要(36)
-------------------	--

ボランティア活動をさらに進める(地域、行政、環境等に！)(36)

震災経験を発信する重要性(36)

震災の経験と教訓を継承し、発信する(危機管理)(36)	震災の経験をしなければいけない(36)
-----------------------------	---------------------

地域のコミュニケーションを作りましょう！(36)

フルーヴ地域組織を作り、防災意識を高めていく(必要あり)(36)	訴掛けの声掛け、運動を大切にしていく(36)
----------------------------------	------------------------

実用性のある地域連絡網作りをしよう(36)

地域の連絡網をつくる(36)	地域間の連絡方法(電話以外)を考える(36)
----------------	------------------------

国際規模による防災ネットワークの作成(36)

災害、防災ネットワークの世界化ができればよい(36)	世界に向けて災害時に各県協力して支援(資源支援)、活動をする(協定締結の実行すべき)(36)
----------------------------	--

将来に向けて(2004年6月6日 阪神北4)

全国のボランティアに感謝を込めたありがとうイベントをしたい(46)

他の各地域との交流を続けて、深めていきたい(46)

自ら考えて行動できる人を育てていく(46)

災害時に本当に必要なことは何なのかを検証する(46)

正しい防災に関する知識を知る(行動規範)(46)

市民の団体組織の運営や連絡の継続をしていきたい(46)

会の運営がいつまでもつづくように？(46)	日所等交流、ふれあいを続けていきたい(46)
震災10年の記録がどれだけあるか把握する(46)	宝塚市内の震災関係の会の連絡がどれくらい(46)
10年目のイベント、女性と震災(フォーラム)その後の10年(46)	

災害に強いまちづくりを皆で考える(46)

会の名前変更し「私たちのまちづくりを考える会」にします(46)	震災の教訓をいかしたまちづくり、緑の確保など町づくりを考えていきたい(46)
---------------------------------	--

ふれあい活動を更に広げ深める(46)

被害の立場を考える(46)	人の心さ、さびさびを伝えたい(46)
日頃から個人とのふれあいを大切に(46)	地域の方がかがやいてほしいです。(鳥居まで)(46)

生命の大切さの伝承(46)

生きていることの大切さを伝承していきたい(生きてこそ)(46)	生命の大切さを伝えたい(46)
---------------------------------	-----------------

防災の意識を次世代に伝えていく(46)

現在のボランティア活動を通して防災意識の継承を続ける(46)	子どもたちに「防災」について興味している活動を充実させる(46)
--------------------------------	----------------------------------

震災の経験を伝え続ける(46)

震災の経験を風化させない「1.17」の事業を継続する(46)	震災を忘れたい風化させないことを伝えたい(46)
--------------------------------	--------------------------

将来に向けて(2004年6月6日 阪神北5)

コミュニティづくりを進める。(5G)

みんなが助け合い好きに進める。(5G)	育生えたボランティア精神を大きな輪に広げたい。(5G)
現代社会ですでになつたコミュニケーションの復活を機軸から実行したい。(5G)	仲間作りをはかろう。助け合いの出来る身近な所の人との仲間作りをすすめる。(5G)
まちづくりのコミュニティ組織を固め前進させたい。(5G)	

体験を次世代に語り継ぐ。(5G)

いっどこでどんな災害があつても人として行動できるよつに気持ちを育てたい。(5G)	人の命の大切さをもっと知る。(5G)
人生を通して震災の経験や人に伝えたい。(5G)	体験の語り聞きの存在を続けてほしい。(5G)

心のふれあいを深めよう。(5G)

ふれあいや集まりなどを続けていけたら・・・。(5G)	仲間作りを意識した計画(自然人の心を育てる)。(5G)
----------------------------	-----------------------------

次の震災の備えに生かそう。(5G)

現在の点検整備の間のラインを整備し将来の防災に備える。(5G)	次の災害が起きたときに備える(南海沖地震)。(5G)
---------------------------------	----------------------------

家、家財の強度は大丈夫か。(5G)

建物が壊れないようによい方法を考える。(5G)	完成したカード(建物や家具など)を写真で記録したパリアフリーでつないでいく。(5G)
具体的にどのような強さならば震災に耐える基準の標示してほしい。(5G)	

強い町作りをしよう。(5G)

震災を町作りで生かしたい。(5G)	日本の技術力を世界に貢献すること。(5G)
備蓄、避難を意識した防災型ハード作り。(5G)	
家の隣りや家内でも一人30秒のラメンを確保する。強制的にする。(5G)	

将来に向けて(2004年6月6日 阪神北6)

情報の共有と公開をしていく。(6G)

(世界に向けて)震災情報の公開・共有化をさらに進める。(6G)	災害復旧への貢献力を発信していく。(6G)
---------------------------------	-----------------------

体験者として提案、提唱していく。(6G)

記録、検証をしっかりとついで、マニュアルを編む。(6G)	災害に備えまちづくり(例えば樹木の生育等)の提議をしていく。(6G)	災害時に被害を持っておられる方へのどんな対応が必要か。(6G)	都市の災害に対応する。(6G)
役に立ったグッズなどの生活者レベルの提議をする。(6G)			

ボランティア、NPOの意識を高める。(6G)

ボランティア、NPOに対する認識を持つ。どんな仕事は大丈夫？。(6G)	ボランティアする側も受ける側も意識を高めるべき。(6G)
-------------------------------------	------------------------------

NPO、ボランティアの効果的なサポートを実現してほしい。(6G)

NPO、ボランティアの効率的活動ができるシステム作り(地元や地域へのはたらきかけ)。(6G)	活動には物、人、金が重要であるが、県ほどはうまく考えられていない？。(6G)	震災後生まれた「ソフト」面の変化を伝える(NPO、ボランティア)。(6G)
--	--	---------------------------------------

市長の入れ替わりがあった。(6G)

地域力を高めてほしい。(6G)

防災に向けて市民力が地域力を高める。(6G)	地域力の活用(各種団体の力を上手に使う方法を整理)。(6G)
------------------------	--------------------------------

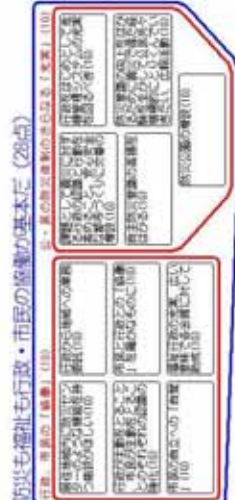
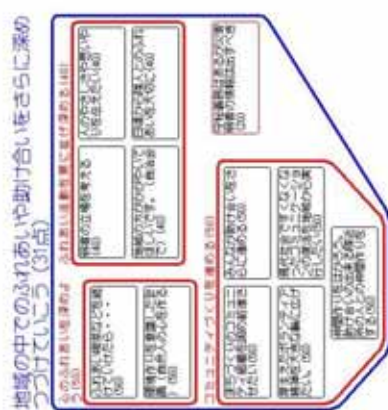
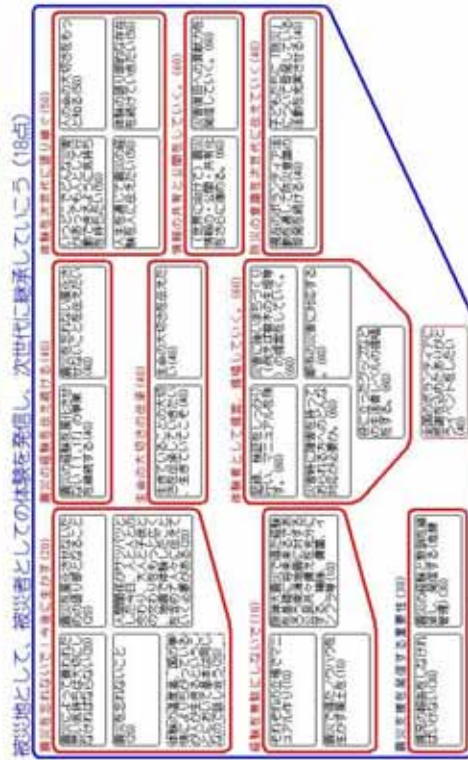
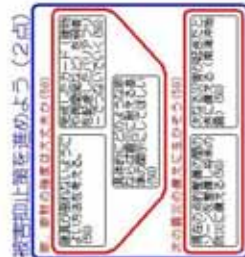
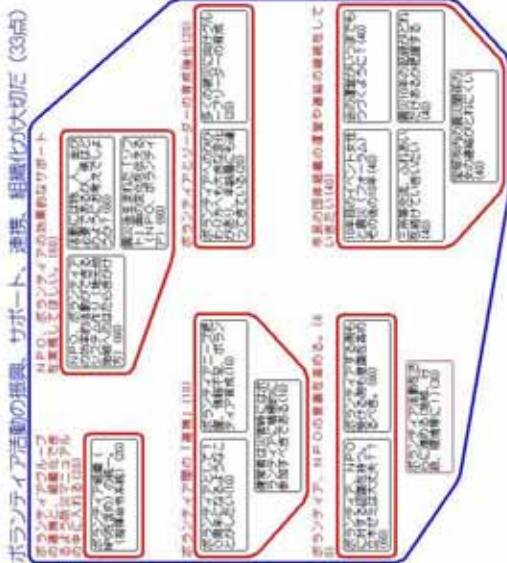
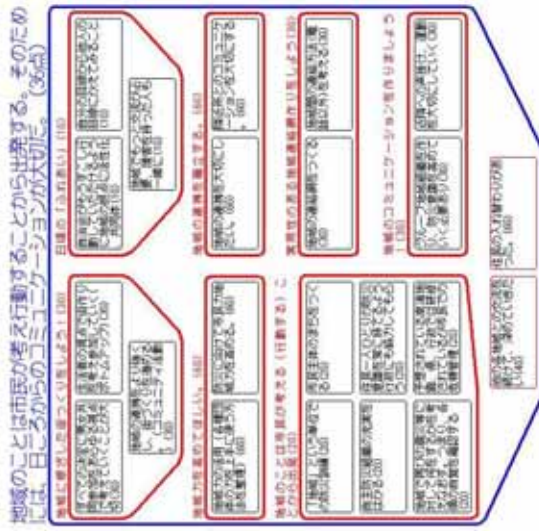
防災意識の拡充、高まり。(6G)

地域の連携を確立する。(6G)

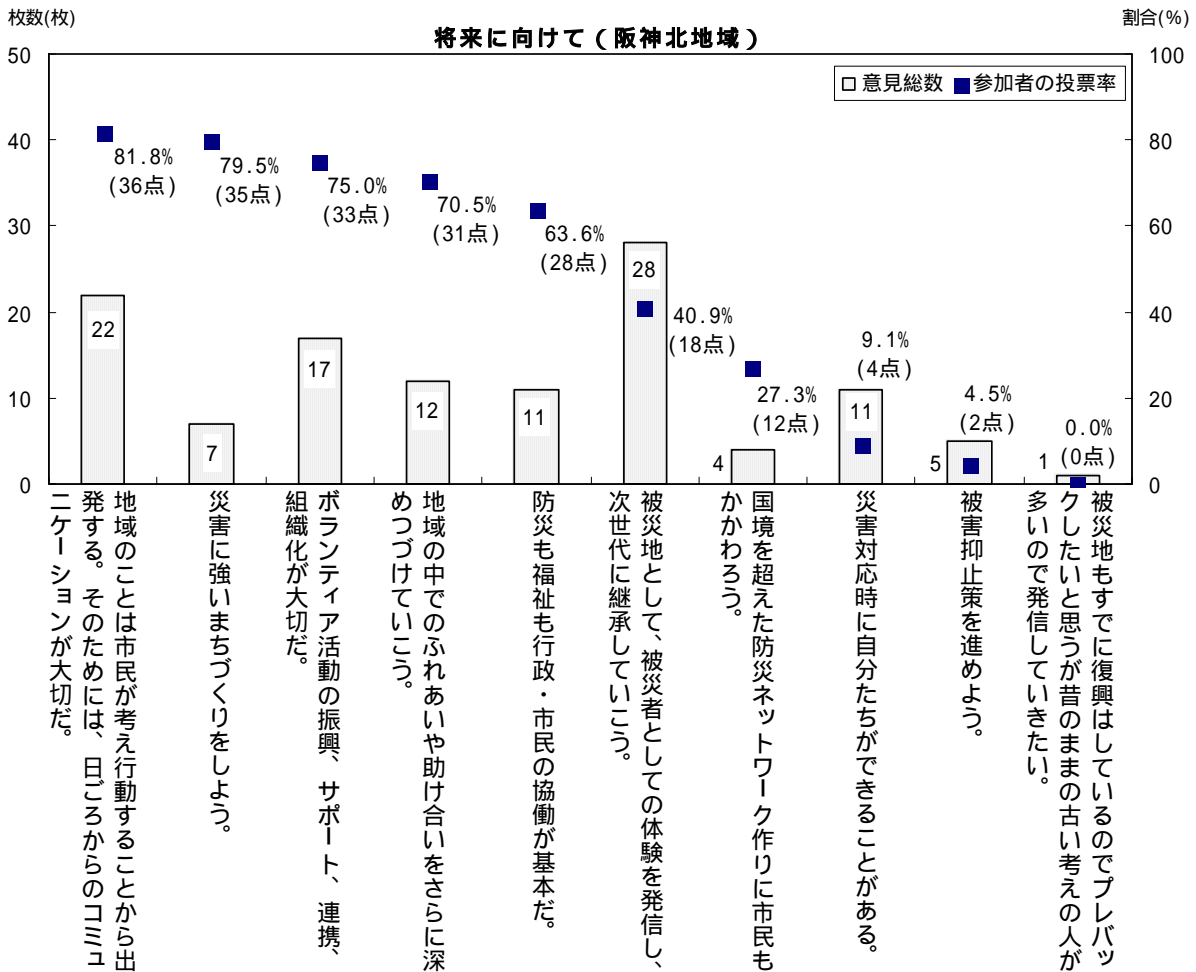
地域の連携を大切にしたい。(6G)	隣近所とのコミュニケーションを大切にする。(6G)
-------------------	---------------------------

・ステップ2：阪神北地域のまとめ

将来に向けて(2004年6月6日 阪神北)



・「将来に向けて」について



会場全体でまとめた「将来に向けて」については、大きく10項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「被災地として、被災者としての体験を発信し、次世代に継承していこう。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「地域のことは市民が考え行動することから出発する。そのためには、日ごろからのコミュニケーションが大切だ。」「災害に強いまちづくりをしよう。」「ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ。」を重要だと考えた人が多くなっている。

また、「災害対応時に自分たちができることがある。」という項目の中には、「食の確保、各家庭で一人30食のラーメンを確保する。」というような具体的な意見もあった。

3) 阪神南地域

日 時：平成16年6月6日(日) 14:30~17:30

会 場：西宮市市民交流センター/ホール

テ ー マ：「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、
将来に生かしていくべきことは？」

14:30 はじめに
(5分) ・あいさつ、趣旨説明

14:35 ステップ0：「ワークショップとは？」
(20分) ・ワークショップの進め方 できるだけ簡単に
・アイスブレイク(自己紹介)

14:55 ステップ1：「10年間を振り返って」
(40分)
被災地が ・震災後10年間でできたこと、できなかったこと

15:35 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ ↑

15:45 ~休憩~
(10分) ↓

主体感覚が大切！
『あなたが県民として』

各班から1人ずつ
代表者を選出する

15:55 ステップ2：「将来に向けて」
(40分)

被災地が { ・将来に向けて生かすべきこと
・世界に向けて発信していくべきこと

ステップ1の整理
(40分) ↓

16:35 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ

16:45 ~休憩~
(5分)

16:50 ステップ3：「まとめ」
(35分) ・各班の成果を整理 ↑

・重要だと思う別々の
島にシールを貼る

17:25 最後に
(5分) ・総括ワークショップの案内と代表者の決定

17:30 終了 ↑

・各班2人ずつ

・ 阪神南地域ワークショップの様子



まずは自己紹介でリラックス



各班で議論が白熱する場面も



ステップ1でまとまった意見を発表



身振り手振りで自分の班の内容をアピール



代表者によるステップ1のまとめ



ステップ2についても各班で発表



ステップ2のまとめは会場全体で行った



まとめた項目に順位付け

・ステップ1：各班のまとめ

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神南1)

グループ活動ができた。(10)

コーラスグループができました。(10)	ボランティアのいずみ祭活動のリーダーになり指導するようになった。(10)
ボランティア健康、体操、豊饒指導実施。(10)	料理教室を開き、料理の指導を行う。(10)
とりのり人との付き合いが深くなりました。(10)	

地域活動が活性化できた。(10)

安全防災対策で自主防災のグループができた。自分の町は自分たちで守る。(10)	仲間間に互励の精神が養われた。(10)
誰でも気軽に参加できるボランティア活動の企画実施。・ランドリーボランティア・捨てないで！ペルマープ・忘れられたあの日！ビデオ(10)	まちづくりを通して地域活動が活性化し若い人の参加が増えた。(10)

個人財産の復興ができた。(10)

個人的には家の再建にて町事務所に建築しました。人と人との関わり合いができた。(10)
震災で被災し自宅の建て替わった。まわりも壊れいなりつつある(10)

亡くなった方の家屋への支援が十分(土地を譲られて帰ってこられない)(10)

ハード的な町づくりができた。(16)

園遊物質、料理などの講座ができた。(16)	小学校や集会所、公園や防災設備が設置された。(16)
まちあそびの復興がほぼ出来あがった。(16)	歩道的なインフラの復興(堤防、道路)はほぼ完了。(16)
震災被害復旧区画整理事業がほとんど完了し外見の家屋、道路コミュニティ道路の確保が完了、防災公園ができ。(16)	

ハードの未整備。(10)

商店や小売市場などが立ち直れていない。(10)	ハードウェア的復興が未済の地域ができていく。(10)
-------------------------	----------------------------

自分と新しいマンションのコミュニティーがうまくいっていない。町づくりがこれから提案中。(10)

体験を基にした有事に対する備え(震災の教訓)ができていない。町づくりが難しいと日常は専攻。(10)

制度の未整備。(10)

自然災害で家屋が破壊された時個人で負担しずるべき(制度など)で修理できる制度がまだ。(10)

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神南2)

仮設住宅で苦労した(20)

仮設住宅で被災しました。松江の知人のところへ行くことになりました。(20)	松江に一月半くらいおりましたが、仮設が出来て帰りました。(20)
---------------------------------------	----------------------------------

協働と参画の大切さを実感できた(20)

行政と地域の協働の実感しなくてはならない(20)	住民と行政が協働してできた。(20)
--------------------------	--------------------

住宅再建がほぼできた(20)

個人的には震災で壊れた家屋が徐々に機能が回復しなくなりつつある。(20)	住宅 復興住宅(20)
町の復旧復興ができた(20)	二年後に現在の陽光町の復興住宅に入りました。安定しております。(20)
尼崎市内の震災復興について今年も関係してはいますが、まだ不安定な感じがする。(20)	復興住宅の情報発信ができた。(20)
復興住宅支援(弱い)(20)	

コミュニケーションの大切さを認識した(20)

コミュニケーション人との様々な人間関係など相手のことを考えることができた(20)	コミュニティの再生、活性化(20)	自分をふりかえってみて少し変わってきた(20)
震災直後にある人が涙を流し、半日中腹痛で水を求めてしまった。(20)	不景が続く中仕事も新しくチャレンジができた。楽しくなってきた。(20)	個人関係が出来た。(20)

NPOやボランティアグループがたくさんあがった(20)

この指とまれの立ち上げをした(20)	ボランティア活動をするようになった(20)
町づくり協議会、NPOやボランティアグループがたくさんあがった(20)	行政からの指示待ち状態であった。(20)
住居自らの働くことの大切さ(20)	町にたくさんビルができた(20)

経済の復興が遅れており生活不安が続いている(20)

失業率が高い(20)	将来計画が必要であるがなかなかできない。復興資金の借金が残ってローン地獄(20)
尼崎市内の現状は経済の地盤沈下が激しく震災後ますます加速している。(20)	

防災意識が向上した(20)

個人的な防災意識を持つようになつてきた。(20)
生活用財を準備するようになつて来た。(20)

10年を振り返って(2004年6月6日 阪神南3)

身近での防災管理が出来ていない(30)

いざというときの家の確保のための備材とのつなげりができていない(30)	ライフラインを出来るだけ自分で、という意識が醸成できていない(30)	地域内の防災準備が出来ていない(30)
人間サイズのまちづくり=自動車サイズのまちづくりができていない(30)	地域内で防災に対する話し合いが出来ていない(30)	

環境景観に配慮したまちづくりができなかった(30)

環境には配慮したまちづくりが出来なかった(30)	美しい景観のまちづくりが出来なかった(30)
--------------------------	------------------------

経済力が低下した(30)

商店の活力がない(30)	小さな店がまたまた元氣になっていない(30)
集いの元気がない(30)	種々ファッションの復活(種々ブランドの美値)が出来なかった(30)

主に高齢者の心のケアが出来ていない(30)

入居らしの人への支援が出来ていない(30)	街はきれいになってきたが人の心はケアできていなかった(30)
狭い方々への支援をしてきたが継続できていない(30)	若い人には、まだまだ立ち遅れていない人がいる(30)

行きたよりになるべくせず、自ら行動するようになった(30)

商店のとき病気になる、健康が第一だと特に思った(30)

芸術文化づくりが出来ている(30)

情報面に意図が感じられる(30)

近所のコミュニケーションが不足している(30)

ボランティアの活動が増えたこと(30)	元の住所に戻れなかった人が多くコミュニティが再生できなかった(30)	住居は出来たと思いつきの空間整備、いざし、住人の結束が出来なかった。(30)	地域の中で新住民と旧住民のコミュニティが出来ていない(30)
	地域の防災意識が少しは高まった(30)	隣近所が遠くなった(30)	

インフラ整備が進んだ(30)

環境が良くなった(30)	都市としての整備はある程度進んだ(30)	道路が大幅整備されてきた(30)
--------------	----------------------	------------------

10年を振り返って(2004年6月6日 阪神南4)

震災体験で得た意識の風化した(40)

震災で得た貴重な資料を収集し、整理できなかった(40)	震災時の助け合いの精神が持続できなくなった(40)
防災意識の特長ができていない(職場、市民)(40)	

まちの再建はできたが、住みこなし(ソフト面)はまだこれからだ(40)

おのおの建物等ができた(40)	ソフト面での整備ができていなかった(40)	ハード面での復興(40)
市屋市の町の復興はほぼ出来上がった(40)	民間から種々つづられた街が生まれ変わった(40)	

心のケアは見えないのでできていない(40)

震災を踏まえて、市域内の防災対策ができていない(40)

今後の災害に対する備えが出来ていない(40)

公共施設の耐震補強ができていなかった(40)	今後の地震対策が不安だ(40)
次世代への伝達(40)	

被災地からの発信ができていない(40)

1月17日を全国にアピールすることができた(40)	やっどプレーパークの全国大会ができることになった(40)
防災の日を、1月17日の追悼式を都市でできている(40)	

防災意識の向上が図れた(40)

私の地域では何となく子ども会が復活になりました(40)	自分の家の防災対策は十分とはいえないけれど(40)
地域みんなで子供たちを、見守ろうという気運が高まった。(若い保護者の意識の風化)(40)	防災意識の向上が図れた(40)
	防災計画の充実ができた(40)

財政、家計へのダメージが残っている(40)

個人の借財が返せていない(40)	市の財政ができていない(40)
社員が死んだ。家がつぶれた。収益ヒルがつぶれた。(40)	多くの住人が銀行がつぶれた(40)

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神南5)

ハードの復旧ができた(56)

ライフラインは復活した(56)	家屋などは復活した(56)
広域幹線の供給開始ができた(56)	住宅の復旧及び復興ができた(56)

復興から次のステップに進みだした(56)

その際、行政の対応が薄すぎた。地域の人々の会話がもっとほしい(56)

自分自身の能力を改善できた(56)

地域防災力が進まなかった(56)

心つと災害の恐ろしさをもつていつも注意を怠らないうようにしてほしい(56)	地域の防災はいまいち(56)
自主防災の自主性が住民に浸透しなかった(56)	

地域ネットワークの向上ができた(56)

お互い助け合う気持ちのよみがえった(56)	近隣の住民の方とよく話をするようになった(56)
地域ネットワーク作りで仲間を作ることの大切さと理解できた(56)	地域のコミュニティが前進できた(56)

災害時の協力の大切さが分かった(56)

自主防災会の精進率が相対増加した(56)
多くの人々が震災をきっかけに動き出した(56)

子育てや学校との連携を大事にしよう(56)

地域で子育てが大事。愛を育てる。自然に親しむ(56)
防災教育と学校との連携ができた(56)

意識が継続しなかった(56)

過ぎ去った災害しるしや忘れかけている(56)
当時は事業場などまわりのあつたが今は先通し(56)

ある程度自分で事業を作れるようになった(56)

命の大切さが理解できた(56)

コミュニティの復旧ができた(56)

多くの子ども達と接するなかで震災の怖がらなくなった(56)

震災の経験を伝えることができるようになった(56)

森林が少なくなり緑が少なくなっている(56)

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神南6)

西宮ブランド等の新しい産業の仕組みと方法が生まれた(66)

コミュニティビジネスが普及してきた(66)	ボランティアから継続するためにうまく企業への移行がわりの難しい(66)
出来たこと。被災したまちの復興を道徳的リソースとして、結果もふくめシニアムとして、再活性化できた(66)	震災の証として、西宮ブランドを、洋菓子と菓子と数り組み、一歩の成果がとれている(66)

まちの復興が遅れている(66)

10年過ぎてやはり景況が回復できていない(66)	出来なかったこと。街の中の市場・商店街の復興がかわる商業に変わったところがないからである(シャッター商店街)(66)
行政への要望。認定資産税、都市計画税等の減免、インフラの改善とくに都市計画、道路等の着工(66)	
企業の復興に力がある企業の把握に努めた(66)	

医療、福祉の対策、対応ができた(66)

医療の確保(バリアフリーを確保できた(66))	被災後に、心の支えを失った人への心のケアを行っているがなおその途上にある(66)
福祉の方は少しよくはなっていますが、まだまだ整備できていない(66)	

地域の防災力の強化の必要性(66)

できたこと。日常生活上の地震に対する備え(66)	できなかったこと。地域のひとびとによる、団結力の強化(66)	防災力の強化拡充が出来た(66)
地域コミュニティの勉強ができるようになった(66)	地域防災力の精進および、育成ができた(66)	防災ネットワークがまだまだ未熟まで周知できていない(66)

思いやりの心が芽生えた(66)

バリアフリーの考え方が浸透した(66)	まわりの事だけでなく、まわりの人が出てきた(66)
以前は、自分以外あまり意識してはいなかったが他人に対して見る目が変わった(66)	

防災意識の向上と、薄れ(66)

できたこと。地震に対する認識(66)	学校教育における防災教育ができた(66)	災害のこわさを忘れてきた(良・悪い)(66)
--------------------	----------------------	------------------------

ボランティア精神のめばえ(66)

ボランティア精神が生まれた(66)	行政のワークショップへ積極的に参加した(66)
自分から何かしようと動くようになった(66)	

・ステップ1：阪神南地域のまとめ

10年間を振り返って(2004年6月6日 阪神南)

地域ネットワーク、グループ活動やコミュニティのつながりは向上したが新しいまちでは不足している。(30点)

活動家ネットワーク(100) 活動家ネットワークのつながりが向上している(100) 活動家ネットワークのつながりが向上している(100) 活動家ネットワークのつながりが向上している(100) 活動家ネットワークのつながりが向上している(100)

グループ活動の活性化(100) グループ活動の活性化(100) グループ活動の活性化(100) グループ活動の活性化(100) グループ活動の活性化(100)

コミュニティの活性化(100) コミュニティの活性化(100) コミュニティの活性化(100) コミュニティの活性化(100) コミュニティの活性化(100)

健康第一・いのちが大切にたどったステップを振り返り、復興から次のステップに進み出した(7点)

健康第一・いのちが大切にたどった(100) 健康第一・いのちが大切にたどった(100) 健康第一・いのちが大切にたどった(100) 健康第一・いのちが大切にたどった(100) 健康第一・いのちが大切にたどった(100)

主に高齢者や遺族への心のケアができていない。(4点)

主に高齢者や遺族への心のケアができていない(100) 主に高齢者や遺族への心のケアができていない(100) 主に高齢者や遺族への心のケアができていない(100) 主に高齢者や遺族への心のケアができていない(100)

制度未整備が大きい、行政に頼らず自ら行動する大切さが実感できた。(18点)

制度未整備が大きい(100) 制度未整備が大きい(100) 制度未整備が大きい(100) 制度未整備が大きい(100) 制度未整備が大きい(100)

防災意識は向上したが、今後の災害に対する備えはまだまだ(27点)

防災意識は向上したが(100) 防災意識は向上したが(100) 防災意識は向上したが(100) 防災意識は向上したが(100) 防災意識は向上したが(100)

新しい産業の仕組みなどは生まれませんが、経済の復興はこれからは(23点)

新しい産業の仕組みなどは生まれませんが(100) 新しい産業の仕組みなどは生まれませんが(100) 新しい産業の仕組みなどは生まれませんが(100) 新しい産業の仕組みなどは生まれませんが(100)

子育てや学校への連携を大事にしよう(5点)

子育てや学校への連携を大事にしよう(100) 子育てや学校への連携を大事にしよう(100) 子育てや学校への連携を大事にしよう(100) 子育てや学校への連携を大事にしよう(100)

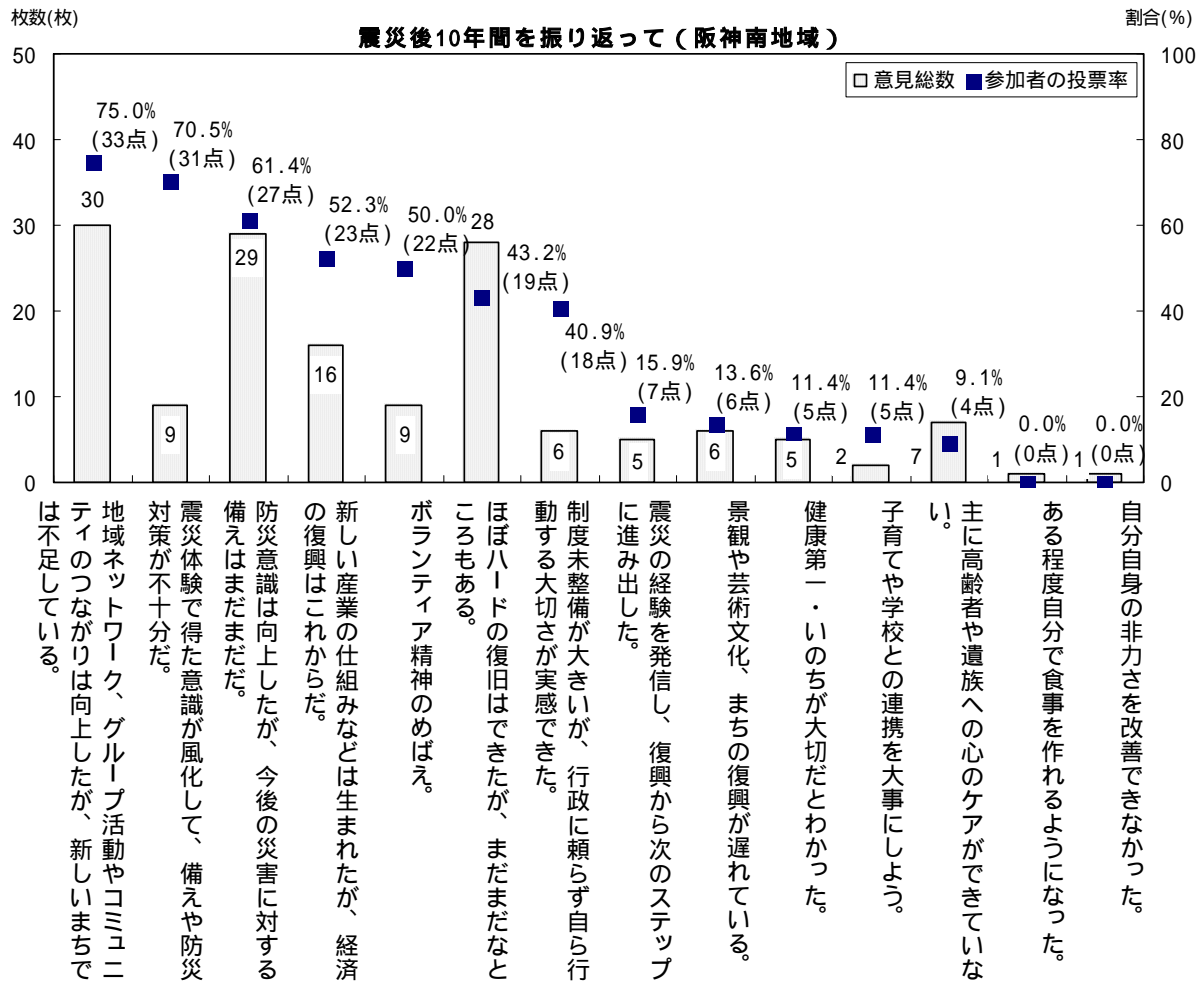
ボランティア精神のめばえ(22点)

ボランティア精神のめばえ(100) ボランティア精神のめばえ(100) ボランティア精神のめばえ(100) ボランティア精神のめばえ(100)

自分自身の非力さを認めてあげよう(5点)

自分自身の非力さを認めてあげよう(100) 自分自身の非力さを認めてあげよう(100) 自分自身の非力さを認めてあげよう(100) 自分自身の非力さを認めてあげよう(100)

・「震災後10年を振り返って」について



阪神南地域の参加者44名が、会場全体でまとめた「震災後10年間を振り返って」は、大きく14項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思う意見を5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「ほぼハードの復旧はできたが、まだまだなところもある。」に含まれる意見が3番目に多かったが、順位付けの段階では、「震災体験で得た意識が風化して、備えや防災対策が不十分だ。」「新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ。」「ボランティア精神のめばえ。」を重要だといった意見の方が上回っている。

また、「景観や芸術文化、まちの復興が遅れている。」という項目の中には、「情操面で荒廃が感じられる」という意見もあった。

・ステップ2：各班のまとめ

将来に向けて(2004年6月6日 阪神南1)

震災時の正しい情報伝達。(16)

正しい情報の発信と受信を早くするシステムをつくる。(16)

被災地では何ものから可及し正確な情報がほしいと思います。(16)

外国人やハンディのある人にもわかりやすい町づくり、コミュニティづくりを推進する。(16)

物的、資金的な援助の仕組みはもろろ人のこと、一人一人の心構えや考え方の中に相互扶助や思いやりの心を醸成させる仕組みづくりと、その実施。(16)

被災者と支援者へのマニュアルづくり。(16)

災害発生時からの段階的に(時系列に)必要なことできることなどをまとめてマニュアル化すること。(16)

震災直後の困ったことなど、手の声も発信していくこと。(16)

自立するための仕組みの検証と成功事例の顕彰と、その発信。(16)

次世代に記録を残す(16)

さまざまな立場、状況下で起こった事例を録音化し読みものビデオなどで残すことに教育意義を付与。(16)

震災、被災地現場の写真などまとめて次の世代の子供たちに知らせる。(16)

震災を体験していない人に当時の状況を伝えること。(16)

地域の防災づくり(16)

地域での防災組織をつくっていくこと。(16)

地域の自主防災対策を町全体で考え実際に訓練実行できるように毎年一度コミュニティの一環としていたがほしい。(16)

ボランティアの活性化(16)

ボランティアの活動を地域でもっと盛んにしていくこと。(16)

高齢者の福祉対策事業を更に一人暮らしの友愛会館など集いのマップ作り。(16)

災害救助、救援の仕組みづくり(16)

民間体制の充実をはかる。(16)

災害救助などの育成を進め世界で活躍できるシステムをつくる。(16)

将来に向けて(2004年6月6日 阪神南2)

災害の正確な情報発信を作る(20)

震災資料・情報各正確に公開する(国内)・情報発信の確立・ネットワーク化(20)

震災情報をインターネット等で公開すること(20)

正確な情報発信をするに同時に企業との協力についても検討

インターネットを活用して早く情報を発信するシステムを作る(20)

防災体制の官民の責任の区分を明確にする(システム作り)(20)

ボランティア、NPOなどのネットワークを構築していける行政人の必要性(20)

緊急時の防災体制を明確にし、個人個人の認識を深め訓練する(20)

自主防災組織を作る(地域防災も促す)(マニュアルを作る)(20)

避難所マニュアルなど管理運営等の指針作成(20)

防災対策を確立する(20)

防災面において地域と行政の連携、高齢者・後継者の情報をついんでおく(20)

防災について官民の責任区分の明確化(20)

住みやすい住宅作りを進める(20)

仮設住宅の作り方を甲府で地震の起こった場所にノウハウを提供する(20)

仮設住宅の生活上の問題を整理する(20)

震災を意図的にインフラの整備を考える(20)

南舞優活住宅、交通事情が悪く、もつと時間的に考えてほしい。(20)

再開発、区画整理のノウハウを蓄積する(20)

住民の自主的な取り組みを育てていく(20)

ボランティアの育成とつながり維持していくこと。(20)

子供達の通学をもつと安全にしてほしい(20)

私人が多いので今以上にボランティアを考えたください(20)

地域社会のコミュニティの育成(ふる里登録)(20)

地域のコミュニティの組織化、ボランティアを登録する(20)

震災を忘れず後世に伝えていく(風化させない)(20)

地震に対する認識向上の防災教育(20)

震災を忘れず後世に伝えていくこと(20)

防災意識の伝達を行う(20)

将来に向けて(2004年6月6日 阪神南3)



将来に向けて(2004年6月6日 阪神南4)



将来に向けて(2004年6月6日 阪神南5)

震災の教訓を世界に発信する(5G)

ライフラインの大切さを若い人にも伝えていく(水、ガス、電気) (5G)	緊急事態に対応するための準備(水、食糧) (5G)
震災の教訓を世界に伝えていく(5G)	世界へ地震の恐ろしさを具体的に伝えていく(5G)
避難時に車使えなど伝える(5G)	防災は身を守ることを伝える(5G)

地球環境を守ることが防災につながる(5G)

子どもたちを自然に慣れさせる(5G)	地域の環境を美しくする(5G)
地球温暖化を防止しなければ地球は危ない(5G)	

コミュニティ力をつける(5G)

コミュニティでの付き合いの活性化により知っている人を増やす(5G)	付いた特長せる仲間を作る(5G)
震災を忘れないで地域でお互いに助け合いたい(5G)	地域防災力はコミュニティ力です(5G)
日頃から近所づきあいを大切にせよ(5G)	被災者同士のエゴが見えてきてもっと仲良くしてほしい(5G)

行政は税金を効率的につかう(5G)

国政の場で将来の防災についてもっと真剣に討論してほしい(5G)	必要に応じて重点的に税金を使う(5G)
---------------------------------	---------------------

世界の被害にあつていない国々の人々の助けを借りてほしい(5G)

自己防衛の努力をする(5G)

建物は外観、内装よりも地震耐震基準を重視する(5G)	山崩れについて大きな被害があった。山崩れの住宅は要注意(5G)
----------------------------	---------------------------------

地域の防災力の鍵はリーダーの存在が必要(5G)

建物の被害はこの地域にはあまりないが予想被害を伝えてほしい(5G)

将来に向けて(2004年6月6日 阪神南6)

ハード面だけでなく精神的な応援も必要です(6G)

心のケアセンターや常設相談として市町村に設けること(6G)

新しい復興制度をつくること(6G)

産業復興支援の融資制度を充実すること(6G)	住宅再建支援法を改正し再建可能な金額とすること(6G)
------------------------	-----------------------------

地震に強い建物づくりをすすめる(6G)

町の広域を小さくするシステムを研究すること(6G)	耐震診断をすべての構造物で実施すること(6G)
	耐震補強を推進する(6G)

安心して生活していける町作り(6G)

建物をほしの質らしの道具はユニバーサルデザインの考えで具体化する(6G)	建物を建設するときにはコストアップであつても防災対策をきめて計画する(6G)
高速道路は地下方式にできるから都市計画を考える。(6G)	

日常の防災意識を高める(6G)

個人での備え(備蓄袋、履物)を再確認する(6G)	防災教育の義務化を回すべきである(6G)
--------------------------	----------------------

震災体験を次の世代へ語り続ける(6G)

震災の体験等を語り部として伝えていくこと(6G)	被災地であるのはこことあつた一部であるのでこのことが一番の体験として語り続けていく(6G)
震災被害や風水害の恐ろしい時代に伝える努力をする(5G)	子どもたちに伝えていくことが大切(5G)

震災で得た経験を生かしていく(情報発信)(6G)

なんといっても経験を生かすべき(6G)	日本も言っているのは被災国にはその国の経験を生かして情報を共有することに価値がある(6G)
---------------------	---

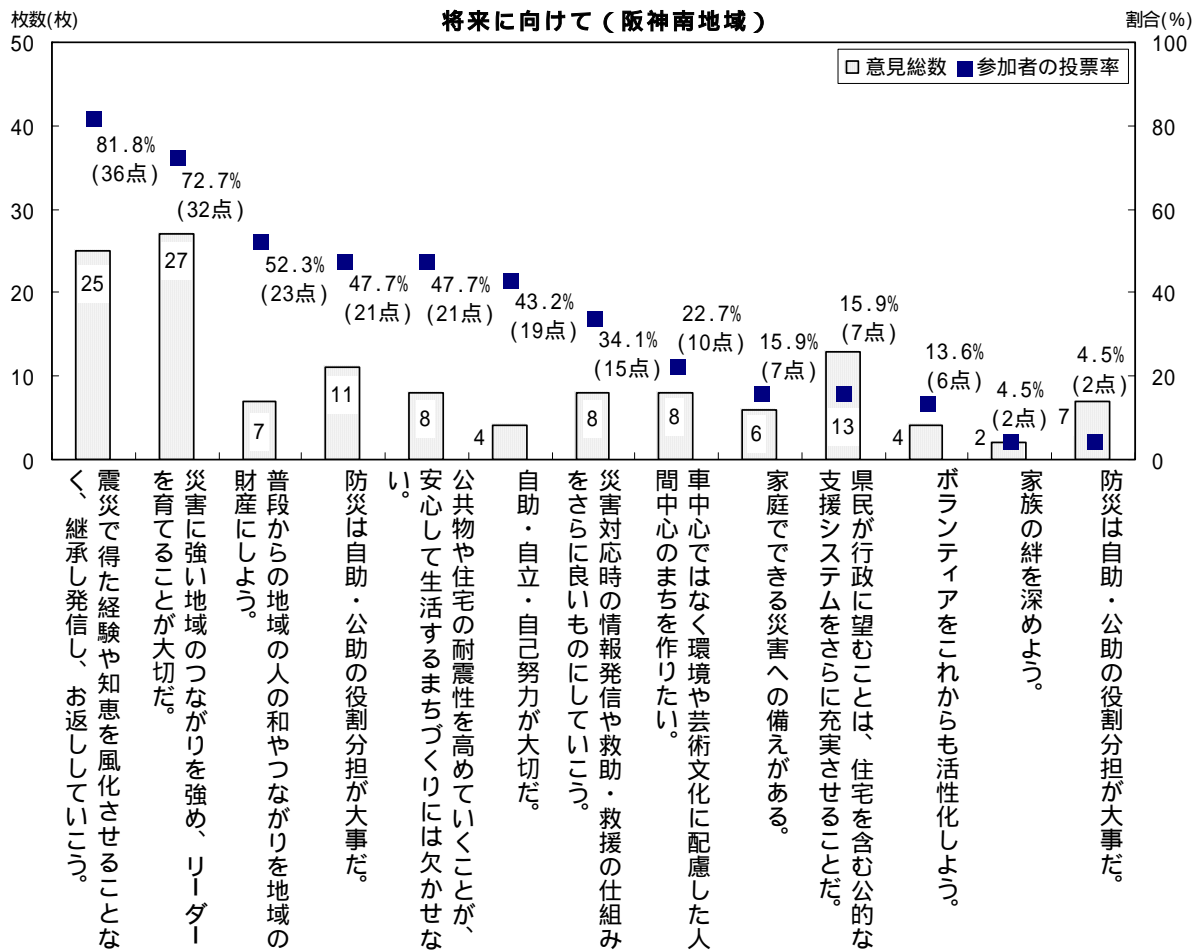
地域コミュニティの大切さを伝える(6G)

地域コミュニティの大切さを伝える(6G)	地域コミュニティを大切に考え構築すること(6G)
継続の力で人の命が助けられる(6G)	

ライフラインの大切さを世界へ伝える(6G)

まちの復興が力強く進むことができたこと(日本の力強さ)(6G)	ライフラインの大切さ(6G)
電気・水・ガスの復旧を最優先すべきです(6G)	

・「将来に向けて」について



会場全体でまとめた「将来に向けて」については、大きく13項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「災害に強い地域のつながりを強め、リーダーを育てることが大切だ。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承し発信し、お返ししていこう。」の方が上回った。また、カード枚数が3番目に多い「県民が行政に望むことは、住宅を含む公的な支援システムをさらに充実させることだ。」も順位付けの段階で、「普段からの地域の人の和やつながりを地域の財産にしよう。」などの方が上回り、10番目になった。

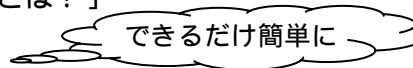









また、「車中心ではなく環境や芸術文化に配慮した人間中心のまちを作りたい。」という項目の中には、「芸術文化に触れる機会づくりをする」、「芸術文化は地域の「力」です」という芸術文化を育もうという意見や「子どもたちが自然に親しめる」、「地域の環境を美しくする」、「地球温暖化を防止しなければ地球が危ない」といったような環境問題に関する意見もあった。

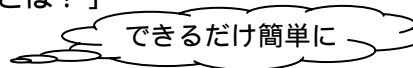
4) 神戸地域


日 時：平成16年6月12日(土) 10:00~13:00

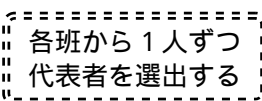
会 場：県立神戸学習プラザ/第4講義室


テ ー マ：「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、
将来に生かしていくべきことは？」


10:00 (5分)	はじめに ・あいさつ、趣旨説明
10:05 (20分)	ステップ0：「ワークショップとは？」 ・ワークショップの進め方  できるだけ簡単に ・アイスブレイク(自己紹介)
10:25 (40分)	ステップ1：「10年間を振り返って」 被災地が  震災後10年間でできたこと、できなかったこと
11:05 (10分)	班別発表 ・各班2分程度 
11:15 (10分)	~休憩~ 
11:25 (40分)	ステップ2：「将来に向けて」 被災地が   ・ 将来に向けて生かすべきこと ・ 世界に向けて発信していくべきこと
12:05 (10分)	班別発表 ・各班2分程度 
12:15 (5分)	~休憩~ 
12:20 (35分)	ステップ3：「まとめ」 ・各班の成果を整理 
12:55 (5分)	最後に ・総括ワークショップの案内と代表者の決定
13:00	終了 


 できるだけ簡単に


 主体感覚が大切！
『あなたが県民として』


 各班から1人ずつ
代表者を選出する
























































・神戸地域ワークショップの様子



齋藤副知事のあいさつで始まる



アイスブレイクで会場の雰囲気も和やかに



各班とも熱心に意見を出し合う



どの班も負けじと熱のこもった発表が続く



各班の代表者によるステップ1のまとめ



ステップ2でも引き続き熱心な話し合いが続く



参加者全員でのステップ2のまとめ



丸シールによる投票の様子

・ステップ1：各班のまとめ

10年間を振り返って(2004年6月12日 神戸1)

外観・建物などの復興が出来た(16)

住所も比較的早くできた(16)
 車が出ました(16)
 赤い交道の復興ができた(16)
 八幡神社の鳥居がたつた(16)
 赤い交道の復興ができた(16)
 赤い交道の復興ができた(16)
 赤い交道の復興ができた(16)

主婦として貴重な体験が日々ある(16)

個人でボランティアに参加できるようになった(16)

高齢者のふりこみ(9年間参加できた)(16)
 赤い交道の1・17のついで(9年間)参加できた(16)
 赤い交道の1・17のついで(9年間)参加できた(16)
 赤い交道の1・17のついで(9年間)参加できた(16)

ボランティアに対する意識があがり団体ができた(16)

ボランティアで歌(楽しい)に参加している(16)
 ボランティアに参加できている(16)
 ボランティアで歌(楽しい)に参加している(16)
 ボランティアで歌(楽しい)に参加している(16)

具体的に備えをするようになった(食料・防災)(16)

備蓄品の確認ができた(16)
 防災の確認ができた(16)
 備蓄品の確認ができた(16)
 防災の確認ができた(16)

商店街がなくなったり住宅が復興されていなく空き地が残っている(16)

住宅が復興されていなく(16)
 商店街がなくなった(16)
 住宅が復興されていなく(16)
 商店街がなくなった(16)

災害に対する心構えができた(16)

災害時の避難所、赤い交道の場所の確認が出来た(16)
 子供たちの災害に対する意識があがった(16)
 災害時の避難所、赤い交道の場所の確認が出来た(16)
 子供たちの災害に対する意識があがった(16)

心の復興ができた(16)

他町集のついで(16)
 人の心の大切さが身にしみる(16)
 他町集のついで(16)
 人の心の大切さが身にしみる(16)

住み慣れたところ(16)

住み慣れたところ(16)
 住み慣れたところ(16)
 住み慣れたところ(16)
 住み慣れたところ(16)

コミュニティがすすんだ(16)

地域コミュニティに全力で取り組む(16)
 地域活動が(いくらか)できた(16)
 地域活動が(いくらか)できた(16)

地域活動が(いくらか)できた(16)
 地域活動が(いくらか)できた(16)

地域活動が(いくらか)できた(16)
 地域活動が(いくらか)できた(16)

地域活動が(いくらか)できた(16)
 地域活動が(いくらか)できた(16)

地域活動が(いくらか)できた(16)
 地域活動が(いくらか)できた(16)

10年間を振り返って(2004年6月12日 神戸2)

復興への都市計画はプラン通りに進んでいない。(20)

復興への都市計画はプラン通りに進んでいない。(20)
 復興への都市計画はプラン通りに進んでいない。(20)
 復興への都市計画はプラン通りに進んでいない。(20)

災害弱者へのケアができていない(20)

災害弱者へのケアができていない(20)
 災害弱者へのケアができていない(20)
 災害弱者へのケアができていない(20)

次世代の子らに災害の悲惨さが教えられていない。(20)

次世代の子らに災害の悲惨さが教えられていない。(20)
 次世代の子らに災害の悲惨さが教えられていない。(20)
 次世代の子らに災害の悲惨さが教えられていない。(20)

被災後の行政の地域活動がうまくいっていない。(20)

被災後の行政の地域活動がうまくいっていない。(20)
 被災後の行政の地域活動がうまくいっていない。(20)
 被災後の行政の地域活動がうまくいっていない。(20)

次の地震災害が起こった時に危機管理やサバイバルマインドがいかにかた切かを知った。(20)

次の地震災害が起こった時に危機管理やサバイバルマインドがいかにかた切かを知った。(20)
 次の地震災害が起こった時に危機管理やサバイバルマインドがいかにかた切かを知った。(20)
 次の地震災害が起こった時に危機管理やサバイバルマインドがいかにかた切かを知った。(20)

地域の人達と心の支援を回り初の大切さを知ることができた。(20)

地域の人達と心の支援を回り初の大切さを知ることができた。(20)
 地域の人達と心の支援を回り初の大切さを知ることができた。(20)
 地域の人達と心の支援を回り初の大切さを知ることができた。(20)

復興住宅支援事業が円滑にできた(20)

復興住宅支援事業が円滑にできた(20)
 復興住宅支援事業が円滑にできた(20)
 復興住宅支援事業が円滑にできた(20)

町がきれいになった(20)

町がきれいになった(20)
 町がきれいになった(20)
 町がきれいになった(20)

町がきれいになった(20)

町がきれいになった(20)
 町がきれいになった(20)
 町がきれいになった(20)

10年を振り返って(2004年6月12日 神戸3)



10年を振り返って(2004年6月12日 神戸4)



10年を振り返って(2004年6月12日 神戸5)

住民自治的なリーダーが育成には体系的な取り組みが必要。できていない(56)

リーダーのまとめる自治会等の発展(56)	リーダー個人の向上(56)
後援者の数費をにらんだ住民自治活動。リーダーの責務(56)	行政・公営等の連携(56)
用具・道具を使い切る力(56)	

防災の一般の準備ができていない(56)

ガス等停止時の対応策ができていなかった(56)	市民課長というより「住居」防災の表現が必要(56)
地区別の防災対策などができていない(56)	男性の社会参加の状況には進展がない(56)
被災一般の準備をしていないことを感じた。(56)	

心の復興がまだまだ残っている(56)

めんどくさいもの(とじこもり)と出ていないものがある(56)	心の復興がのこされたまま。できていない(56)	心の復興はまだまだこれから(56)
用具をける定量的評価結果が決まっていない(56)	公の施設の管理費の人は道は相変わらず困る(56)	

10年を振り返って(2004年6月12日 神戸6)

建物は出来たが空地は残っている(66)

コミュニティ施設も多く出来た。(66)	ハード面ではほぼ復興は完了した。(66)
空地がまだまだたくさんある(66)	

新しいいれあいのしくみが生まれた(66)

飲食住宅で住宅のコミュニケーションがとれていた(66)	新しいいれあいのネットワークの活動として地域の人の数の交流を進めている(66)	私はふれあい喫茶、バーガー、イキイキ講座等を皆さんと自分のために働いている(66)
私は現在その住宅で人生を終るまで住みたいので皆さんが楽しい仲間であってほしい(66)	私は色んな人の気持ちを知ることができた(66)	震災で起こった事実を事実として向き合おうことがやっと出来るようになった。(66)
地域の福祉センターでひとり暮らしの給食サービスをすすめて頂き、たのしいです(66)	阪急住宅時、住居に入ってからはずっとできていない(66)	

防災への意識を保持することの大切さとむつかしさを感じた(66)

私は単純にロック(固め)だったと書きの用紙ができてなかった(66)	私は水の節約ができてなかった(66)
私は職員が当時の「いさづ」にそなえる気持ちを持って続けられていた(66)	防災に対する意識の向上があまりできていない(66)

住民組織の育成不足。リーダーの育成が必要(56)

できてなかった事。住民自治組織のレベルアップ(56)	住民防災に当たるリーダーの育成に手がついていない(56)
住民、自主防災のリーダーが不足している。(公務員や公務員08の力量不足)(56)	復興住宅での高齢化とリーダーの育成ができていない(56)

新しいネットワークが広がっている(56)

阪神間に福祉部ができた(56)	阪急等会社に応じて元気は高齢者が多いグループができた(56)
新しい復興文化が育ちつつある(56)	地域おこし、おもちゃライブラリーを起こした(56)
町に花輪が増えた(56)	

メモリアルができた(56)

インフラの整備が早くできた(56)	阪神・淡路大震災記念「人と防災未来センター」ができた(56)
-------------------	--------------------------------

経済的負担が増えた。家の復興(56)

金持ちと貧乏の格差が広がった(56)	自家の耐震化ができてなかった(56)
自分の家の建て直しができなかった(56)	借金ができた(56)
貯金ができなかった(56)	半壊の家の応急措置ができた(屋根のふきかえ)(56)
物(家など)はほぼできた(56)	

ボランティア活動が活性化した(56)

ボランティアグループとの出会いが生まれた(56)	ボランティアがあれあれいアロンの北こしに参加した(56)	ボランティアを楽しくすることができた(56)
ボランティアが活動を委譲し受け入れる事案ができた(56)	地域ではこしたフェニックス兵衛に参加した(56)	任意団体全体を知りたいのだからと任意団体生協を卒業できた(56)
友達ができた。ネットワークが広がった(56)	地域おこし大島花屋も立ち上げた(56)	楽しいグループができた。(56)

新しい地域コミュニティがまだ出来ていない(66)

多くの団体の人たちも助け合うコミュニティが出来た(66)

地域が、一帯感を保つことができていないのでは。(66)	復興の多い地域コミュニティづくりが出来るようになった(66)
地域コミュニティはやり変らず(66)	

震災の記憶を伝えることが難しい(66)

あの時得た教訓、命の大切さを一人でも多くの人達に伝えることが出来つつある。(66)	体験した人たちの本音の声はあまり聞かない(66)
---	--------------------------

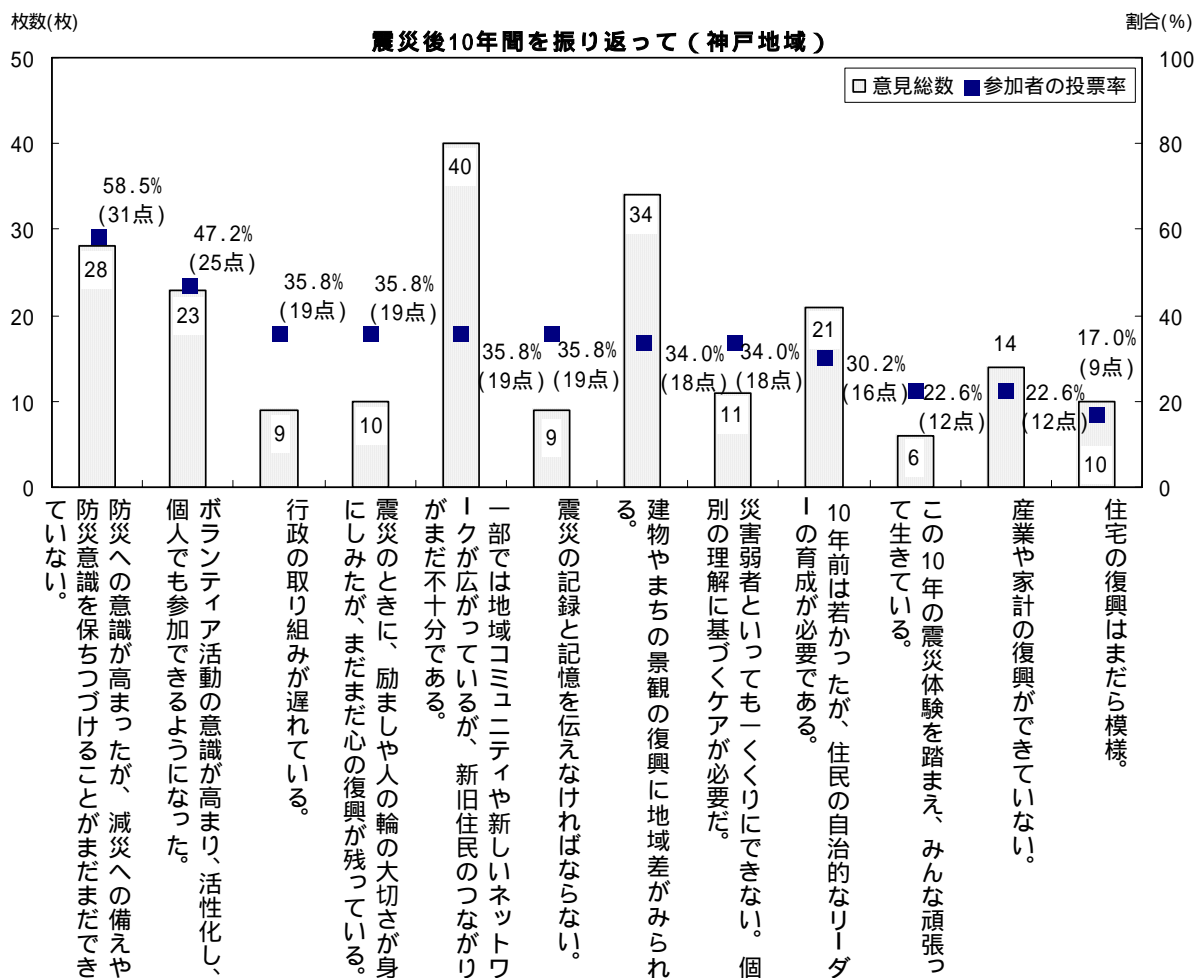
産業や暮らしに対する復興が出来ていない(66)

個人的に経済的な復興ができていない(66)	借家・借地人等の権利被害を救済できなかった(66)
地域内での新しい働き方を生み出すことが出来ていない。(66)	中国と神戸を結びつけるプロジェクトがあまり出来なかった。(66)
被災地で人口回復させる産業の復興があまり出来なかった(66)	

やはり神戸を離れたい人はほとんどいない。神戸の人たちに自主費員として何をしてあげることが出来なかったことに今も心を痛めています。(66)

私は防災センターを思ふすることができた(66)

・「震災後10年を振り返って」について



神戸地域の参加者53名が、会場全体でまとめた「震災後10年を振り返って」は、大きく12項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「一部では地域コミュニティや新しいネットワークが広がっているが、新旧住民のつながりがまだ不十分である。」や「建物やまちの景観の復興に地域差がみられる。」に含まれる意見が多かったが、順位付けの段階で、「防災への意識が高まったが、減災への備えや防災意識を保ち続けることはまだまだできていない。」を重要だと考えた人が多くなっている。

また、「10年前は若かったが、住民の自治的なリーダーの育成が必要である。」という項目の中には、「住民自治組織のレベルアップ」、「住民、自主防災のリーダーが不足している」あるいは「後継者の教養をにらんだ住民自治活動。リーダーの責務。」というようにリーダーの資質や後継者の問題をあげる意見もあった。

・ステップ2：各班のまとめ

将来に向けて(2004年6月12日 神戸1)

高齢者・障害者の見守りの強化(16)

一人住みの人が多いため、見守りをする(16)

高齢者・障害者への見守り体制をつくる(16)

住問題の早期対策をしてほしい(16)

仮設住宅の早期な設置が必要である(16)

住宅復興の公的負担をしてほしい(16)

各種団体により行政の助成が必要(16)

震災後いろいろなボランティア団体ができたので、助けられるような行政のバックアップが必要(16)

補助体制で今の活動がある。助成制度は続けてほしい(16)

コミュニケーションを強めるべき(16)

震災直後地域のコミュニティが日常的に大きな課題と思う(16)

人と人とのつながり・コミュニケーションをよりつなげた(16)

人のつながりの大切さがわかった。人がしたことがみんな嫌にならないようにしてほしい(16)

地域のつながりを探っていく努力をすること(16)

地域の人のコミュニケーション(若い人・年寄りの人とともに)大切にしてほしい(16)

震災・命の大切さを伝えたい(16)

災害の跡を伝えてほしい(16)

命の大切さを意識して生活をしていく、継承して(16)

災害時の防災体制のシステムづくり(16)

一人で作っている中で、災害に対する準備をしていく(ツツス、家族との連絡等)(16)

学校の教育・心のケアが必要(16)

今年度児童手当教師・文部省の予算査定でなくなった(16)

児童・生徒の心のケア・教育の現場の充実をよめてほしい(16)

家庭教育が大切だ(16)

家庭教育・しつけ(16)

子供に対する親の教育をもっと考えるべきだと思う(16)

自分の住んでいる地域に入院できる病院が必要(長期)(16)

若い人のボランティア積極参加ができるような教育を(16)

高齢者のボランティア意識をさらに高める(16)

支援物資の配布の流れの平均的な支援(16)

将来に向けて(2004年6月12日 神戸2)

防災対策を住民に分かりやすく啓発する(26)

ハザードマップを住民に告知させる(マップや情報広報によって)(26)

門高津の防災計画を住民に分かりやすく組みなおす(26)

大規模災害の事例を分析し多くの人に知ってもらおう(26)

防災対策を見直し都市安全科学を推進する(26)

防災の対応策を卒業し都市安全科学を研究しシステム的、ネットの活用を促進してほしい(26)

救済専門ボランティアの活動を充実を図る(26)

災害救済専門ボランティアの増員(登録者)を図ること(26)

震災を機に広がったボランティア人口の縮小を防止し活動を続けるための支援を望む(26)

新住民と旧住民のコミュニケーションを大切にしたい(26)

前同士で声を掛け合う(26)

地域でのコミュニケーションを深める(26)

地域で旧住民と新住民のコミュニケーションに積極的な工夫を加えたい(26)

地域のコミュニティを大切にしたい(26)

カタリベになるなどしてH7年の1月17日を忘れない！(26)

「誓いの名」ではやく忘れるのは人々からいよいよ語り継がれてほしい(26)

1.17で経緯が不十分です。H7年1月17日と明記するべきです。(26)

震災の経緯を話かして今後の災いに備えたい(26)

震災を忘れないでほしい(26)

平素から救急や消火の訓練をする(26)

救急技術を学ぶ(26)

消火訓練などを定期的に実施する(26)

救済10年で一区切りをつけることはよくない。ボランティア活動に対する支援組織を新たに作ってほしい(26)

少子高齢化に対する対策、政策を取り組むべきである(26)

高齢社会で一人で暮らすはしき、言葉が通じなくなる(心の不安を覚える)(26)

一人暮らしの高齢者への対策を考える(26)

少子高齢化社会で人と人が支えあう大切さを意識したい(26)

各家庭における防災に対する準備をする(26)

各家庭で災害に備えるの持出し品を必ず用意する(26)

10年経過後の参加事業の準備の切りかた月とかなっていませんが、もう少し短期はできないでしょうか(26)

青洲町2丁目の住宅を再建したので都市計画高度19.3.31まで延長してほしい(飯後地は14.7.29に変わる。2年では短い)(26)

コミュニティビジネスを通じて地域活性化を促したい(26)

将来に向けて(2004年6月12日 神戸3)

健康な体を持った人が元氣になつてこそ眞の復興といえる。(36)

震災で被害者となつた人の支援は必要だと感じます。(36)

物々とはびく行旅にオンラインでログインするのは駄目、自分の命は自分で守る覚悟が必要(36)

携帯電話とカンパは閉口権を止め、中傷のあるものにしない。(36)

コミュニケーションを深めるためには手話通訳者や有資格者が必要(36)

やはり人とのコミュニケーションを深めて行く(36)
人が集まる場所には手話通訳や筆跡筆記が必要と考えること。(36)
明るい面でも、中・高生の集まる場所には有資格者もいる。(36)

適切な震災情報を発信、伝達する。(36)

次世代へ震災の体験を確実に伝える。(36)
震災の恐ろしさを次世代の人に伝える(36)
大人が子供達に震災の大切さを伝えていく(36)
私達は震災時の恐ろしさを論じていくべきだ(36)
震災情報発信のあり方の検証をする(36)
あくまで市の中心に震災情報の発信基地が必要。(36)
結果より経過をもっと情報発信する。(36)
単年度の震災に抑らざる復興の半さを発信。(36)
防災未来センターをもっと、オープンにすべき。(市庁でさえ知らない人がいる)(36)

避難所のあり方を感覚障害者にも配慮する等もっと具体的に検証する(36)

災害が起きた時聴覚障害者が安心して集まれる所を考える。(36)
避難所を明確に表示する。(36)
集まる場所でのトイレがない、前にあった所にはない。(36)

地域、自然、予算、ソフトが、ミスマッチしない都市計画をしていくべき。(36)

自然をいかに活かす街づくりを推進する(36)
地域特性を生かした街づくり、都市計画(36)
六甲山の自然を壊すまでには都市計画(36)
市民の納得のゆく予算づくりをしてほしい(36)
街づくりの予算だけでなくソフトをもとにした予算組み(36)
直し直え速くに行き詰りがかわり、予算が必要(36)
ソフト、ハードがうまくかみあった住民主体の街づくりをしよう(36)
災害時に、ハード面とソフト面がすぐに機能するように願う。(36)
住民の住居のための住居によるまちづくり都市計画(36)

将来に向けて(2004年6月12日 神戸4)

防災、減災の市民への意識の向上推進(46)

意識付けのための行政が市民に対して主導して推進(46)
災害は遠い未来のことではなく、明日のこととして理解すべき(46)
避難所、防災、減災を伝える事業の実施(46)
防災、減災を市民に伝えるための方法の確立(46)
防災意識を高める工夫(南海地震を考え)(46)

1. 17の伝承活動の推進(46)

1.17伝承行事の継続、県としての行事とする(46)
10年前を想定して身の回りの防災を整備する(46)
海外、世界に伝承キャンペーンを実施する(46)
震災の記録を残していく(震災時一機在の復興まで)(46)
世界に伝承するための目で見えてわかる被災物の保存と公開をする(46)

シェルターの必要、自然災害(地震)、テロ戦争、原子力などの被災に防災より減災が重要(46)

共助のためのコミュニケーション作りと施設づくり(46)

お互いになんでも話し合える仲間を作りたい(46)
誰もが不安なとき、誰かに話したいとき、話がしたいときや集まれる場所がある(46)
地域に新しく住居を移した人々とのコミュニケーション作りを大切に地域学習学ぶ(46)
地域の中で一人でも多くの友人を作る(46)

安心、安全マニュアル作り(46)

各人のハザードマップの作成の推進(46)
県民への意識付けのためのマニュアルと取り方の巻いてわかりやすく推進(46)
非常時のマニュアルを作る(46)
備えに対する具体的マニュアルを完備(46)
倒れない家、倒れない家具のモデル作成(46)
有事に備え、「老なえよ、つねに」(46)
種々ある度に対応する(避難、緊急連絡網)(46)

ボランティア活動への積極的参加とマニュアル作りが大切(46)

ボランティアのあり方のマニュアルづくり(46)
ボランティアを押し知恵社会に積極的に参加する(46)
国ついている老人がまだいます、少しでも相談して力になりたい(46)
将来ボランティア活動を継続したい(46)
防災地域ボランティア組織作り(46)
ボランティア活動の見直し時期(46)
前編的かつ安全・安心は人の知恵で防ぐべきだ(46)
各区人口の増え方がバラバラ、保育所がもっと必要(46)
人と防災未来センターのあり方の検討。備えも表示すべき(46)

防災意識作り(地域での)(46)

障害者に対しての生活保護に頼ることはボランティアではない(手話通訳、ガイドヘルパー、点字地)(46)

将来に向けて(2004年6月12日 神戸5)

行政への提案。復興住宅へ、若い人にも入ってほしい(5G)

復興住宅に50㎡から60㎡の若い住居を増やしていく。(リノベーター) (5G)	復興文化を創出し、発信する(5G)
	福祉センターの活用(5G)

個人の防災対策の向上。行政が定めるこの限界をPRすることが必要(5G)

個人の防災対策として、耐震診断をすること(5G)	市庁の自主防災会議の向上には行政が働きかけること、限界をPRすることが必要(5G)
	地震に対する備えを各自がしておくことが必要(5G)

次の災害が何かを考え、市民も含め行政が防災上取り組むべきである(5G)

行政の中で被災下で本当はどのような状況であったのかを明らかにする必要があり(5G)	次の災害は何か考えよう(同じ災害がまた来るとは限らない)(5G)
地域、行政としての防災対策(防災道路等、耐震建築)の推進(5G)	防災に関し行政は雇用するに足りるか(5G)

情報の共有。地域の密な手や広域の必要(5G)

エコの進出しの行為のセーブされていないこと(5G)

地域住民のつながりとの確立と、コミュニティとしての防災組織の確立(5G)

コミュニティとしての防災組織の確立(5G)	自己責任を承知して、コミュニティに参加を(5G)
自治会やコミュニティは仲良しクラブではなく、異なる意見の折り合いをつける場との認識が必要(5G)	地域の住民の団結(5G)
頼れるのは遠い戦場でなく、近所の心である(5G)	地域組織、ボランティアの人数の増強作り(5G)
	地域の人々のつながりの必要性を伝える(5G)

復興住宅へのサポート体制が必要(5G)

住宅内の助け合いネットワークの育成。異世代コミュニティ(5G)	復興住宅のあり方(5G)
復興住宅への移住の共有。サポートを住民と共に考え、実施していく(5G)	復興住宅間のほしわたしのレポート(5G)

災害時の情報、医療を共有するセンターが必要(5G)

震災直島前に災害時の医療センターがあるとよい(5G)	災害時の情報センターとどこに開けばいいの(5G)
----------------------------	--------------------------

将来に向けて(2004年6月12日 神戸6)

親子の関係 10年がたつが外側は良くなったが内側は広がっている(6G)

教育(感じた事)子供の教育にもう少少親の大人が気をつける(6G)

震災を経験した者でしか分からない気持ちを語り続けることが大切である(6G)

建物、環境が壊れていても心のケアがまた手付かずである。ことを新聞、マスコミを揮って伝えていく(6G)	自分の感じた事を自分の力でも伝えていきたい(6G)
心をつないで行く為にも昔からのことを語りつけて、人の心の支えになってほしい(6G)	震災で失ったものの大切さを思いその体験を通して命の大切さと人との大切さを後世に語りつづける(6G)
	大震災を体験した神戸だからこゝで忘れられる生の声をつぶさないようにしたい。(6G)

大震災に対してよりも自分の周りの事にもっと気をつける(6G)

「人と防災未来センター」を多くの人のに見てもらい防災意識を高めて(6G)

ボランティアが活動しやすい環境を作ることが大切だ(6G)

ボランティアの人たちが円滑に動けるように、システムをつくり責任を育てる(6G)	体どりがなければ助け合いも難しいので、地域活動に皆が参加出来るようにゆとりある時間をつくり、仕事を減らさなく、しかしゆとり(6G)
行政への提案、助成金の申請をもっと簡便にしたい。地域で正高た強い方を育てるために。(6G)	

日頃の地震に対する備えが大切だ(6G)

緊急対応について学んだように思いますが。(6G)	大震災への備えも心のしなやかさが欠けていないという思いの気づき(6G)
日頃から地震に対する備えをする。(6G)	防災を学んだ街づくりをするように、行政と企業と住民が話し合う場をつくらせていく(6G)

課題解決には身近な発想転換が必要だ。(日常が非常を支える)(6G)

安全は目的ではなく共生から生まれる結果です(6G)	災害に備える事と普段の暮らしを豊かにすることは中身は同じ(6G)
---------------------------	----------------------------------

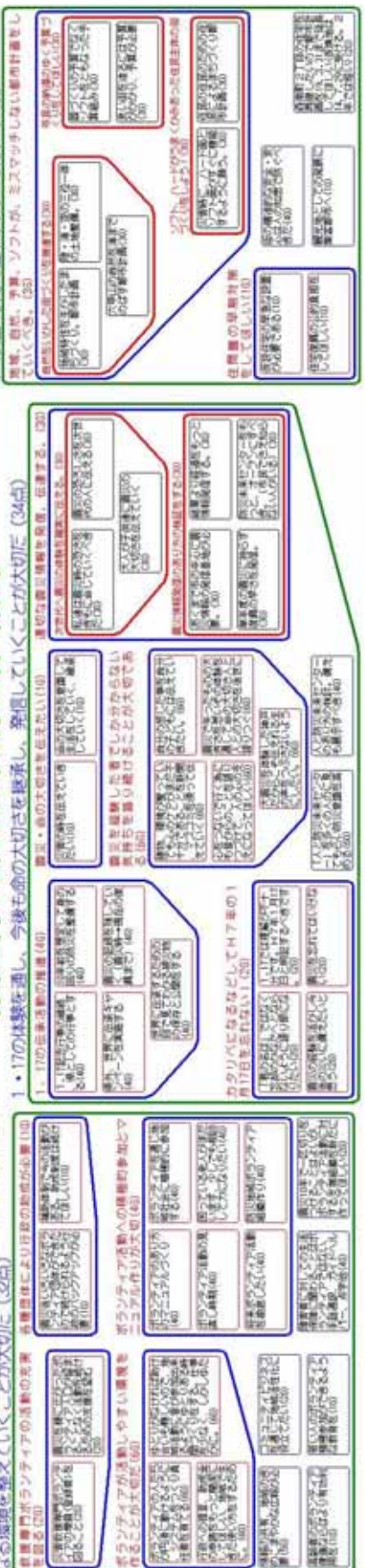
閉じこもりの人達に声をかけるなどして地域の人たちとのふれあいを深め、コミュニケーションをする(6G)

一人くらしの高齢者と楽しい時間を保つために会食、手芸などでふれあいたい(6G)	即住民と被災後その地域に住むようにならねば方との交流、地域活動への参加を呼びかけ(6G)	人とのつながり、近所どのコミュニケーションのあり方を見直そう(6G)
地域高齢者とのふれあいの場を作る。(機材をわけて楽しむ歌を歌うようなこと。)(6G)	目に見えない声を把握するためにコミュニケーションの場をつくる(6G)	災害時におけるコミュニティの重要性を知ってもらう。(6G)

・ステップ2：神戸地域のまとめ

将来に向けて(2024年6月12日 神戸)

様々な地域活動(ボランティア・NPO・自治会・OB)がしやすくなる環境を整えていくことが大切だ(29点)



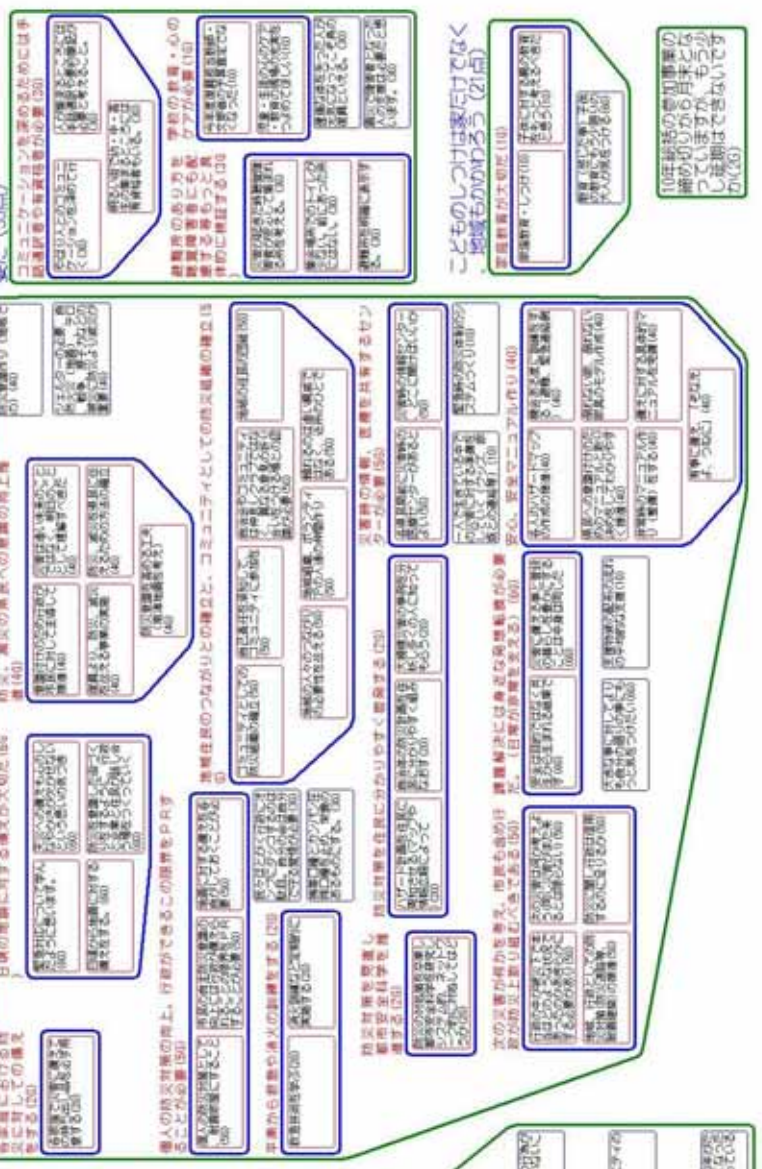
高齢者や障害者の多い住宅への様々な支援の取り組みが必要だ(22点)



地域の中の新旧・世代を超えたつながりやすさを作っていく(27点)



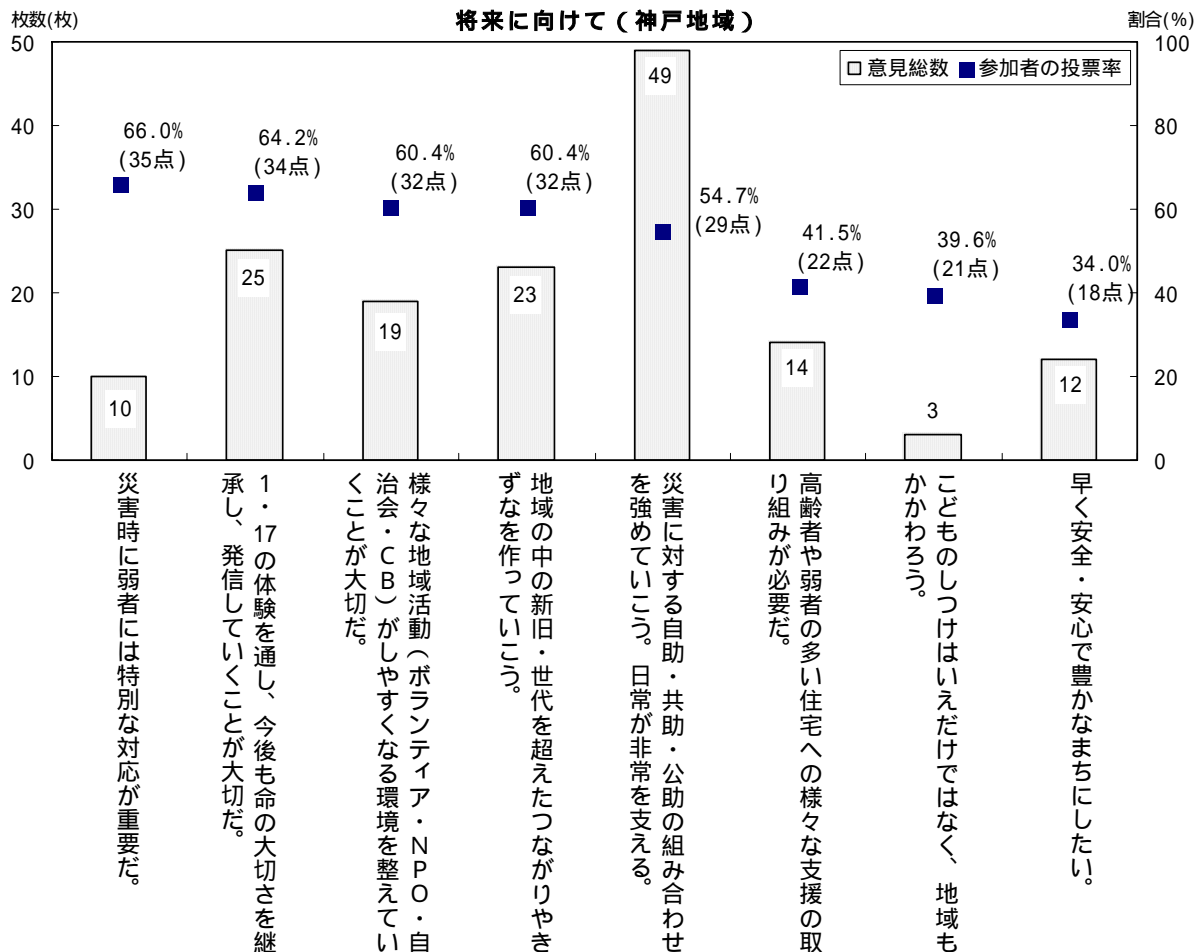
災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていく。日常が非常を支える。(29点)



こどものしつけは家だけでなく、地域もやわらう(21点)



・「将来に向けて」について



会場全体でまとめた「将来に向けて」については、大きく8項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「災害時に弱者には特別な対応が重要だ。」「1・17の体験を通し、今後も命の大切さを継承し、発信していくことが大切だ。」「様々な地域活動（ボランティア・NPO・自治会・CB）がしやすくなる環境を整えていくことが大切だ。」などを重要と考えた人の方が多くなっている。

また、「こどものしつけは家だけでなく、地域もかかわろう。」という項目の中には、「家庭教育・しつけ」「子供に対する親の教育をもっと考えるべきだと思う」「子供の教育にもう少し廻りの大人が気をつける」といった教育問題を通して地域のまちづくりを考えていこうという意見もあった。

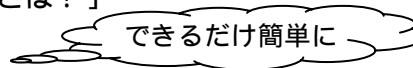
5) 明石・三木地域

日 時：平成16年6月20日(日) 14:00~17:00

会 場：明石市立産業交流センター/研修室2

テ ー マ：「復興10年で、被災地ができたこと、できなかったこと、
将来に生かしていくべきことは？」

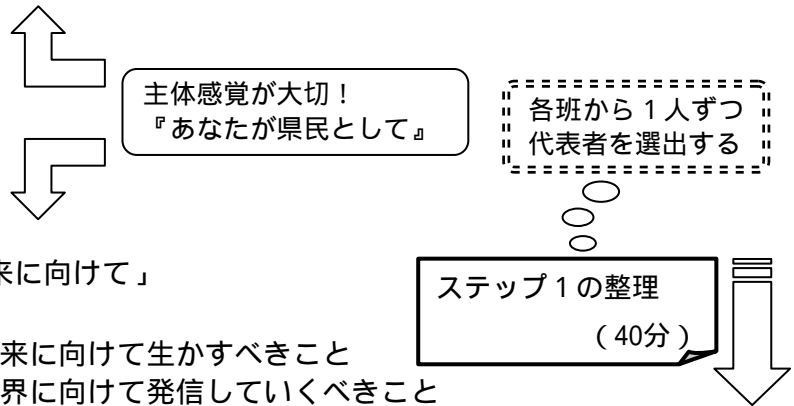
14:00 はじめに
(5分) ・あいさつ、趣旨説明

14:05 ステップ0：「ワークショップとは？」
(20分) ・ワークショップの進め方  できるだけ簡単に
・アイスブレイク(自己紹介)

14:25 ステップ1：「10年間を振り返って」
(40分) 被災地が ・震災後10年間でできたこと、できなかったこと

15:05 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ

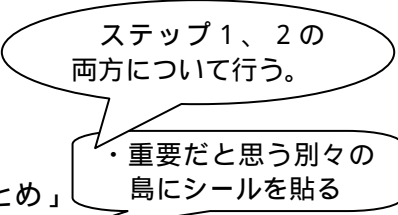
15:15 ~休憩~
(10分)



15:25 ステップ2：「将来に向けて」
(40分) 被災地が { ・将来に向けて生かすべきこと
・世界に向けて発信していくべきこと

16:05 班別発表
(10分) ・各班2分ずつ

16:15 ~休憩~
(5分)



16:20 ステップ3：「まとめ」
(35分) ・各班の成果を整理

16:55 最後に
(5分) ・総括ワークショップの案内と代表者の決定

17:00 終了  ・各班2人ずつ

・明石・三木地域ワークショップの様子



雰囲気を和らげるアイスブレイクから開始



各班で熱心な話し合いが繰り広げられた



積極的に自分たちの話し合いの内容をアピール



ステップ2と同時進行のまとめ



ステップ2でも熱のこもった話し合い



ステップ2についても各班から発表



参加者全員でのステップ2のまとめ



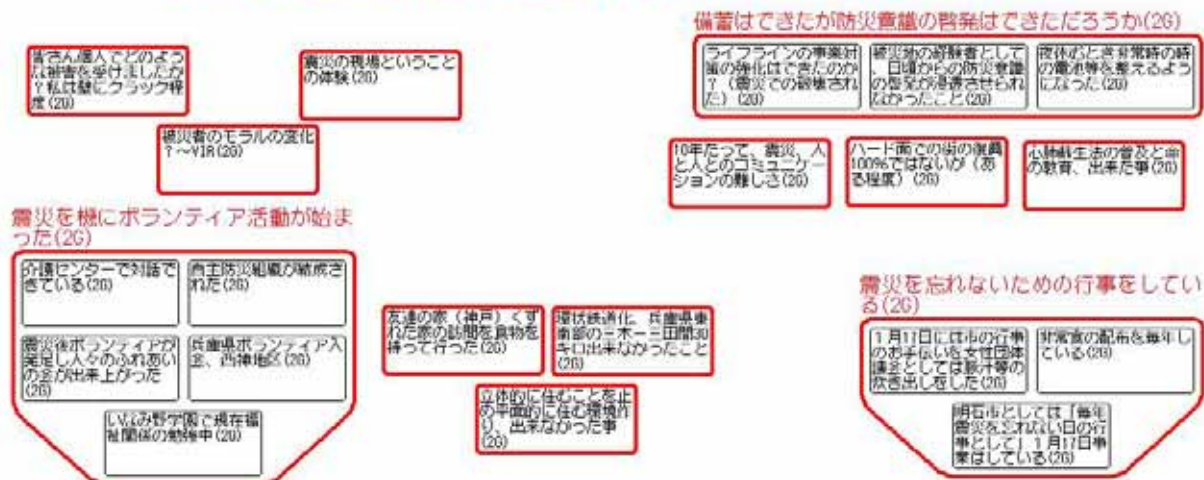
最後は丸シールで投票

・ステップ1：各班のまとめ

10年間を振り返って(2004年6月20日 明石・三木1)



10年間を振り返って(2004年6月20日 明石・三木2)



10年間を振り返って(2004年6月20日 明石・三木3)

CO2を少なくするために太陽光発電を始めた(30)

たの池の改修が出来た(30)

ボランティア組織がスタートした(30)

ボランティアグループ・市民グループが増えた(30)

ボランティア活動が増えた(30)

ボランティア元年ができた(30)

再建や、ゴミの減量により、美しいまちづくりができた(30)

ゴミの減量(地区のゴミ拾い)ボランティアが非常に多くて困ったが、随人会組で美しいまちづくりができた(30)

跡々の建物美しく再建できました(見栄え)(30)

コミュニティの共助精神ができた(30)

助け合いの重要性が理解された(30)

助け合うことの大切さができた(30)

地域支那の確立・拡充ができた(30)

高齢者の訪問活動が平成元年より続けています。高齢化対策を思うと、ききあひ運動が大切だと思いました(30)

地域整備が進んだ(30)

三木市に防災記念公園ができた(30)

新しい道ができた(30)

地域整備と防災面の施設整備ができた(30)

メモリーマップの作成ができた(30)

人の流れが変わった道路との関係から(30)

身近な人(友人)との情報交換が出来るようになった(30)

高齢化の中で以前の町内活動に使っている(30)

近隣の人の(確保)のまとまりが出来ない(人の移動)(30)

川の改修が残っている(30)

自主防災意識が高くなった(30)

自主防災組織ができた(30)

地域に対する認識が高くなった(30)

防災意識が高くなった(30)

10年間を振り返って(2004年6月20日 明石・三木4)

隣近所のコミュニケーションが今まで以上にうまくできるようになった(40)

近所の方との付き合い方が変わった(40)

信頼性をしていくようになった(40)

人間は動物。震災に水が大変、水の確保に努力したい(40)

歌でもまだタイルにひびが入りそのままになっています。地震があったのだなあと思います。(40)

コミュニティの再生、活性ができて、CBにも参加しました(40)

自主防災の確保ができた(40)

自主防災組織が育成された(40)

地域や地区の中で防災意識について話し合うことが多くなった。「地区自主防災」(40)

防災計画ができた(訓練種別が思うように進まない)(40)

防災訓練(40)

ボランティア意識が高まった(40)

ボランティアを通じて自分なりのネットワークが出来たこと(40)

一人暮らしの方へ気配り日記りができた(40)

私は3年間高齢者、障害者の移送ボランティアをしてきました(40)

民生、老人と話す(40)

少しずつ建物、風景が復興してきた(40)

三木市にも震災の被害がありました(もう今は新しく建築ははじまり、自分たちがたのしみだと思えました)(40)

復興はある程度できています(40)

随入金の受取金の補助金をいただいたとき震災の実感がありません(40)

人の心がまた出ていない(40)

今後10年間の間に似た様な震災がなるとしてもあらずの思いはある(40)

10年間を振り返って(2004年6月20日 明石・三木5)

防災意識がのびえた(5G)

自分の身は自分で守る様になった(5G)	常に震災に備えて準備が出来てきたと思う(5G)
---------------------	-------------------------

防災意識はあるが実施できていない(5G)

耐震診断を受けていない(5G)	防災用品表を用意しようと思いつつ出来なかった(5G)
-----------------	----------------------------

消防団活動をしてきた事。これからは災害には消防団は必要(5G)

火事だ！隣宅の水で放水しました(5G)	消防団活動 7.1 [1.5.46救護物資活動]をしました(5G)
震災地で救助できなかった事が一番残念であった(5G)	団員をグループごとに集めて震災地に赴き活動ができた事(5G)

個人的にボランティアをする人が増えた(5G)

自分自身を言の多くの人がボランティア活動に関わる様になった(5G)	当時は色々なことに参加し、頑張ったが今はなにもしてない(5G)
復興が出来たかどうが見直した(5G)	

震災によって近所に新たな交流がはじまった(5G)

震災以降、近所の人たちと交流が増えた(5G)	人と人とのコミュニケーションが取れる様になった(5G)
------------------------	-----------------------------

個人的建物が整備された(5G)

建物に対して見直し、完全住宅を求めることが出来た(5G)	自宅の管理が応急のみ(5G)
自分の家が被害がなかった事で幸中の幸でなかったかと思う(5G)	それぞれの住居ができた(個人的に)(5G)

仕事がなくなった事や独身になるなど生活環境が変わった(5G)

仕事もなくなった(5G)	独身になった(生活環境が変わった)(5G)
多くのボランティア団体でできた(5G)	復興後の復旧に被災者出たらの受け入れに時間を費やした(5G)

震災後、住民間の交流はあったが最近はなくなりつつある(5G)

地域のコミュニティ(町所付き合い)が少なくなった(5G)	復興住宅でのふれあいや交流はまだ必要(5G)
精神的なものはまだまだたいやがれていない(5G)	

ビルなどの建物が多く建つようになった(5G)

建物は元通りになかったが耐震性がなくなった(ビルが多くなった)(5G)	都市の外見は大体元の姿になった(5G)
復興住宅等多くの住宅が出来た(5G)	

10年間を振り返って(2004年6月20日 明石・三木6)

復興支援を継続している(6G)

ボランティアセンターの設立ができた(6G)	花と緑の植え付けにいった(6G)
-----------------------	------------------

当時は自分たちのことだけで、精一杯でボランティアができなかった(6G)	ふれあいの復興会場へ行ってボランティア活動ができた。(仕事の都合で)(6G)
-------------------------------------	--

復興支援ができた(震災直後)(6G)

ボランティア・毛布・衣類をたした(6G)	炊き出しが出来た(6G)
震災地へ行って耐震診断に従事した(6G)	

家族の防災意識が高まった(6G)

家族の避難場所を決めた(6G)	家族への連絡ができた(6G)	家内での非常持ち出し袋を作った(6G)
-----------------	----------------	---------------------

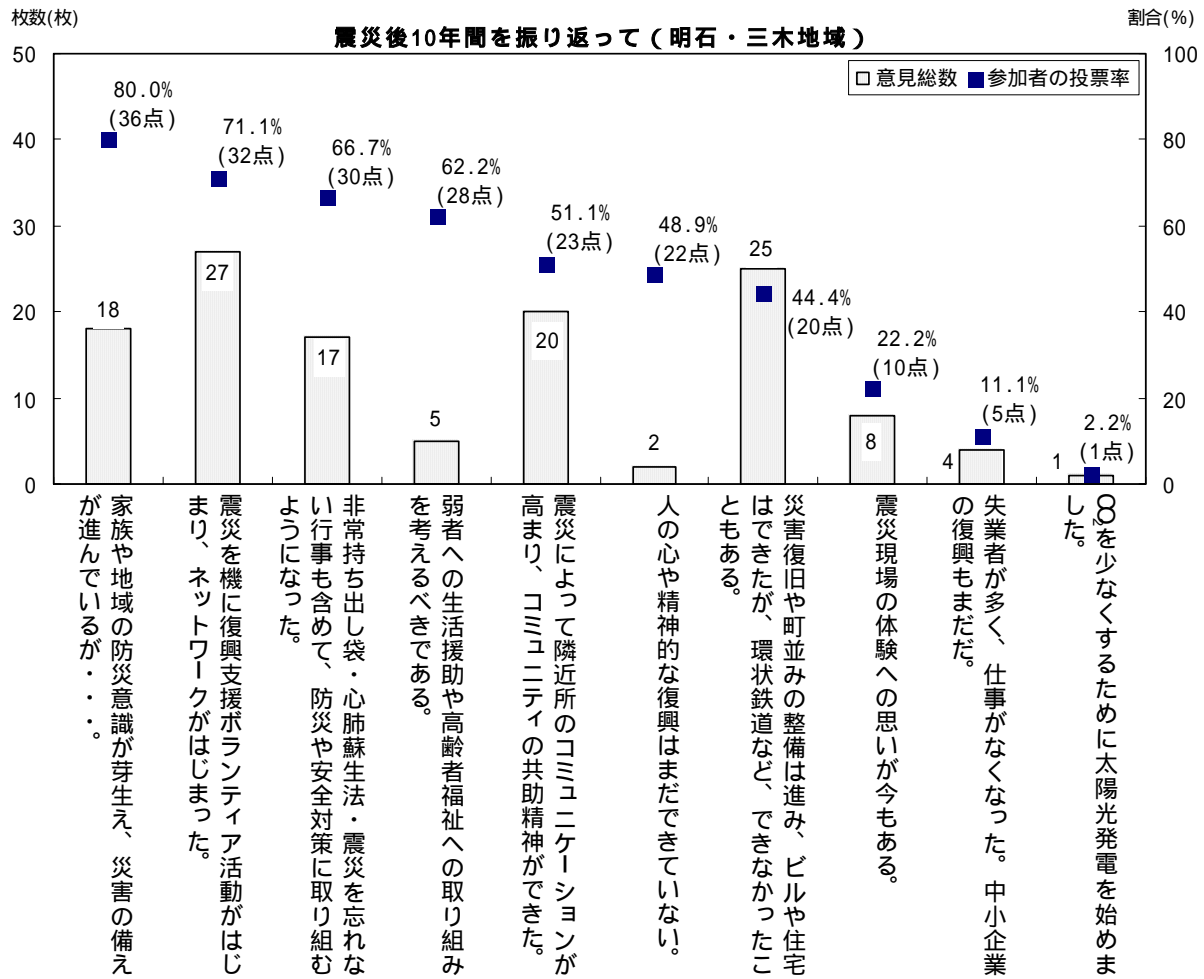
地域における安全対策が充実された(6G)

大規模対応の計画ができた(6G)	地域の防災組織ができた(6G)	地蔵対応による防火水栓ができた(6G)
------------------	-----------------	---------------------

にぎわいの町づくりができていない(6G)

家屋の復旧ができなかった(6G)	復興はすすんでいない(6G)
震災時の住民告知がまだできていない(6G)	

・「震災後10年を振り返って」について



明石・三木地域の参加者45名が、会場全体でまとめた「震災後10年を振り返って」は、大きく10項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「震災を機に復興支援ボランティア活動が始まり、ネットワークがはじまった。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「家族や地域の防災意識が芽生え、災害の備えが進んでいるが...。」が重要であると考えた人が多くなっている。

また、「災害復旧や町並みの整備は進み、ビルや住宅ができたが、環状鉄道など、できなかったこともある。」という項目の中には、「ポイ捨てが非常に多くて困ったが、婦人会組織で美しいまちづくりができた」など、地道な活動によりゴミの減量という成果が上がっているという意見もあった。

・ステップ2：各班のまとめ

将来に向けて(2004年6月20日 明石・三木1)

防災に対する学習を繰り返すことにより防災意識を高め、地域で、また市・町で防災訓練を実施する(16)

訓練・学習を繰り返す(16)	地域で、また市・町で防災訓練の実施を毎年すること(16)
防災意識を高めていく(16)	

この震災で世界からたくさんのお金を頂戴しました。今後とも地球規模で外国の災害にも資金しよう(16)

体験を集約しマニュアルを作って皆で話しあう(16)

体験集約を進める(16)	救い組み方についてわかりやすく問題をつくり皆で話しあう(16)	体験を元にいざという時のマニュアルを作っておく(16)
--------------	---------------------------------	-----------------------------

地域でコミュニケーションを深め、かつ全体に耳を藉けて暮らしやすくする(16)

まず自分が住んでいる地域に目を向け、個別・全体、見極める(16)	何かあると、地域全体で取り組む体制作り(16)
地域で仲良く生活し暮らしやすくしていく(16)	地域の人々のつながりを高める(16)
この震災で人は人により助けられました。やはり地域と近所のコミュニケーション作りをより深めていくこと(16)	

防災マニュアルを再確認する。資料の準備。防災グッズの確保(個人として)(16)	1、17の日は越やすことなくして欲しい(16)	たえず行政と地域の連携を図る(16)
---	-------------------------	--------------------

ボランティア体験を多くの人に伝えさらに進めていく(16)

ボランティアをさらに進めていく(16)	ボランティア体験を多くの人に伝える(16)
---------------------	-----------------------

将来に向けて(2004年6月20日 明石・三木2)

ボランティア活動の継続と積極的参加をしたい(26)

ボランティア活動に積極的に参加したい(26)	継続されたボランティア活動を今後も続ける(26)
------------------------	--------------------------

震災を体験していない子供たちや世界に震災の教訓を伝え、命の大切さを伝えたい(26)

子どもたちにも伝承していくこと大切。命の大切さを教える。(26)	震災の後で生まれた子供たちにも命の大切さを知らせることも大切だ(26)
中学生を対象に心構えを普及し命の教育を継続していく(26)	命のフェアはなく災害に国境はないことを世界に伝えたい(26)

人の意見を聞き、身近な人との交流や助け合いを深めさらにその交流を広めていく(26)

身近な人との交流を深めたい(26)	震災で生まれたボランティア活動の大切さをまわして近所の人々に目を向けてほしい(26)
震災で生まれた助け合いの精神を忘れず継続してほしいものだ。(26)	人との交流から何でも始まる(26)
震災で気持ちを癒して、人の意見を聞き深める。(交流を深めるため)(26)	

災害に強い県づくりを進める(26)

防災意識を高め、継続し、防災教育を行う(26)

個人としての防災意識を高める資料、水、防災訓練グッズの準備をしていきたい(26)	忘れぬ習慣を忘れなくし、体質に切りかえるために防災教育と助け合い教育の普及(26)
防災意識の継続・・・(26)	

震災時の交通対策の必要性を地域住民の間に浸透させるためにも、被災地を支援し、被災地の防災意識を高めること(26)

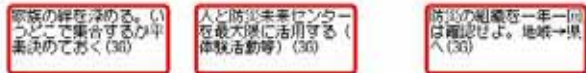
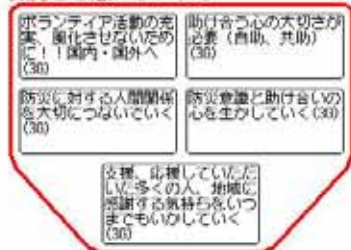
災害を未然に防ぎ、万一の場合も最小限に食い止めるための平面的配置の促進(26)

将来に向けて(2004年6月20日 明石・三木3)

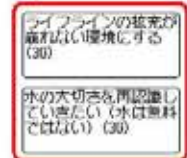
若者を含めた地域が積極的に自主防災を推進していく(39)



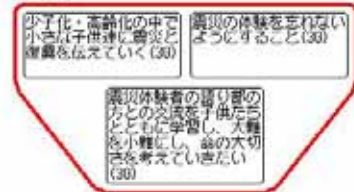
ボランティア精神を風化させずに、人間関係を大切にしていこう。感謝の気持ちを忘れない(39)



ライフラインの大切さを再認識する(39)



震災体験復興体験を将来に伝えていこう(39)



将来に向けて(2004年6月20日 明石・三木4)

外出困難な人達が自由にまちに出て行ける環境を整備しよう



地域、自治会を機能的にしていこう(40)



人と人とのつながりを大事にしていこう(40)



将来に向けて(2004年6月20日 明石・三木5)

日々の地域のコミュニケーションを強にし、困った時に助け合いを！(56)

近所住居と仲良くするコミュニケーションが大事(56)	高齢者が増えてきているので、自治会の中でこの機会に力になりの人がいるのなど、近所のつながりを大事にする(56)
困った時おたがい助け合う精神をまずより強く持つことが必要(56)	人と人、地域に於いてのつながりをより深めていこう(ボランティアが活動の基盤に)(56)

震災を忘れないようにしましょう(56)

震災の体験を顕化させたいので、学校・自治会などで震災当時の生活を再現・体験する(56)	大きな災害が発生したときには世界に誇った経験を誇る。多くの国の災害を前にし、日本としてなにができるかをよく考えよう(56)
---	---

ボランティアの人材育成とネットワーク化をすすめる(56)

みんながボランティアはいいが、何でもかんでもボランティアはダメ(56)	高齢化社会に対応するためのボランティアを養成する必要あり(56)
震災時のボランティアネットワークが必要(56)	

大規模な災害に備えて、ボランティアやコンビニと自治会と協力関係を築く(56)

消防団をより強力にしていく(56)

消防団として何ができるかを審判してほしい(56)	消防団訓練していき早く現場に到着できるように(56)
--------------------------	----------------------------

行政が主導で、住宅・交通・都市再開発などの問題を解決していく必要がある(56)

交通手段と安全性(ヘリポートの様なもの)確保(56)	都市の再開発を進めて密集住宅の解消をはかる(56)
都市公園をもっと多く作る必要あり(56)	密集住宅への入居について、対策を見て入居構成を変えていくべき(対策優先はダメ)(56)

全国的な行政問題(56)

密集住宅はこうあるべき、という事を提議して行くべきだ(56)

将来に向けて(2004年6月20日 明石・三木6)

ボランティア教育の育成と啓発活動(66)

学校教育でボランティア活動の必要性を世界に向けて発信していく(66)	高齢化社会に対する対策として中学・高校生の活用をする(66)
------------------------------------	--------------------------------

大きな災害を繰り返さないためにも被災体験を伝える(66)

地震発生時の火の始末の大切さを知らせる(66)
隣居老人への支援の大切さ(66)
被災体験を引き継いでいく(66)

情報・連絡体制の整備しておく(個人)(66)

安否確認が確実につなげるようにしてほしい(66)
安否確認が確実に出るようになるようにしてほしい(66)
情報・連絡体制の整備・家族との安否確認方法を充実させてほしい(66)

ライフラインの充実させる(66)

ライフラインを充実させてほしい(66)
ライフラインを充実してほしい(66)
物資運搬の経路の確立(66)

地域のふれあい・相互扶助を大切にする(66)

地域間・隣近所の間は助け合いが必要である。(66)

地域防災体制の確立する(自治会)(66)

地震に強い新しい町づくり(66)

地震に強い家を作る(66)	震災に強い町づくり(66)
---------------	---------------

地域の特長を生かした町並み景観づくりに取り組む(66)

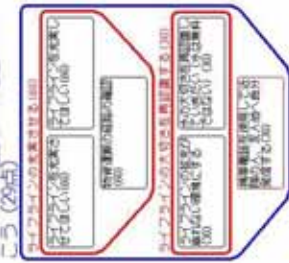
・ステップ2：明石・三木地域のまとめ

将来に向けて(2004年6月20日 明石・三木)

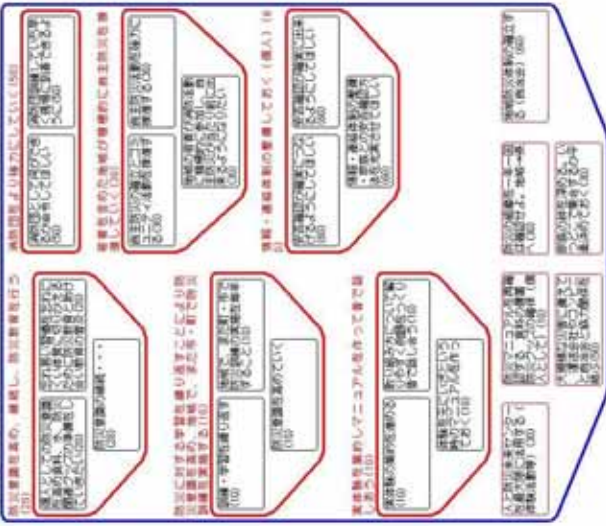
ボランティア精神を風化させずに、人間関係を大切にしていける
姿の気持ちを忘れないうよう(28点)



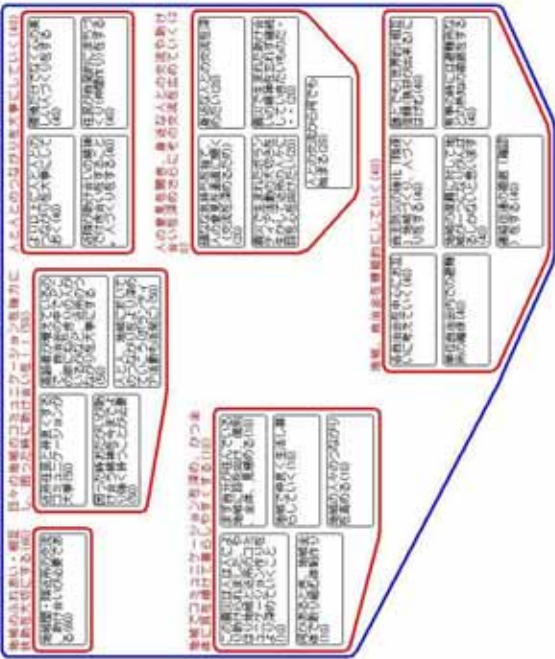
災害に強いライフラインを維持
することの重要性を発信してい
こう(28点)



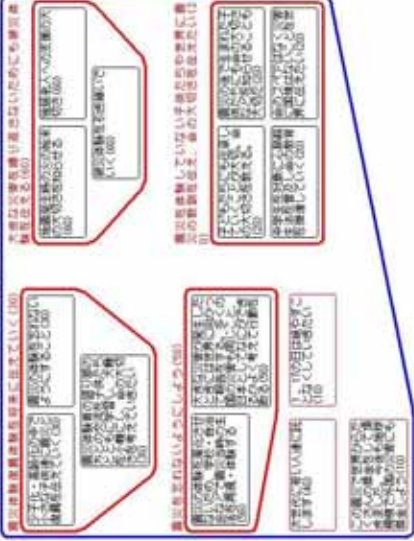
防災が効果的であるためには、自助・共助・公助の組み合わせ
が大切だ(28点)



地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう(34点)



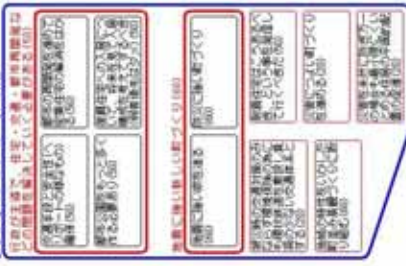
豊かさや教訓を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう(32点)



外出困難な人達が自由にまち
に出て行ける環境を整備しよ
う(8点)



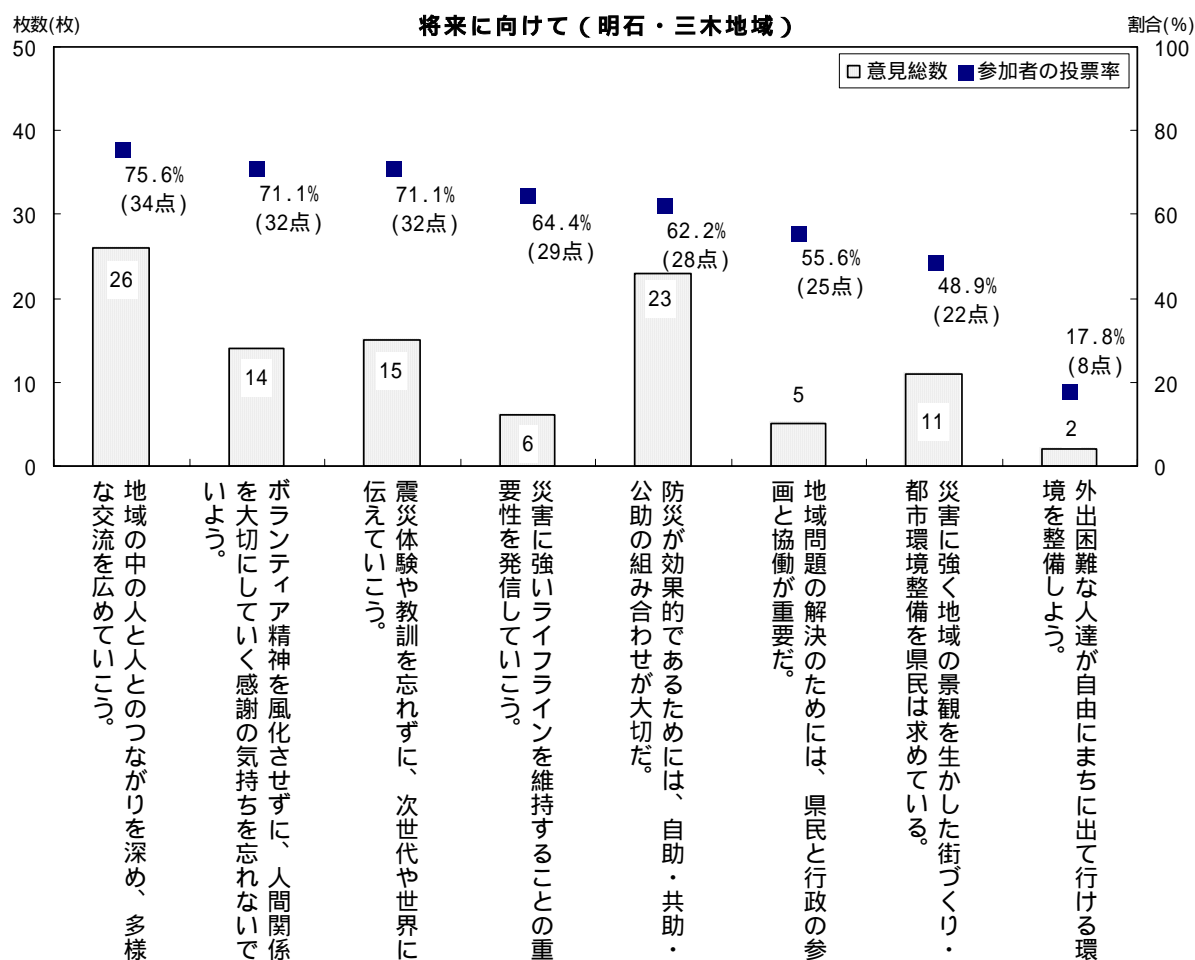
災害に強く地域の豊かさを生か
した街づくり・都市環境整備を策
定は求めている。(22点)



地域課題の解決のためには、
住民と行政の参画と協働が重
要だ。(25点)



・「将来に向けて」について



会場全体でまとめた「将来に向けて」については、大きく8項目に分類された。その中からそれぞれが重要だと思うものを5つ選び、丸シールを用いて順位付けを行った。

上図をみると、順位付けのない段階では、「防災が効果的であるためには、自助・共助・公助の組み合わせが大切だ。」に含まれる意見が最も多かったが、順位付けの段階で、「ボランティア精神を風化させずに、人間関係を大切にしていって感謝の気持ちを忘れないでいよう。」「震災体験や教訓を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう。」などの方が重要だと考えた人が多かった。

また、「外出困難な人達が自由にまちに出て行ける環境を整備しよう。」という項目の中には、「外出困難な人達にとっての交通手段の確保などをしていく」「外出困難の人達にとってのバリアフリーの強化をする」といった社会的弱者に対する配慮をしていくべきだという意見もあった。

4. 総括ワークショップのまとめ

日時：平成16年7月4日（日） 14：00～17：00

会場：人と防災未来センター 5階

14：00 はじめに

- (5分)
- ・主旨説明
 - ・進め方の説明

14：05 ステップ0

- (10分)
- ・アイスブレイク

14：15 ステップ1

- (25分)
- ・各地域の成果の確認（『10年間を振り返って』）
～各地域のまとめを見ながら、ふさわしくない分類、誤字等を修正する～

各部会長も一緒に作業をする

14：40 ステップ1.5

- (50分)
- ・全地域でのまとめ
～全地域の意見として会場全体で議論しながらまとめ、
重要と思われる項目5つを選び投票する～

15：30 ～休憩～

(10分)

15：40 ステップ2

- (25分)
- ・各地域の成果の確認（『将来に向けて』）
～各地域のまとめを見ながら、ふさわしくない分類、誤字等を修正する～

各部会長も一緒に作業をする

16：05 ステップ2.5

- (50分)
- ・全地域でのまとめ
～全地域の意見として会場全体で議論しながらまとめ、
重要と思われる項目5つを選び投票する～

16：55 最後に

- (5分)
- ・部会長の代表によるコメント

17：00 終了

・ステップ1：各地域のまとめ

震災後10年間を振り返って(2004年6月5日：淡路)

復興整備事業は進んだが、昔の思い半の面並みが消えた。(30点)

復興整備事業ができた(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)
 中心部の商業がなくなった(30)

ボランティア活動が活発になった(26点)

ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)
 ボランティア活動の活発化(26)

まだ道路・住宅・区画整備が進んでいない(10点)

道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)
 道路・住宅・区画整備が進んでいない(10)

住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19点)

住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)
 住宅の復旧は早い早く進んだが、その一方で元の場所に戻れないなど問題も残した。(19)

防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34点)

防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)
 防犯意識はめばえだが、次の災害への備えはまだ十分ではない(34)

観光客の減少が顕著になった(26点)

観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)
 観光客の減少が顕著になった(26)

震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26点)

震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)
 震災によって自然環境が破壊されつつあり、生態系が回復するまでに影響を与えている(26)

地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10点)

地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)
 地域の被害を受けなかったところもある。(46)(10)

震災後10年を振り返って(2004年6月6日:阪神北)

ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった (30点)

市民ボランティアの活動が盛んになった。NPOの活動が盛んになった。市民ボランティアの活動が盛んになった。NPOの活動が盛んになった。

防災意識が高まった (22点)

防災意識が高まった。防災意識が高まった。防災意識が高まった。防災意識が高まった。

震災の記憶の風化し、危機意識がうすれている (28点)

震災の記憶の風化し、危機意識がうすれている。震災の記憶の風化し、危機意識がうすれている。震災の記憶の風化し、危機意識がうすれている。

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた (27点)

コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた。コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた。コミュニティ活動や市民同士のつながりが生まれた。

心のケアが不十分である (16点)

心のケアが不十分である。心のケアが不十分である。心のケアが不十分である。

経済の再建は難しい (5点)

経済の再建は難しい。経済の再建は難しい。経済の再建は難しい。

ハリアフリー住宅やインフラ整備がまだ (9点)

ハリアフリー住宅やインフラ整備がまだ。ハリアフリー住宅やインフラ整備がまだ。ハリアフリー住宅やインフラ整備がまだ。

自動は達成されたが、自助は進みつつある (9点)

自動は達成されたが、自助は進みつつある。自動は達成されたが、自助は進みつつある。自動は達成されたが、自助は進みつつある。

行状のことであったこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活動してほしい (29点)

行状のことであったこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活動してほしい。行状のことであったこと、できなかったことの評価は様々であるが、市民活動支援を活動してほしい。

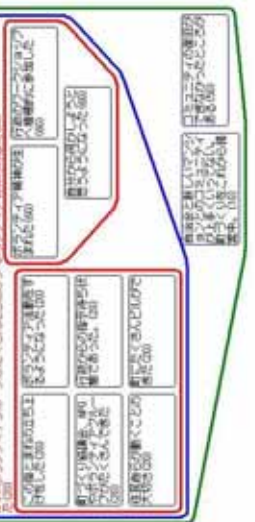
10年検証をきっかけに、災害対策を考えよう (23点)

10年検証をきっかけに、災害対策を考えよう。10年検証をきっかけに、災害対策を考えよう。10年検証をきっかけに、災害対策を考えよう。

地域ネットワーク、グループ活動やコミュニティのつながりは向上したが新しいままでは不足している (30点)



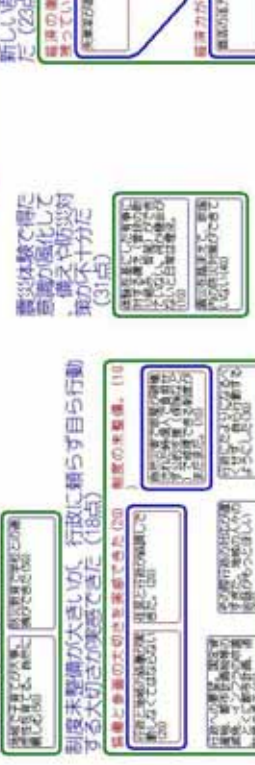
若年ボランティア活動の向上 (22点)



震災後10年を振り返って (2004年6月6日：阪神南) 防災意識は向上したが、今後の災害に対する備えはまだまだ (27点)



子育てや学校との連携を大事にしよう (5点)



健康第一・いのちが大切だとわかって (5点)



異業種や芸術文化、まちの顔が変えている (6点)



新しい雇用の仕組みなどは生まれましたが、経済の復興はこれから (29点)



若年ボランティア活動の向上 (22点)



主に高齢者や遺族へのケアができていない (4点)



震災後10年を振り返って(2004年6月12日:神戸)

ボランティア活動の原動力が高まり、活性化し、個人でも参加が出来るようになった。(17点)



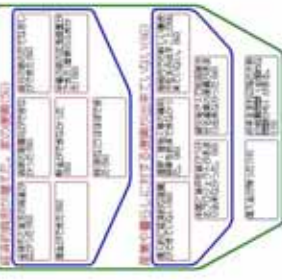
震災のとき、助まじや人の縁の大切さが身にしみ人が、またまじの復興が成っている。(19点)



10年前はなかったが、住民の自治的なリーダーの育成が必要である(15点)



産業や家計の復興ができていない(12点)



防災への意識が高まったが、被災者の偏差や外出機会を失ったことがまだ残っている(31点)



建物やまちの景観の復興に地域がめられる。(18点)



行政の取り組みが遅れている(19点)



市民が復興を担っている(18点)



一帯では地域コミュニティや新しいネットワークが広がっているが、新住民のつながりがまだ十分である(19点)



住宅の復興はまだら模様(9点)



この10年の震災体験を踏まえ、みんなが復興を担っている。(17点)



震災の記録と記憶を伝えたい(18点)



震災後10年を振り返って(2004年6月20日:明石・三木)
震災によって被災所のコミュニケーションが高まり、コミュニティの共助精神ができた。(20点)

家族や地域の防災意識が芽生え、災害の備えが進んでいるが、



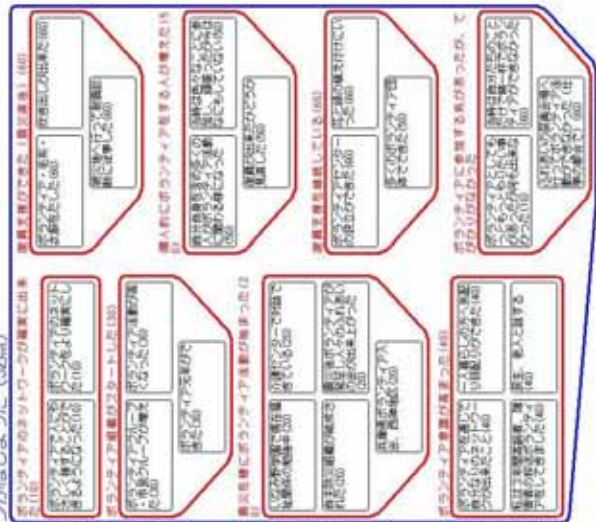
災害復旧や町並みの整備が進み、ビルや住宅ができたが、現状課題など、できなかつたこともある。(20点)



心身生活・震災を忘れない行事も含めて、防災や安全対策に取り組みようになった。(30点)



震災を機に復興支援ボランティア活動がはじまり、ネットワークがはじまった。(32点)



震災現場の体験への思いが今もある。(10点)



失業者が多く、仕事がなくなつた。中小企業の復興もまだ。(5点)



人の心や精神的な復興はまだできていない。(22点)



・ステップ1：総括でのまとめ

復興10年総括検証ワークショップ(総括) 10年を振り返って (2004年7月4日)

防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)

防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)	防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)	防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)	防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)
防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)	防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)	防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)	防災意識は高まったが、次の災害への備えはまだ十分ではなく、防災教育も大切だ (44点)

震災の被害を受けなかったところもあり、特にピンとこない (0点)

震災のときに、助まじや人の輪の大切さが身にしみだが、今でも心のケアを必要とする人がいる (10点)

震災のときに、助まじや人の輪の大切さが身にしみだが、今でも心のケアを必要とする人がいる (10点)	震災のときに、助まじや人の輪の大切さが身にしみだが、今でも心のケアを必要とする人がいる (10点)
震災のときに、助まじや人の輪の大切さが身にしみだが、今でも心のケアを必要とする人がいる (10点)	震災のときに、助まじや人の輪の大切さが身にしみだが、今でも心のケアを必要とする人がいる (10点)

地域のつながりが広がったが、新旧住民のつながりや子育て支援などでも、これからのリーダーの育成が課題だ (44点)

地域のつながりが広がったが、新旧住民のつながりや子育て支援などでも、これからのリーダーの育成が課題だ (44点)	地域のつながりが広がったが、新旧住民のつながりや子育て支援などでも、これからのリーダーの育成が課題だ (44点)
地域のつながりが広がったが、新旧住民のつながりや子育て支援などでも、これからのリーダーの育成が課題だ (44点)	地域のつながりが広がったが、新旧住民のつながりや子育て支援などでも、これからのリーダーの育成が課題だ (44点)

道路などの復興整備事業は進んだが、まちの景観の復興に地域差がみられる (30点)

道路などの復興整備事業は進んだが、まちの景観の復興に地域差がみられる (30点)	道路などの復興整備事業は進んだが、まちの景観の復興に地域差がみられる (30点)
道路などの復興整備事業は進んだが、まちの景観の復興に地域差がみられる (30点)	道路などの復興整備事業は進んだが、まちの景観の復興に地域差がみられる (30点)

災害弱者といっても一くくりできない。個別の理解に基づく対応が必要だ (12点)

災害弱者といっても一くくりできない。個別の理解に基づく対応が必要だ (12点)	災害弱者といっても一くくりできない。個別の理解に基づく対応が必要だ (12点)
災害弱者といっても一くくりできない。個別の理解に基づく対応が必要だ (12点)	災害弱者といっても一くくりできない。個別の理解に基づく対応が必要だ (12点)

住宅の復旧はかなり早く進んだが、元の場所に戻れなかったり、空地が残るなど課題を残している (3点)

住宅の復旧はかなり早く進んだが、元の場所に戻れなかったり、空地が残るなど課題を残している (3点)	住宅の復旧はかなり早く進んだが、元の場所に戻れなかったり、空地が残るなど課題を残している (3点)
住宅の復旧はかなり早く進んだが、元の場所に戻れなかったり、空地が残るなど課題を残している (3点)	住宅の復旧はかなり早く進んだが、元の場所に戻れなかったり、空地が残るなど課題を残している (3点)

新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ (21点)

新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ (21点)	新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ (21点)
新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ (21点)	新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ (21点)

震災の体験への思いを生かしながら、記録と記憶を伝えなければならない (44点)

震災の体験への思いを生かしながら、記録と記憶を伝えなければならない (44点)	震災の体験への思いを生かしながら、記録と記憶を伝えなければならない (44点)
震災の体験への思いを生かしながら、記録と記憶を伝えなければならない (44点)	震災の体験への思いを生かしながら、記録と記憶を伝えなければならない (44点)

行政として本来やるべきことでも、できなかったことがある。市民が行政に積極的にかわりながら、自ら行動することも大切である (28点)

行政として本来やるべきことでも、できなかったことがある。市民が行政に積極的にかわりながら、自ら行動することも大切である (28点)	行政として本来やるべきことでも、できなかったことがある。市民が行政に積極的にかわりながら、自ら行動することも大切である (28点)
行政として本来やるべきことでも、できなかったことがある。市民が行政に積極的にかわりながら、自ら行動することも大切である (28点)	行政として本来やるべきことでも、できなかったことがある。市民が行政に積極的にかわりながら、自ら行動することも大切である (28点)

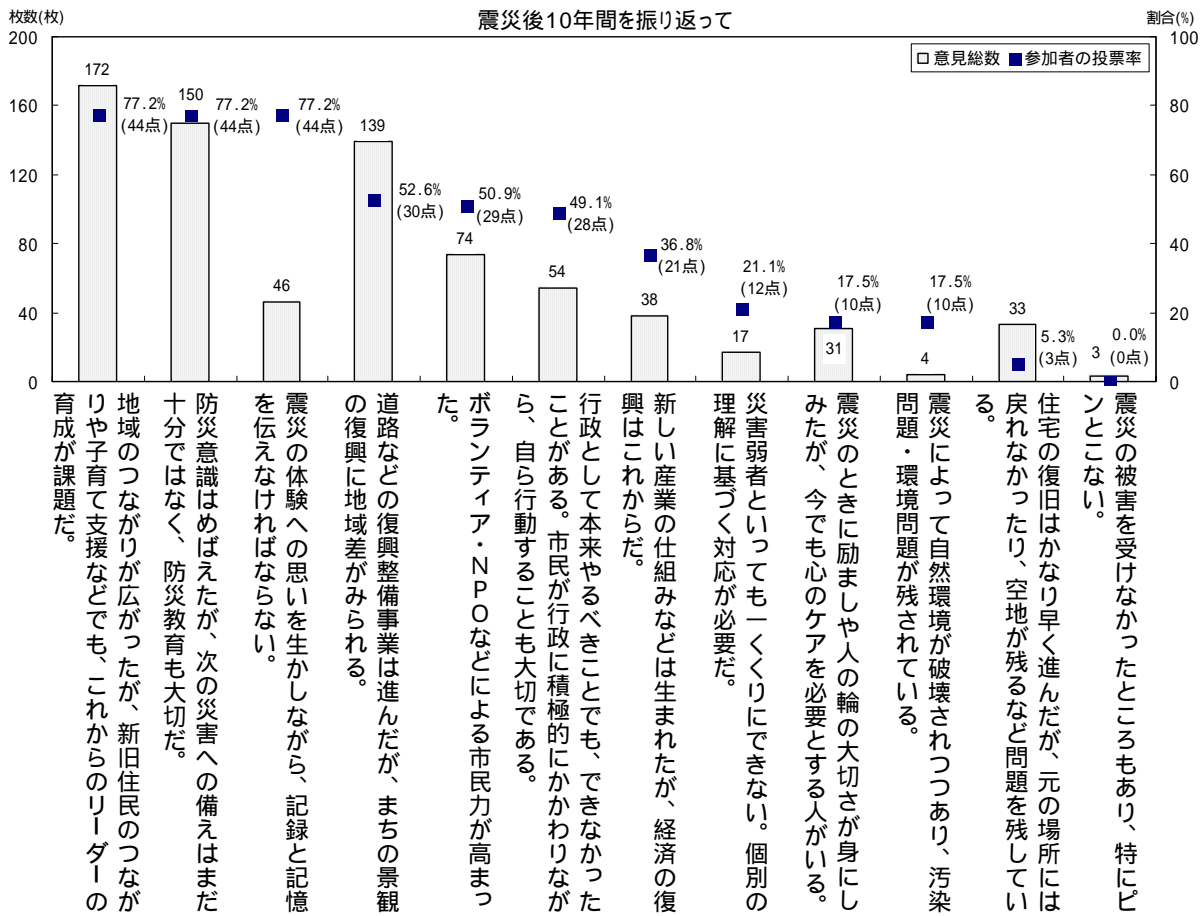
ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった (29点)

ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった (29点)	ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった (29点)
ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった (29点)	ボランティア・NPOなどによる市民力が高まった (29点)

震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題・環境問題が残されている (10点)

震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題・環境問題が残されている (10点)	震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題・環境問題が残されている (10点)
震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題・環境問題が残されている (10点)	震災によって自然環境が破壊されつつあり、汚染問題・環境問題が残されている (10点)

・「震災後10年を振り返って」について



総括ワークショップの参加者51名と検証部会長等6名を加えた57名で「震災後10年間を振り返って」をまとめ、順位付けを行った結果は上図のようになった。

その結果、「地域のつながりは広がったが、新旧住民のつながりや子育て支援などでも、これからのリーダーの育成が課題だ。」「防災意識はめばえたが、次の災害への備えは十分でなく、防災教育も大切だ。」「震災の体験への思いを生かしながら、記録と記憶を伝えなければならない。」の3項目がいずれも44点で、参加者の77.2%が投票している。

一方、意見数で見ると、最も多いのは、「地域のつながりは広がったが、...」(172枚) について「防災意識はめばえたが、...」(150枚)「道路などの復興整備事業は進んだが、まちの景観の復興に地域差がみられる。」(139枚)となっている。

また、投票数で見た上位3項目のうち、「地域のつながりは広がったが、...」と「防災意識はめばえたが、...」では、その中に含まれているほとんどの項目が、各地域で上位5位以内の投票数のもので構成されているが、「震災の体験への思いを生かしながら、...」については、各地域の投票では5位以下だったもので構成されている。

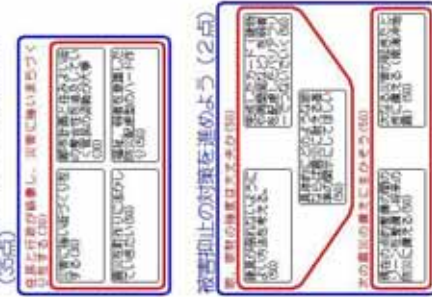
各項目にどの地域の意見が含まれているかで見ると、投票数の上位3項目と「新しい産業の仕組みなどは生まれたが、経済の復興はこれからだ。」および「震災のときに、励ましや人の輪の大切さが身にしみたが、今でも心のケアを必要とする人がいる。」には全地域の意見が含まれ、関心の高さがうかがえる。

将来に向けて(2004年6月6日:阪神北)

ボランティア活動の展開、サポート、連携、組織化が大切だ (39点)



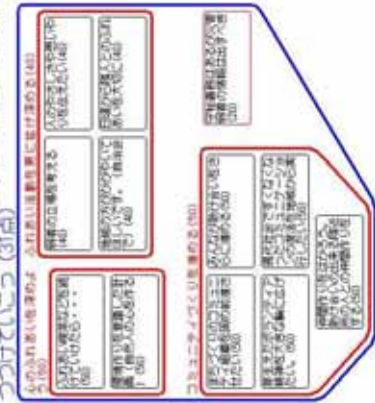
災害に強いまちづくりをしよう (35点)



地域のことば市民が考え行動することから出発する。そのためには、日ごろからのコミュニケーションが大切だ。 (36点)



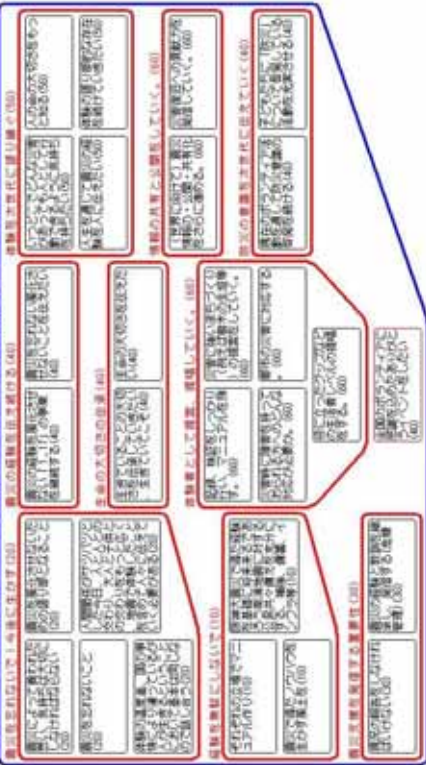
地域の中でのふれあいや助け合いをさらに深めよう (31点)



災害対応に自分たちができることがある (4点)



被災地として、被災者としての体験を発信し、次世代に継承していく (18点)



即座を超えた防災のネットワーク作りを市民と共に行成めよう (12点)



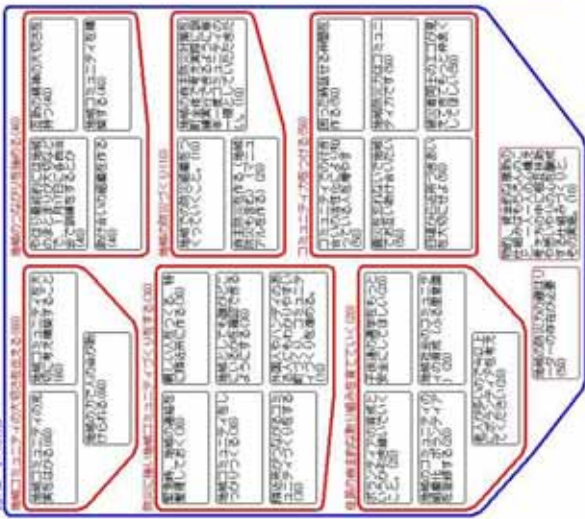
防災も福祉も行政・市民の協働が基本だ (28点)



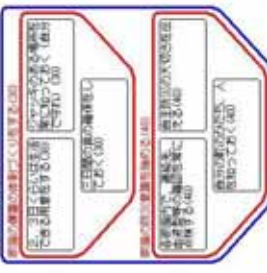
防災も福祉も行政・市民の協働が基本だ (28点)

将来に向けて(2004年6月6日:阪神南)

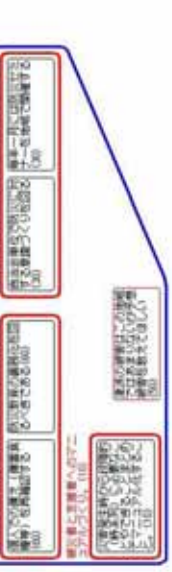
災害に強い地域のつなかりを強め、リーダーを育てることが大切だ。(22点)



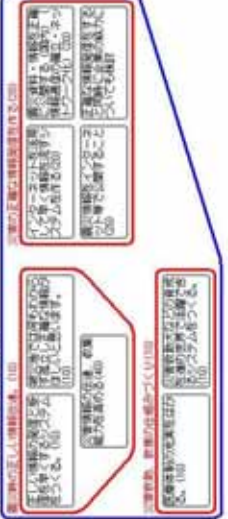
家庭でできる、災害への備えがある。(7点)



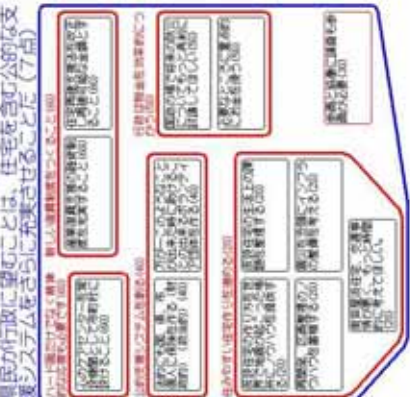
被害抑上や被害軽減の体制をより強めよう。(2点)



災害対応時の情報発信や救助・救援の仕組みをさらに良いのにしていく。(15点)



県民が行政に望むことは、住宅を含む公的な支援システムをさらに充実させることだ。(7点)



普段からの地域の人の和やつながりを地域の財産にしよう。(21点)



防災は自助・公助の役割分担が大事だ。(21点)



公共物や住宅の耐震性を高めていくことが、安心して生活するまらづくりに欠かせない。(21点)



車中心ではなく環境や芸術文化に配慮した人間中心のまちを作りたい。(10点)



豊かで得た経験や知恵を風化させることなく、継承し発信し、お返しをしていく。(36点)



将来に向けて(2004年6月20日:明石・三木)

ボランテニア精神を風化させずに、人間関係を大切にしてい
く。感動の気持ちを忘れないうまう。(30点)

ボランテニア活動の継続と発展を促す
1. ボランテニア活動の継続と発展を促す (10点)
2. ボランテニア活動の継続と発展を促す (10点)
3. ボランテニア活動の継続と発展を促す (10点)

ボランテニア活動の継続と発展を促す (10点)
ボランテニア活動の継続と発展を促す (10点)
ボランテニア活動の継続と発展を促す (10点)

防犯の防線的であるためには、**自助・共助・公助**の組み合わせが大切だ。(28点)

防犯の防線的であるためには、**自助・共助・公助**の組み合わせが大切だ。(28点)

自助・共助・公助の組み合わせが大切だ。(28点)

自助・共助・公助の組み合わせが大切だ。(28点)

外出困難な人達が自由にまち
に出て行く環境を整備しよ
う。(8点)

外出困難な人達が自由にまち
に出て行く環境を整備しよ
う。(8点)

災害に強く地域の発展を生かし
た街づくり・都市環境整備を真
実求める。(22点)

災害に強く地域の発展を生かし
た街づくり・都市環境整備を真
実求める。(22点)

災害に強く地域の発展を生かし
た街づくり・都市環境整備を真
実求める。(22点)

地域の中の人と人とのつながりを探る、多様な交流を促していく。(34点)

地域の中の人と人とのつながりを探る、多様な交流を促していく。(34点)

地域の中の人と人とのつながりを探る、多様な交流を促していく。(34点)

地域の中の人と人とのつながりを探る、多様な交流を促していく。(34点)

防災体験や訓練を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう。(32点)

防災体験や訓練を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう。(32点)

防災体験や訓練を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう。(32点)

防災体験や訓練を忘れずに、次世代や世界に伝えていこう。(32点)

地域問題の解決のためには、**市民と行政の参加と協働が重
要だ。(26点)**

地域問題の解決のためには、**市民と行政の参加と協働が重
要だ。(26点)**

地域問題の解決のためには、**市民と行政の参加と協働が重
要だ。(26点)**

・ステップ2：総括でのまとめ

復興10年総括検証ワークショップ(総括) 将来に向けて (2004年7月4日)

これから大切にしていきたい人生の価値を考えていこう (1点)

被災者支援活動の継続 (1点)	被災者支援活動の継続 (1点)
被災者支援活動の継続 (1点)	被災者支援活動の継続 (1点)

ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ (46点)

ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ (46点)	ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ (46点)	ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ (46点)
ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ (46点)	ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ (46点)	ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ (46点)

安全・安心して美しく、誰でもまちに出て行ける人間中心のまちづくりをしよう (41点)

安全・安心して美しく、誰でもまちに出て行ける人間中心のまちづくりをしよう (41点)	安全・安心して美しく、誰でもまちに出て行ける人間中心のまちづくりをしよう (41点)
安全・安心して美しく、誰でもまちに出て行ける人間中心のまちづくりをしよう (41点)	安全・安心して美しく、誰でもまちに出て行ける人間中心のまちづくりをしよう (41点)

地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう (45点)

地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう (45点)	地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう (45点)	地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう (45点)
地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう (45点)	地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう (45点)	地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広めていこう (45点)

被害抑止策・被害軽減策・災害対応・復旧復興のすべての局面に行政は力を入れるべきだ (32点)

被害抑止策・被害軽減策・災害対応・復旧復興のすべての局面に行政は力を入れるべきだ (32点)	被害抑止策・被害軽減策・災害対応・復旧復興のすべての局面に行政は力を入れるべきだ (32点)	被害抑止策・被害軽減策・災害対応・復旧復興のすべての局面に行政は力を入れるべきだ (32点)
被害抑止策・被害軽減策・災害対応・復旧復興のすべての局面に行政は力を入れるべきだ (32点)	被害抑止策・被害軽減策・災害対応・復旧復興のすべての局面に行政は力を入れるべきだ (32点)	被害抑止策・被害軽減策・災害対応・復旧復興のすべての局面に行政は力を入れるべきだ (32点)

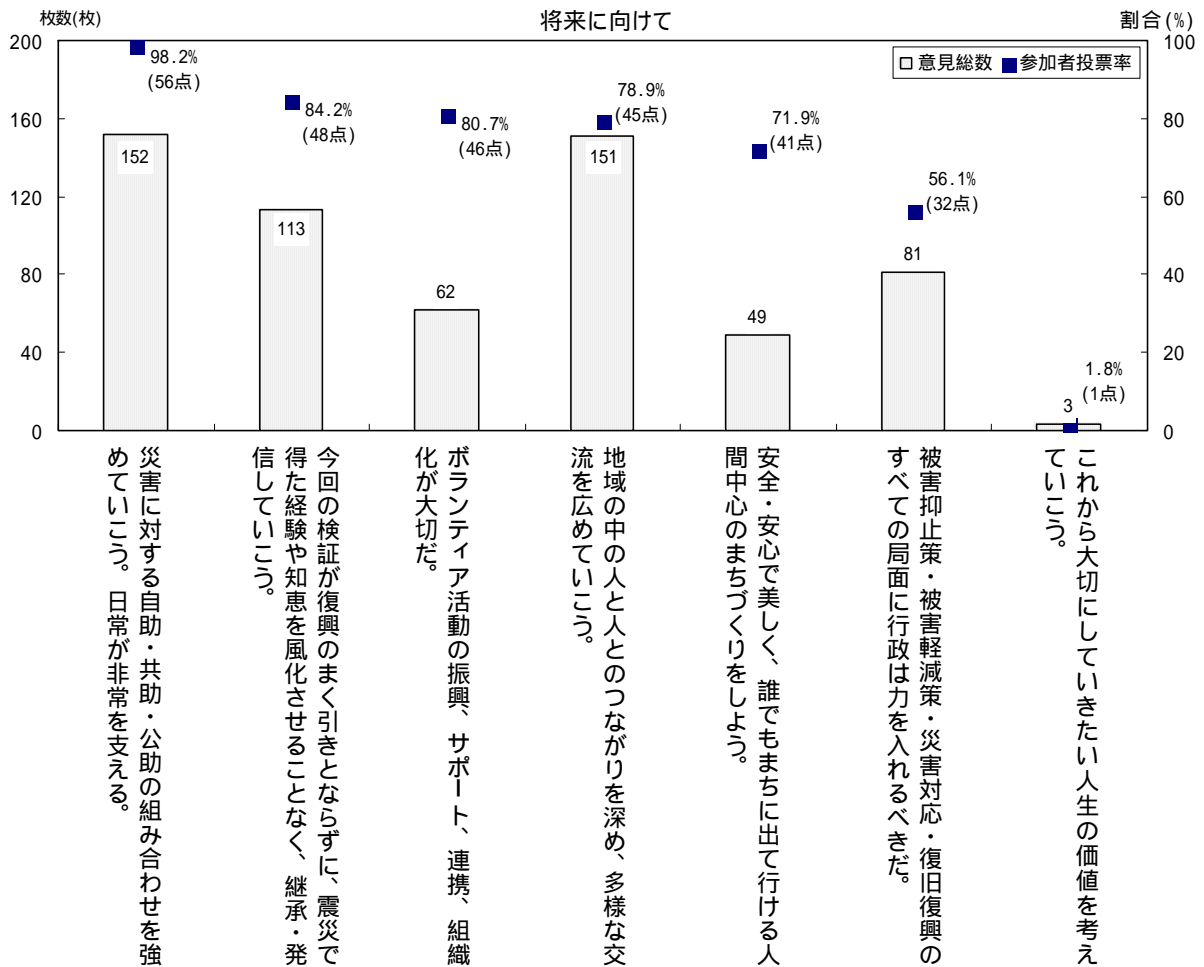
災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。(56点)

災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。(56点)	災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。(56点)	災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。(56点)
災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。(56点)	災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。(56点)	災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。(56点)

今回の検証が復興のまっ引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう (48点)

今回の検証が復興のまっ引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう (48点)	今回の検証が復興のまっ引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう (48点)	今回の検証が復興のまっ引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう (48点)
今回の検証が復興のまっ引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう (48点)	今回の検証が復興のまっ引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう (48点)	今回の検証が復興のまっ引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう (48点)

・「将来に向けて」について



総括ワークショップの参加者51名と検証部会長等6名を加えた57名で「将来に向けて」をまとめ、順位付けを行った結果は上図のようになった。

その結果、投票数が最も多かったのは、「災害に対する自助・共助・公助の組み合わせを強めていこう。日常が非常を支える。」(98.2%、56点) について「今回の検証が復興のまく引きとならずに、震災で得た経験や知恵を風化させることなく、継承・発信していこう。」(84.2%、48点)、「ボランティア活動の振興、サポート、連携、組織化が大切だ。」(80.7%、46点)となっている。

一方、意見数で見ると、最も多いのは、「災害に対する自助・共助・公助の...」(152枚) 次いで「地域の中の人と人とのつながりを深め、多様な交流を広げていこう。」(151枚)、「今回の検証が復興のまく引きとならず、...」(113枚)と、これらはいずれも100枚以上の意見が包含されている。

また、投票数の上位3項目においては、「10年間を振り返って」とは異なり、各地域の上位5項目との関係は明確にはみられなかった。

各項目にどの地域の意見が含まれているかで見ると、「これから大切にしていきたい人生の価値を考えていこう。」を除いて、どの項目にも各地域の意見がほぼ均等に含まれている。

・総括ワークショップの様子



齋藤副知事のあいさつとともに開始



まずはアイスブレイクから



すぐに熱心な話し合いが始まった



旗を使ってのステップ1のまとめ



続いてステップ2でも積極的な意見が飛び交う



各地域とも時間を忘れるほどの話し合いが続く



再び旗上げによるまとめ



丸シールで重要だと思われる意見に投票

参考資料

(アンケート結果)

アンケート結果

阪神南地域（8名）

- 1．ワークショップに参加された感想や、ワークショップの運営などについて今後、改善すべきと思われる点があればお書きください。
 - ・短時間ですべてのまとめができたこと。参加してよかった。
 - ・町からの指名で参加しました。ワークショップについて学んだことが老人大学や地域の中で活かしてゆくことに喜んでいきます。
 - ・健康とか文化といった分野ごとにグループをわけて具体的課題（あらかじめ拾いあげておく）について検証していく手順の方が意見を出しやすかったです。
 - ・部会によってテーマの検証をするのかと思った。（健康福祉部会なら、そこから震災を考えていく。）参加者の震災への思い等を聞きたかった。
 - ・ワークショップで発言中に何度もマイクが入るので、他の人の意見が聞き取りにくい。早くしろといわんばかりの進行でせからしいワークショップだと思った。初めてワークショップに参加する人にとってあまりいい雰囲気とは思わない。グループごとにパーティションを設置するなど会場にもう少し工夫がほしい。
 - ・みなさんとともに意見を出し合いましたので、楽しく参加できました。
 - ・5、6名での作業の方がよいと思います。

- 2．復興10年で被災地ができたこと、できなかったことや将来に生かすべきことについて、ワークショップでは十分出せなかった意見等があればお書きください。
 - ・健康福祉の視点から、身障者やお年寄り、赤ちゃんをかかえている家族は、どうあるべきか。東浦町では、上記の方々の生きがいに「ふれあいサロン」を各地域で開いてコミュニケーションをはかっている。
 - ・震災はそれまでのまちづくり、人づくりが問われてくる。人にやさしいまちづくりの中には障害を持つ人たちも入っている。保健・福祉部会の中には高齢者はあっても、障害者はない。少数者である障害を持つ人たちが町の中で生きていける環境にあるかどうか、すべての人にとって暮らしやすい町がどうかにつながっているのではないかと。震災に強いまちづくりの大きなヒントになると思う。
 - ・他にも同じような学校もありますが、震源地の淡路高校は、避難地となり学校は休校の上、当時の3年生になる生徒達は人生において思い出の修学旅行をしておりません。休校の間も一生懸命ボランティアをしていました。いつかできなかった修学旅行がかなえられたらと願います。
 - ・なし。

- 3．その他、復興10年総括検証・提言事業に関することや震災への思い、震災復興についてのご意見、ご感想など、ご自由にお書きください。
 - ・震災後、地滑りのあった個所や海岸あたりの地価が下がり、売れない。地価の問題も解決しなければ本当の復興につながらないのでは。
 - ・復興10年の取り組みと成果をとりまとめタイムカプセルにして次の世代に送るようにはどうですか。

- ・将来、起こるかどうかわかりませんが、情報の提供を充分にしてほしい。記録の保存もよろしく。
- ・古い昔ながらの木造家屋が悪くなり、まちの景観が落ち着かなくなったので、今、残っている家屋などは今後、大切に守ってください。
- ・復興事業を早くしてもらいたい。

阪神北地域（23名）

- 1．ワークショップに参加された感想や、ワークショップの運営などについて今後、改善すべきと思われる点があればお書きください。
 - ・今回のワークショップで会場の皆様の声が、メモ書きに反映されて、大変よかったと思う。参画と協働、まさにその通り。時間的余裕を持って討議してほしい。
 - ・学生さん方の運営・協力がスムーズでよかった。話し合いのテーマ説明が不足。
 - ・参加して大変よかった。
 - ・assistant達の実力が不足!!事前にもっと勉強しておくべき!!
 - ・初めてだったのでわからない。
 - ・今回はどのように人選されたのか。各グループともに素晴らしいメンバーであった。
 - ・面白かった。
 - ・時間が少し短すぎる感じを持ちました。
 - ・設問に対する意見とは、異なりますが、様々な主旨の違うイベント・ワークショップに参加される人がほとんどいつも同じ顔ぶれ（このような活動に参加しなくても自主的に活動している人が多い）なので、まとまった結果が本当に市民の意見、考えを反映しているか疑問が残る。
 - ・ワークショップで出た意見をどのように活かしていけるのか？
 - ・スピーディーな作業でスムーズにいった。10年前が改めて思い出され、体験したことの強さを感じた。会として楽しくできた。
 - ・時間もほぼ定刻通りに進みよかったですと思います。あえていうとすれば、プロジェクターの表示がもう少し大きく表示できればよかった気はします。
 - ・各地域に細分化し、幅広い意見をまとめて、当ワークショップに参加するのがベターだったのでは！
 - ・十分に活かしてほしい。
 - ・参加してみなさんの意見が聞いてよかった。大変勉強になりました。
 - ・スクリーンの字が小さいのでわかりにくい。
 - ・事前に方法の連絡はあったが、主旨の説明を作業の確認のためにもあったほうがよいと思った。
 - ・今回は初めて参加させていただきました。
 - ・参加者の方々の震災に対する様々な思いを聞かせてもらって、共通の意見が多かったと思った。
 - ・会場の都合もあると思いますが、10～13時は時間が中途半端だと感じました。
 - ・少ない時間で、多くの意見があり、グループに分ける作業が大変であった。
 - ・時間が少なかったのが残念。

- 2．復興10年で被災地ができたこと、できなかったことや将来に生かすべきことについて、ワークショップでは十分出せなかった意見等があればお書きください。
 - ・震災被災前1年前より、火災対策のため防災組織を立ち上げていたことにより、震災後、復興がいち早く完成した。（宝塚市売布地区）
 - ・地域の協力体制づくりが多数の人に述べられているが、避難所での人々が、事態の起こった時

点では、みんなが協力しているように見えたが、数日経ったくらいから人々のエゴが出だした。救援物資でも我先に取ってしまうことがないように。

- ・様々な復興支援が県からの助成で行われたが、すべての助成金は半額補助であった。ボランティアの知恵と力を集めての事業であるので、せめて2 / 3 補助にすべきでないか。
- ・別になし。
- ・救援活動、ボランティア活動をスムーズに行えるように、危機管理システムの充実が必要。
- ・フェニックス事業を通じて地域で理解されたと思っていたのに意外だったと、現時点ではくやしきく思っている。
- ・行政側だけがコントロールするのではなく住民と対等な立場で事業、etcを進めていくのが better と思います。
- ・ボランティアをしたいという思い、物資の提供が自己満足？にとどまっているのではないかという反省がある。客観的にそのような点についての評価を知りたい。
- ・私事ですが、去年、大病をしました。突然だったことで私には震災が来たのと同じです。立ち上がるために多くの方の応援をいただきました。仲間の大切さ、人の大切さを痛感しています。
- ・交番の話。県警、県行政の回答が明確でない。
- ・地域によって温度差があるのでそれを踏まえた。活動を展開していかなければならないと思う。
- ・いざとなった時にそれだけ活動ができるか。
- ・将来、来るであろう東南海地震に備えて一層の啓蒙運動を公民で行うべきと考える。
- ・一人暮らしのお年寄りへの心のケアの必要性。
- ・防災、防犯組織の確立をおこなう。情報の伝達が一番大事 末端にいかにして伝えるかを考えるべき。

3 . その他、復興10年総括検証・提言事業に関することや震災への思い、震災復興についてのご意見、ご感想など、ご自由にお書きください。

- ・恐怖を持つのではなく、常に防災意識を持つ近隣小グループによる組織づくりが大切。我々はこの組織づくりにより、県第1号再開発ビルがスムーズに完成したことを自負に思う。
- ・幸いにもわが家は、コンクリート造であったがため、被害は僅少であり、近くの小学校に朝早くからお手伝いに行きました。行政の対応は、救援物資が届けられたが、私たちでお釜と湯をわかし暖め皆様にお配りした。300~400人の被災者にパン等物資を配ったが、その場にリーダーシップを取る人がおられ、まことにうまくいきました。テントの中でも皆様が家族のように味噌汁等食事を取り、廃材を切断して、暖をとってもらった。最後まで残った人に母子家庭の人が家はつぶれ、住む家がない、この地域に住みたいが資金がないと途方に暮れていた人がおられたのが気がかった。
- ・どのような形で集められた参加者かわからないが、検証・提言事業にどの程度深みあるものになるかどうか不明である。復興住宅や、仮設住宅の現況、震災当時の様々な反省など、深く、幅広い見地から検証する必要があるのではないか。積極的にボランティアに参加できた人たちだけの意見ではよいものにならない。
- ・ワークショップで各グループのまとめたことを文書にて報告してほしい。
- ・心のケアの問題が大きくなっているように思えました。

- ・急には考えられない。
- ・震災時に一刻の感情で対応しない。
- ・十年一昔といいますけれど、震災のことは忘れていきます。次に来る南海地震に向かって、考えていかなければならないと思う。
- ・防災へ向かって、人的、物的被害を着実に減少させていくべきだと思います。
- ・命の大切さを大きく感じたこと、生きる力（復興力）の強さ、またいざという時の地域の助け合いがマンザラでもない、捨てたものではないと思った。
- ・山手住宅へのバス運行。売布神北駅前再開発で駅前が整備された。
- ・震災時に活動していた方と久しぶりに会うことができ、前向きな意見発表ができてよかった。
- ・命の大切さを伝え続けてほしいと思います。被災者としての立場から、もっと備えもしっかりしていきたいと思いました。
- ・仮設住宅が遠隔地にでき入居者の利用がつかみにくいところがあった。一時的なものなので被災地にいるほうが地力（民力）の復旧には有効ではなかったかと思う。
- ・震災時、震災後に自分で何もできなかったのではないかと反省している。
- ・ご苦労様でした。

阪神南地域（18名）

- 1．ワークショップに参加された感想や、ワークショップの運営などについて今後、改善すべきと思われる点があればお書きください。
 - ・ボランティア精神だけでは継続はできない。でも大切なのは心なので難しいところだと思います。
 - ・先生、学生の指導力がよく、まとまったと思う。
 - ・もう少し拾いスペースで。
 - ・非常によい運営だと思います。行政が開催する会は、どうしても高齢者が多いので、今回のように学生さんが入ることで、フレッシュな気持ちで参加できた。
 - ・各班10人では少ない、20人くらいにしてはどうか。人選も広く各界より選ぶこと。
 - ・アナログとハイテクを見事に融合し、なんだかすばらしいものができた気がする。が、表面的すぎる気がする。
 - ・特になし。時間が長かったように思う。
 - ・学生のキビキビした態度に好感が持てた。
 - ・初めてなので特にありません。
 - ・震災体験者同士の集まりだったので、お互いに共通理解がすぐにできたことがよかった。
 - ・初めてワークショップというやり方を体験しましたが、大変気軽に意見をいうことができました。運営された先生、学生さんに感謝します。
 - ・意見を考える時間があまり取れなかったので、事前に考えをまとめてくればよかったと思う。（予習をさせる）本日まとめたものに追加意見などを提起するしくみ（復習のしくみ）があればよいのでは？（まとめるのが大変？）
 - ・初めての参加で何かわからず、皆様の一生懸命さについていくのがやっとでした。
 - ・3時間の時間が短く感じた。
 - ・事前によく準備されていたので、みんなの意見がスムーズに出すことができた。PCで情報が早くまとめられて共有化（全員で）することができてよかった。
 - ・地域の方々のいろいろな意見を聞くことができ、とてもよいワークショップになったと思います。学生のみなさん、ご苦労様でした。
 - ・お世話をしてくれた学生の方には感謝しています。もう少し時間にゆとりがあればと思いました。
 - ・さらに多くの人が必要か。

- 2．復興10年で被災地ができたこと、できなかったことや将来に生かすべきことについて、ワークショップでは十分出せなかった意見等があればお書きください。
 - ・ハード面ではすごい発展だと思います。
 - ・二重の借り入れ、経済低迷により家庭、企業は、まだまだ苦しんでいるので、震災による既存借り入れに対する支援を継続、打ち切った施策の復活をしてほしい。
 - ・十分出しました。
 - ・特定疾患患者に対する医療、食事対応の充実ができていない。（私の子供ですが、インスリン依存

型糖尿病でインスリンの確保、食事食材の確保（常に必要があるため）

- ・国民全員に防災教育の徹底を図るべき。
- ・特になし。
- ・自分なりの意見は発表できた。
- ・やはり被災地以外の、市・町の応援体制が充分でなかったこと。
- ・他のグループからも意見として出ていましたが、自助、公助、共助の役割分担、しくみづくりがますます重要であると感じました。
- ・全体に再建されたが、人の心のケアもこれからのところもあるように思います。
- ・被害程度の温度差が防災活動の温度差になる。

例：室内の家具が倒れなかった家庭と倒れた家庭では恐怖感や家具の固定に差が出る。

- ・行政が主導する復興事業に住民も参画し、ともに計画段階からつくっていくシステムが大切である。上からの指示、トップダウンからボトムアップになるよう、徐々に変わってきたと思う。

3．その他、復興10年総括検証・提言事業に関することや震災への思い、震災復興についてのご意見、ご感想など、ご自由にお書きください。

- ・さすがmind in JAPANだと思います。他の国ではこれだけの復興は無理だと思います。
- ・よい検証で記録にしてください。
- ・けっして、祭りだけではためであり、次世代及び世界へ発信できるものにしてほしい。
- ・官民の一体感をさらに強くし、悲しい思いを風化させないようにいい伝えていく。自助努力ができる人間形成（教育）が必要。
- ・＜1/17＞を未来永劫、伝承の必要あり。やはり戦災と震災との担い方が違うので。
- ・県の復興10年の事業が、充実したもの、全国、全世界へ発信できる取り組みとなるように期待しています。
- ・被災した地域住民に限らず、ボランティアなどで支援をした人の意見なども取り混ぜて、何が起こり、何が必要とされ、今後どうすれば、よいのか？を定期的に検証・発信するしくみづくりが必要では？今回の震災に限らず、いくつかの災害体験者をミックスすることの必要。
- ・10年経つと忘れかけたところがあり、新しい人たち、若い人たちにまた思い出せる風化しないように残してほしいです。
- ・いろいろなところで復興事業、支援が行われているが、情報がまだ一部の人にしか伝わっていないのが、残念。県民の意識、啓発をもっと進める。
- ・実際に、被災した者にとって、一生忘れることのできない体験をし、大切な家族を丑内、この思いを風化しないよう、これからも次の世代にいい伝えられたらと思います。

神戸地域（13名）

- 1．ワークショップに参加された感想や、ワークショップの運営などについて今後、改善すべきと思われる点があればお書きください。
 - ・初めての参加でしたが、会の流れが速くて慣れてきた頃に終わった。最後のまとめが終わった時点で、全員に確認、質問の時間がなかったように思う。
 - ・「市民の意見を代表する」ということから考えれば、参加メンバーは統計的な手法で選んだ方がよいのではないのでしょうか。
 - ・このテーマをこの手法でやるには時間不足。
 - ・ワークショップに関する技術進歩には、目を見はるものがありました。しかし、毎回、同じことを感じるのですが、意見を汲み上げる手取り早い方法であっても、参加者の交流にはなりませんね。同じメンバーで3回くらいにわけてプログラムを組めば、もっと面白い中身の濃いものができるように思います。
 - ・即座に集約結果の出るシステムに、時代の進展の早さに改めて遅れを知った。
 - ・よかったです。学生さんも、みなさんの意見を出すためによくがんばっておられたし、ソフトもよかったです、流れもよかったです。時間が延びたのは、ソフトが少し、この形式に合わなかったためと思いましたので、改善提案をお渡ししとききました。
 - ・要望は特にありません。多々、参考になる点がありました。ありがとうございました。
 - ・震災を経験された多くの方のいろいろな意見を聞くことができ、よかった。
 - ・全面復興を心から願って、少しでも多くの意見を聞きたかった。もう少し広い会場、少人数を希望します。
 - ・自分の思いと他の人の思いはどの点が違うかを知りたいと思い参加しました。ワークショップの運営がわからない人があるので、初めに具体的な説明が必要（ポストイットの使い方）。
 - ・災害に備えて、また被災地として、今回のようなワークショップはとても意義がある。みんなが熱心に討議した。
 - ・自分の強い思いがグループの人にわかってもらえないのか、長々と話をする人がいて進行をさまたげている場合がある。
- 2．復興10年で被災地ができたこと、できなかったことや将来に生かすべきことについて、ワークショップでは十分出せなかった意見等があればお書きください。
 - ・大切だと思われる意見に関しては、少々の説明があってもいいと思う。十分に意見が出せる雰囲気ではなかった。
 - ・復興のまちづくりでは、「安全・安心」が大きな目標になっていたように思いますが、「共生」や「多様性」への配慮が少なくなると個人エゴや地域エゴといったところへ、また逆戻りするような気がします。いずれにしても「安全・安心」は、大切だが、あまり前向きな標語とは思えない。そろそろ見直す時ではないか。
 - ・震災の原因、地球温暖化の取り組みを強調すべきだった。身障者への声かけ運動の活動不足を身に沁みて感じました。
 - ・もっと住民主体となった...というか、住民の参加できる活動ができれば、もっといいと思いま

す。例として、金沢の美術館創立に、ものすごく住民たちが関わって、いい形ができているのをHPで見ました。ほんとにすばらしく、ぜひ神戸、兵庫もそうなってほしいので、よかったら、ごらんいただけたら幸いです。

- ・災害用としてそれぞれ安全帽、スニーカー、ラジオ付、ブザー付の大型電器を用意することを教育すること。在校中の児童、生徒用に安全帽を用意する。
- ・震災復興基金があることにより活動できた。今後は、人材育成のための資金が必要である。
- ・元の住所に戻れない人たちが生きている間に希望をかなえてあげたい。主婦でも有意義に生きる活動に参加し続けたい。
- ・少数意見も大切に思う。
- ・同じようなことでも個人差・地域が多く反対意見が多い。

3. その他、復興10年総括検証・提言事業に関することや震災への思い、震災復興についてのご意見、ご感想など、ご自由にお書きください。

- ・大切な意見もたくさん出た。「震災時に弱者には特別な対応が重要だ」という項目に「震災で障害者となった弱者…」はひとくくりにならないと思う。別問題だと思う。
- ・近所の人、友達の中で「人と防災未来センター」を見学した人が少ない。これを見学することが防災の出発点になるような気がする。
- ・検証することは重要であるが、それが目標ではないという自覚をみんなが共有しなければならない。検証から導き出された新しい地域社会像に向けてプログラムをつくるスタートにならないと検証の意味はない。
- ・罹災3度、その都度、復興の短縮に力強さを感じました。
- ・今回、いろいろとメモをとることが多すぎて、すぐに浮かびませんが、私は、“ありがとう神戸”という郵便や地域で全国にお礼をいう活動が好きでした。まだまだお礼を返しきれていないと思います。これからも、全国に対し、その気持ちを持ち続け、返せる組織をつくってください。
- ・いろいろな人に十分に理解してもらえる場を今後も続けて行ってほしい。
- ・児童・生徒の心のケアのための復興担当教師を文部省の予算でなくした。まだ何年か必要と思う。
- ・災害に備えて平素から、救急、消火などの訓練が必要である。

明石・三木地域（13名）

1. ワークショップに参加された感想や、ワークショップの運営などについて今後、改善すべきと思われる点があればお書きください。
- ・全体の進行について、最後まできりりとした中だるみもない、それかといって暗い雰囲気でない、笑顔の中で真剣なまなざしで時間に追われたりしましたが、2部からは進めることが理解でき作業ができました。講師、学生さんまでチームワークのよさに乗せられました。
 - ・ワークショップの進行はすばらしかった。学生さんの協力には驚きました。時間をかけて話し合ってみたい。
 - ・短時間でうまくまとめられたのには感心しました。
 - ・初めての体験で大変とまどった。三木市の方と交流できてよかった。
 - ・2部の将来のところは、その前にワンステップが必要ではなかったかと思われる。
 - ・問題処理等にスピード感があってよかったと思う。
 - ・参加させていただき、よい勉強になり新たに考えさせられました。
 - ・本日、参加してよかった。
 - ・初めての体験だったが、いいことだと思うので、がんばってほしい。
 - ・ワークショップに参加するのは、初めてですが、有意義に参加できました。
 - ・初めてのことですごくとまどったが、こんな方法で意見をとることができるんですね。
 - ・復興について、年2回程度、このような会合を継続すべき。
 - ・初めての参加で、いろいろな意見を聞かせていただきましたが、進め方はとてもよかった。うまくスムーズに運営されていて感心しました。
 - ・時間の取り方がよかった。
 - ・進め方はよかったが、部屋が少し狭いようです。
 - ・非常によかったと思います。いろいろな方法もありますが、わかりやすく、また早くまとめられてすばらしい。
 - ・スペースを広げたほうがよい。内容が多すぎるので絞ったほうがよい。
 - ・ワークショップはこれで2回目です。前回よりも（前は福祉関係）今回のほうがスタッフの皆様のリダーシップがすばらしく、短時間ですばらしい提案が出て大変良かったです。学生のみなさんは感じがよく、すばらしい若者たちに出逢えてよかった。
 - ・楽しく参加できた。今後も時間があれば参加したい。（具体的な説明がやや乏しい。）
 - ・見ず知らずの人とわいわいやるのが楽しかった。
 - ・部屋が狭かった。
 - ・初めての経験で和やかにでき、良かったです。
 - ・初めての参加で運営方法としては、楽しくとても有意義でした。
 - ・ステップ1、2であるが、細かく分けて、詳細な議論を行ってもよいのでは。
 - ・班内の意見のとりまとめの時間が不足するため、時間配分を考えてほしい。
 - ・各種団体、各年代別により、もう少し人数を集めてすること。
 - ・立木氏の進行がそつなく進み、学生さんの協力のもと、有意義な時間でした。
 - ・参加された方は、積極的なご意見をお持ちの方ばかりで、学習が楽しかったです。

- ・部屋が狭い。学生リーダーはよかった。
- ・内容が盛りだくさんで、すごく忙しかった。
- ・3時間は、長いようで短いですね。時間はこれくらいが適当だと思います。
- ・時間がやや長い。
- ・初めてこのような席に出席しましたので、わかりづらく、困りました。思い出して文章化することは難しい。

2. 復興10年で被災地ができたこと、できなかったことや将来に生かすべきことについて、ワークショップでは十分出せなかった意見等があればお書きください。

- ・10年を振り返って、自分がその時期に何をやったか、何に取り組んだかと考えたが、1人では何もできなくて地域の人との連携で進めてきたことを振り返るだけでなく、将来へこれからの世代の方や実体験のない方にも伝えていくことが大事だということもこのワークショップで学び、その資料が手元にあり、復習できることに感服した。
- ・ボランティアに参加したこと、していること、継続が大事だということ。
- ・人の流出を復興作業の一環として防止してほしい。
- ・核家族のきずなをどう考えるべきか。
- ・環境問題を取り入れた意見が出てこなかった。
- ・別になし。
- ・身近な人と人とのかわり、もう一度、昔の隣保活動に近い人間関係が生まれるように努力したい。
- ・カードにも記入しましたが、ボランティア活動をより進めていきたい。
- ・人の心が非常に温かく感じられるようになった。この気持ちがいままで続けられますように。
- ・高齢化に伴い、高齢者、(経済的な)弱者に対する行政のサービスが、まだまだできていないと思います。独居老人の死(何日も経たないと死がわからない)など、心寂しいことが聞こえてまいります。行政はもっと有形無形へも心配りが大切だと思います。
- ・自分たちで地域性を取り入れたまちなみ景観を生かすアドバイザーを育成する。
- ・とくになし。
- ・防災に対する意識をいままで持続させるためにどうすればよいか。時の流れとともに風化していく。
- ・ライフラインの大切さを充実させてほしい。行政とボランティアの一体化。
- ・風化する市民、県民への啓発が必要である。自分の生活以外は、関心が少ないため、もっとPRすべきである。
- ・自治体は財政難で大変でしょうが、助成金の継続をお願いします。
- ・世代間交流ができればよかったと思います。
- ・災害時のボランティア拠点をつくることを常に考えておくことが大事である。
- ・多くのボランティア団体ができ、10年を期に助成金等が少なくなると思います。ぜひともこの点を考えていただきたいです。

3. その他、復興10年総括検証・提言事業に関することや震災への思い、震災復興についてのご意見、ご感想など、ご自由にお書きください。

- ・ ちょっと外れるかもしれませんがある報道番組で次のような災害の時、責任者の一人としてあなたはどちらを選びますかということでした。

病院の事務方で、自分の病院で診察が終わり、患者の状態から他の病院へ転院してもらうように患者さんにも了解を得て、ロビーで椅子に掛け、待ってもらっていました。そこへカメラマン（報道）が椅子に掛けている患者さんの写真を撮り始めた。病院事務方のあなたは
どうする。 撮影を許す 撮影させない

避難者が300人います。しかし、食料の調達は200人分です。100人分が不足しています。ここでのまとめ役のあなたは 配布する 配布しない

被災者用仮設住宅の資材調達ができました。これで9割の方に割り当てることになります。しかし、建設用地の確保ができていません。そこで公立学校の運動場を使いたいと要請があったことが判明した。その時、あなたは 運動場に建設 運動場に建設反対

3つの事例を紹介いたしました。震災についての様々な研修に幅広く事例を出し、予備知識としてみなさんと会話を進めてはと思い、的違いかもわかりませんが記載しました。

- ・ もう震災がないことを祈ります。
- ・ 戦後の教育に疑問を持っている。体験者（震災だけでなく、戦災、人災も含め）、生存者が少なくなっているので、記録を残してほしい。
- ・ 災害を風化させず、次世代へ伝承できればと思います。
- ・ 消防団活動の体験を忘れないようにしたい。
- ・ 少子化、高齢化の中、解決する問題があるように思われる。
- ・ 地震に対する予知、予報、正確な情報および啓発をお願いします。
- ・ 震災時のそなえをしておかなければと改めて考えさせられました。
- ・ 震災は体験したが、もっと地域に根強く発信してほしい。
- ・ 本年は、震災復興10周年。より盛り上げていきたい。
- ・ 県民参加のこのような試みは、進めるべきである。
- ・ 特になし。
- ・ 行政の素早い支援活動組織ができているのか？特に独居老人への。
- ・ 三木市は、老朽木造家屋が多いが、大規模地震が心配。
- ・ 震災が風化しないように、体験を通して、伝えていきたい。地域を通じて心の通ったまちづくり、人づくりを心がけていきたい。
- ・ メモリアルウォークは今後、続けてほしい事業です。
- ・ 災害を受けた者は、動くことができない。自分のこと、身内のことでいっぱい。落ち着かないと他の人のことはできない。
- ・ この意見が、今後、県政等にどのような形で反映するのかがわかりにくい。
- ・ このことが風化されることなく、語り継がれることを望みます。
- ・ まだ、震災の跡が見られるところがある。神戸では、更地が多く、人口が減っている。